

## 第二十四章 第十六回黨大會——展開された社會主義的攻撃の大會

### 大會前の情勢

二年半の間に、第十五回黨大會から第十六回黨大會に至る間に、ソヴェト國の内部では巨大な變化が行はれた。この期間にソヴェト聯邦の社會主義經濟の鞏固化の仕事において巨大な成功が達成された。

廣汎に展開された農業の集團化は労働者階級と基本的農民大衆——貧農および中農——との同盟を——而も新しい基礎の上に更に一層堅固にした。コルホーズ農民はソヴェト權力の堅固な支柱となつた。それと同時に都市においても農村においても、またソヴェト聯邦に保存された資本主義的諸要素の社會主義的農業のすべての着手に對する極めて激烈な闘争が特に強く展開された。

この闘争は資本主義から社會主義への過渡期における階級闘争の緩和に關する右翼日和見主義

者の理論、社會主義的經濟體制へのクラークの平和的成長の理論、階級闘争の『滅滅理論』を覆没させた。資本主義的諸要素は、自己の發展において制限されながらも、激烈な抵抗なしに自己の地位を退却することができなかつた。これらの要素と勝利を以て攻撃する社會主義との間の格闘は不可避免的であつた。工業化、コルホーズ建設およびソヴェト權力のその他の諸方策は、都市および農村の資本主義的要素の遺物を益々窮地に追ひつめた。農業における自己の生産的地位を鞏固にしたクラークは、自己の制限に向けられたあらゆる方策を、激烈な闘争を以て迎へた。クラークが行つた闘争は極めて種々の形態を帯びた。それはクラーク的要素によるソヴェトの占領の周圍に集中され、中農の中の煽動や、農村の最も積極的な活動家に對するテロリズム的攻撃や、コルホーズおよびソフホーズの放火の中に現はれた。クラークはかゝる方策によつて社會主義の攻撃を喰ひ止めようとした。

農村におけるクラークの反革命的進出は單獨ではなかつた。都市および工業中心地における彼の同盟者たるものは、以前のブルジョアジーの遺物と舊専門家の一部とより成る妨害者の反革命的組織であつた。これらの組織はソヴェト經濟の殆ど全部門において妨害者の活動を行ひ、ソヴェト同盟の社會主義建設を破滅せしめようとした。かくして激烈な階級闘争の條件の下に、

全能的な妨害者組織の爆破作業の條件の下に、ソヴェト聯邦のプロレタリアートは社會主義建設の道を前進しなければならなかつた。我々の發展に抵抗しようとした反革命的な企圖にも拘らず、この期間における社會主義建設の成功は、たゞ友人の期待のみならず、また敵の期待をも凌駕した。

### 第十六回大會の前夜における右翼的および『左翼的』 偏向に對する闘争

我々が上に見たやうに、第十五回大會と十六回大會との間の時期に、黨は、極めて種々の形態を帯びた理論上並びに實踐上におけるあらゆる日和見主義的歪曲に對して最も決定的に闘争した。右翼、日和見主義者は實踐において絶えず七時間労働日の實施に反抗し、最小限綱領の方へ向いた資金建設計畫の作成に際して『自己保險』に訴へ、五ヶ年計畫の遂行を一見妨害する『客觀的條件』の理論を擁護し、社會主義的競争の突撃活動を否認しまたはそれに冷淡な態度を取り、新しい幹部の養成と拔擢を蔑視し、ソヴェト機關における機構の縮小に逡巡的な態度を取り等した。黨はこゝにおいてもまた、主たる銃火を右翼的、日和見主義者に向けつゝ、二つの戦線に

おいて闘争し、——對立的秩序の現象に對しても闘争しなければならなかつたが、一方最大限綱領の支持者達は、社會主義建設事業に追加的な困難を齎した。

農業の領域において黨は農業の集團化の成長を阻止しようとする右翼日和見主義的企圖に對して、社會主義建設を個別的農家經營によつて拘り代へようとする企圖に對して最も決定的に闘争した。黨の方針のこの歪曲は、多くの土地機關の中に妨害者の組織が鞏固に根を張つてゐたことによつて、實際において更に一層強化された。妨害者は右翼日和見主義的偏向を自己の目的のために——社會主義建設の顛覆の目的のために、資本主義的部分の強化の目的のために利用した。

一九二九年末および一九三〇年初めがコルホーズ運動の巨大な昂揚と結びついてゐたことは、上に指摘されたところである。一九三〇年一月五日中央委員會の決定『集團化のテンポおよびコルホーズ建設への援助方策について』の中には、個々の州および地區のすべての特殊性を考慮した、全面的集團化の實例的教訓が指示されてゐたにも拘らず、幾多の地方黨組織は中央委員會のこの指示に注意しないで、集團化を早くも一九三〇年の春完了しようといふ任務を提起した。ここから農業の集團化における『左翼的』過誤が生じ、それはただ中農の一部のみならず、貧農の一部をもまたクラークの側へ投げやつた。この過誤を同志スターリンは正確に『成功による眩惑』

と規定した。

多くの黨組織は、集團化の領域における黨の任務を説明するためにまだ何事もなされなかつたところにおいて、クラーク撲滅に夢中になつた。かくて集團化の任務は幾多の地方においてクラーク撲滅の任務によつて拘りかへられた。黨に對して、ソヴェト權力に對して中農を蜂起させるために、あちこちで黨に直接敵對的な要素がこの仕事に急いで取り入つた。妨害者達はその後、彼等が集團化に對して農民を痛憤させるためにあちこちで『左翼的』過誤を支持したことを直接に指示した。多くの極めて深刻な歪曲が集團化に關する黨の最も重要な指令の遂行において許容された。右翼日和見主義者はこの『左翼的』偏向を非常に喜んだ。『左翼的』偏向は黨に對する闘争を彼等に容易ならしめた、そしてこのこともまた同志スターリンによつて論文『同志コルホーズ農場員への答』の中において指摘された。

『……問題は、——と同志スターリンは書いた、——コルホーズ運動の領域における「左翼的」偏向者の誤謬が、黨内における右翼的偏向の強化と鞏固化とのために有利の情勢を作り出すやうな誤謬であることにある。何故か？ 何故ならこれらの誤謬は、黨の方針を歪曲された光のうちに描き出し、——従つて、それらは黨の不信用を容易ならしめ、——従つて、それらは黨の指導に

對する右翼的要素の闘争を容易ならしめるからである。黨の指導の不信用は、それを基礎にしてたゞ黨に對する右翼的偏向者の闘争が高まりうるにすぎない最も基本的な土臺である。「左翼的」偏向者、彼等の誤謬と歪曲は、右翼的偏向者にこの土臺を與へる。だから右翼日和見主義者に對して成功を以て闘争するためには、「左翼」日和見主義者の誤謬を克服しなければならぬ。「左翼的」偏向者は客觀的に右翼的偏向者の同盟者である\*。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、四八〇頁。

同志スターリンの論文と同時に『黨の政策の歪曲を即時に清算する必要について民族共和國のすべての中央委員會、すべての地方、州、管區および地區の黨委員會へ送る中央委員會のメッセージ』が發表された。同志スターリンの手紙と中央委員會の決定とはまともに命中し、そして黨諸組織が許容された誤謬や過誤を決定的に修正するのを援助した。

實際、若干の同志は『紙上の』コルホーズの崩壊を不可避免的に『動搖しなければならぬ』中農の社會的性質によつて説明しようとした。黨の前に提起された任務の明瞭な理解を曖昧にするところの、不可避免的な満潮および干満に關するできる限り誤つた日和見主義的理論が作り出された。

右翼の危険性はやはり主要な危険性であつた、何故ならそれはクラーク層——國內における社會主義の主要な敵——の攻撃を反映したからである。『左翼的』偏向者の誤謬は右翼の立場を強化した。『左翼的』半トロツキー派的偏向は半中農的氣分を反映した。これらの『偏向』の支持者は、中農を集團化に引き入れることなくしては全面的集團化に斷乎として轉ずることができない、集團化は中農層に利益を齎し、コルホーズの生産的基礎の成長に基いて彼等の生活水準を高めなければならぬ、といふ極めて重要な事實の理解を喪失してゐた。

黨の個々のグループにおけるすべての日和見主義的動搖にも拘らず、『左翼的』過誤と關聯した附加的な困難にも拘らず、黨は、如何なる時よりも内部的に一層結成されて第十回大會へ近づいた。それは十萬人の労働者の黨への流入によつて數量的に成長した。黨の幹部は階級敵に對する闘争において鍛鍊された。都市および農村における最も廣汎な勤勞者大衆の中における全ソ聯邦共產黨の指導的役割、權威および影響は、正に黨が自己の方針の實行の途上において社會主義的攻撃、資本主義の根源の根こそぎの仕事において決定的な成功を達成したが故に、第十五回黨大會と第十六回大會との間の時期に巨大に成長したのである。

## 第十六回黨大會の歴史的意義

第十六回黨大會は社會主義の展開された攻撃の大會であつた。「誰が誰を？」の問題は社會主義のために工業化の領域において解決された。この點に第十六回大會によつて、總括された、總結果の最大の歴史的意義がある。

黨大會はソヴェト聯邦の國民經濟における最大の急轉の時機に、ソヴェト國における社會主義の建設における急激な歴史的轉換の時機に、全線における廣汎な社會主義的攻撃の絶頂において開かれた。その外にそれは世界資本主義の發展における危急的な急轉——資本主義の部分的安定の基礎を深刻に揺り動かした經濟恐慌によつて惹き起された急轉の時機と一致した。すべてこのことが大會の決議の性質、黨の發展におけるその歴史的地位を條件づけた。

第十四回大會が國の工業化の大會であり、第十五回大會が農業の集團化の大會があつたとすれば、第十六回大會は、レーニンの黨の隊伍の揺るぎなき統一を表示し、全線における廣汎な社會主義的攻撃や、國內における資本主義的要素の最後の遺物や、農業の全面的集團化の實施へのソヴェト聯邦の労働者階級の不撓不屈の意思を表明した。

## 第十六回大會における工業化の諸問題

第十六回黨大會は一九三〇年六月二十六日—七月十三日に開かれた。同志スタールンが中央委員會の活動に關する報告を以て進出した。巨大な事實的資料を以て彼は、黨が第十五回大會と第十六回大會との間の時期に獲得した社會主義建設におけるすべての達成を大會に示した。ソヴェト經濟の種々の部門におけるこれらの達成は巨大であつた。例へば、同志スタールンが自己の報告の中に指示したやうに、石油工業は五ヶ年計畫によれば五ヶ年計畫の終りに九億七千七百萬ルーブルの生産高を與へる筈であつたが、實際においては、それはすでに一九二九—三〇經濟年度に八億九百萬ルーブルの生産高、即ち五ヶ年計畫において一九三二—三三年において豫定された生産高の八三%を與へた。

かくして五ヶ年計畫は石油工業においては二ヶ年半に遂行されてゐる。一般機械製造においては、五ヶ年計畫によつて一九三二—三三年にとつて豫定された生産高の七〇%が與へられた。この工業部門においても五ヶ年計畫は二ヶ年半——三ヶ年で遂行されてゐる。農業機械製造においては、電氣器具工業におけると同様に、五ヶ年計畫はまた三ヶ年で遂行されてゐる。かくの如き

がソヴェト經濟の基本的部門における黨の社會主義建設の成功であつた。

けれども國の工業化におけるこの巨大な達成にも拘らず、同志スターリンはその報告において、工業の發展のテンポと工業の發展の水準とを混同してはならないことを力説した。

『……工業の發展のテンポと工業の發展の水準とを——同志スターリンはいつた、——互ひに混同してはならない。我國では多くの人々がそれらを混同して、我々が工業の發展の未曾有のテンポを達成したなら、それによつてすでに先進資本主義諸國の工業の發展の水準を達成したのだ、と考へてゐる。しかしこれは根本的に誤つてゐる。』

『例へば、我々が非常に高いテンポを持つてゐる電氣エネルギーの生産を取つて見よう。電氣エネルギーの生産について我々は一九二四年から一九二九年までに殆ど六〇〇%の増加を獲得したが、北アメリカ合衆國は同じ期間に電氣エネルギーを約一八一%、カナダは約二一八%、ドイツは約二四一%、イタリーは約二二二%増加した。諸君の見らるゝ如く、我々はこゝですべての他の國家のテンポを凌駕するところの、正に未曾有のテンポを持つてゐる。しかし例へば一九二九年におけるこれらの國の電氣エネルギーの生産の發展の水準を取り上げ、それをソヴェト聯邦における發展の水準と比較するならば、ソヴェト聯邦にとつて決して楽しい光景はえられな

い。電氣工業エネルギーの生産の發展の未曾有のテンポにも拘らず、一九二九年におけるソヴェト聯邦の電氣エネルギーの生産高は、僅かに六十四億六千五百萬キロワット時であつたが、北アメリカ合衆國は一千二百六十億キロワット時を持ち、カナダは百七十六億二千八百キロワット時、ドイツは三百三十億キロワット時、イタリーは百八億五千キロワット時を持つてゐた。

『差異は、諸君が見らるゝ如く、莫大である。』

『發展の水準においては、我々がすべてのこれらの國家に後れてゐる、といふことになる……』

『すべてこのことは何を物語るか？ (一)工業の發展のテンポとその發展の水準とを混同してはならないこと、(二)我々が我工業の發展の水準の意味で先進資本主義諸國から惡魔的に立ち後れてゐること、(三)ただ我工業の發展のテンポの今後の促進のみが我々に技術的・經濟的な點において先進資本主義國に追いつき且つ追ひ越す可能性を與へること、(四)我工業の發展のテンポの低下の必要においてお喋りしてゐる人々は、社會主義の敵、我々の階級敵の手先であることこれである\*。』

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五〇八—五一〇頁。

國の工業化において達成された成果を考慮しつゝ、五ヶ年計畫を四ヶ年で實現といふスローガ

ンを提起した労働者階級の巨大な熱心に依據しつゝ、大會は、たゞ技術的・經濟的な點において先進資本主義諸國に追いつくのみではなくて、また短期間にそれらを追ひ越す必要を確認した。黨中央委員會の報告に關する大會の決定の中には、社會主義的工業化の道における更に一つの極めて重要な任務を解決する必要が指摘された――

『……社會主義建設の基本的基礎としての重工業のあらゆる手段を盡しての展開（黑色および有色冶金、電氣エネルギーの生産、燃料、機械製造、化學）、ウラル・クズバス・コンピナトの形で新しい強力な石炭冶金根據地を最も近い時期に設立すること\*』

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、六一八頁。

第十六回大會は、同志スターリンが述べたやうに、階級の廢絶にはまだ遠いけれども、ソヴェエト聯邦が社會主義の時期に入つたことを意味した。

同志スターリンは大會において、ボルシエヴィキ的攻撃の本質が國の資本主義的要素に對する闘争へ、工業、ソフホーズおよびコルホーズの建設やこのすべての活動のための再建におけるボルシエヴィキ的テンボのための闘争へ大衆の用心と積極性とを動員することにあることを述べた。『ボルシエヴィキ的攻撃の本質は、最後に、黨自體をすべての攻撃事業の組織のために動員し、黨組織

を鞏固にし且つ刃を附け、そこから官僚主義と變質との要素を驅逐し、レーニンの黨から右翼的および「左翼的」偏向の表現者を隔離し且つ驅逐し、眞正の、堅忍不拔のレーニン派を前面へ拔擢することにある』（スターリン）。

### 第十六回大會における集團化の諸問題

我々が見た如く、第十五回黨大會と第十六回大會との間の時期は、ソヴェエト聯邦の經濟の發展における最大の急轉の時期であつた。この時期は、一九三〇年の春穀物生産地方において農民經營の集團化が四〇―五〇%に達し、この集團化經營の播種面積が約三〇―三百萬ヘクタールを包括したことによつて表示された。農民經營の集團化に關する五ヶ年計畫は二年間に一倍半超過遂行された。

農民經營の集團化のこの最大の成功は、農村における黨の正しい政策によつて、その結果一九二九年末貧農および中農のコルホーズの側への決定的な轉換が行はれた政策によつて條件づけられた。農村の中農大衆のコルホーズの側への轉換を與へたものは、黨が農村における資本主義的要素の制限と驅逐の政策から全面的集團化の基礎の上に階級としてのクラーク層の清算政策へ

決定的に移行することができるやうになつたことである。ソ、ヴ、イ、エ、ト、聯、邦、に、お、け、る、社、會、主、義、建、設、に、お、け、る、新、し、い、時、期、が、こ、の、政、策、へ、の、移、行、を、開、いた。同、志、ヤ、コ、ヴ、レ、フ、の、報、告、に、關、する、大、會、の、決、定、『コ、ル、ホ、ー、ズ、運、動、お、よ、び、農、業、の、昂、揚、に、つ、い、て』の中、に、は、ソ、ヴ、イ、エ、ト、聯、邦、に、お、け、る、こ、の、最、も、重、要、な、瞬、間、が、次、の、如、く、特、徴、づ、け、ら、れ、た——

『地主からの土地の没収が農村における十月革命の第一歩であつたとすれば、コルホーズへの移行は第二の、而も決定的な歩みであつて、それはソヴィエト聯邦における社會主義社會の土臺の建設の仕事において最も重要な段階を規定する\*』と。

\* 全ソ聯邦共産黨決議集、第二部、六五七頁。

農民經營の全面的集團化はプロレタリア獨裁の最も重要な達成である。『……立ち後れた、生産的な小および極小農民經營から大きな、集團的、高度生産的經營への直接的移行のプロレタリア獨裁の下における可能性は、たゞ理論的に證明されたのみならず、また數百萬人の經驗によつて検査された\*』。更に大會は同じ決定の中でかう確認した——

『……コルホーズとソフホーズとの大衆的發展および開始されたクラーク層の清算の結果、ソ、ヴ、イ、エ、ト、聯、邦、の、經、濟、に、お、け、る、種、々、の、經、濟、制、度、の、相、互、關、係、自、體、が、變、化、し、そ、し、て、そ、れ、だ、け、工、業、に、よ、

つて提供された社會主義制度の外に、更に、資本主義制度を驅逐するソヴィエト聯邦の農業における社會主義制度が成長する。これまで殆ど専ら社會主義的工業に立脚したソヴィエト聯邦における社會主義的關係は、今やまた農業における急速に成長する社會主義的部分（コルホーズやソフホーズの形での大生産）にも立脚し始める、プロレタリア権力が「出來上りの」社會主義的「關係を受取らない」（レーニン）ことにあるところの、プロレタリア革命の最大の困難の克服の可能性が、それによつて開かれたのである\*\*』と。

\* 全ソ聯邦共産黨決議集、第二卷、六四九頁。

\*\* 同上、六四九—六五〇頁。

大會は貧農および中農大衆をコルホーズに結合する目的でこれらに對して暴力または行政的強制手段を適用しようとするあらゆる企圖を鋭く審判した。それと共に大會は、集團化の實行に際して許容された黨組織および個々の活動家のすべての歪曲をも過誤をも審判した。

農業アルテリは集團化の基本的形態である。第十六回大會は、コルホーズ建設における中央委員會の政策を是認した後、黨にコルホーズ建設のヨリ以上の發展方策および單純なコルホーズ（農業アルテリ）のヨリ高き段階——コンミュニオンへの移轉に關する指示を與へた。『コルホーズ運動



は、技術的基礎の向上、コルホーズの幹部の成長およびコルホーズ農場員の文化的水準の成長に照應して、規約の適当な變更の農民自身による承認および下からのその實現といふ必須條件の下に、ヨリ高き形態——コンミュニオン——に向上するべきである』云々。

この場合大會は次のことを確認した、『……その政策が不可避免的に農民層の基本的大衆との結合の分離に導いたところの反革命的トロツキー主義、並びに黨によつて實行される國の工業化の拒否、ソフホーズの扶植とコルホーズの發展との拒否を政策とし、クラーク層に對する降服をその政策とする右翼的偏向者が粉碎されたお蔭で、黨は集團化の事業において決定的な急轉を達成した』云々。

\* 全ソ聯邦共産黨決議集、第二部、六五八頁。

### 第十六回大會におけるソフホーズ建設の諸問題

ソヴェト聯邦の農業の社會主義的改造の第二の重要な要素はソフホーズ建設であつた。第十回大會と第十六回大會との間の期間に黨中央委員會はソフホーズ建設の發展のために非常方策を採用した。一九二八年四月中央委員會政治局は最近の三、四年間に多くの新しいソフホーズを

組織し、これらのソフホーズがこの期間の終りに少くとも一億ブードの商品穀物を與へうることを豫想する決議を通過した。ソフホーズ建設に關する黨中央委員會の方策の結果は、次の數字の中に表現された。即ち一九二八—二九年に穀物トラストの播種面積は十五萬ヘクタールであつたが、一九二九—三〇年にはそれが百六萬ヘクタールに發展した。ソフホーズ中央本部の播種面積は一九二八—二九年に四十三萬ヘクタールであつたが、一九二九—三〇年にはそれはすでに八十六萬ヘクタールであつた。

ソフホーズ建設はその外になほ二つのソフホーズ聯合を行つた——ウクライナ・ソフホーズ聯合と全ソ聯邦砂糖業聯合とがこれであつた。一九二八—二九年における第一の聯合の播種面積は十七萬ヘクタールであつたが、一九二九—三〇年にはそれはすでに二十八萬ヘクタールであつた。一九二八—二九年における穀物栽培に關する第二の聯合の播種面積は七十八萬ヘクタールであつたが、一九二九—三〇年にはそれが八十二萬ヘクタールとなつた。一九二七—二八年におけるソフホーズ全體の粒穀の總生産高は九百五十萬ツェントネルで、その中商品生産高は六百四十萬ツェントネルであつた。一九二八—二九年にはこの生産高はすでに一千二百八十萬ツェントネルで、その中商品生産高は七百九十萬ツェントネルであつた。一九二九—三〇年にはソフホーズ全

は、技術的基礎の向上、コルホーズの幹部の成長およびコルホーズ農場員の文化的水準の成長に照應して、規約の適当な變更の農民自身による承認および下からのその實現といふ必須條件の下に、ヨリ高き形態——コンミュニオン——に向上することが出来る』と。

この場合大會は次のことを確認した、『……その政策が不可避免的に農民層の基本的大衆との結合の分離に導いたところの反革命的トロツキー主義、並びに黨によつて實行される國の工業化の拒否、ソフホーズの扶植とコルホーズの發展との拒否を政策とし、クラーク層に對する降服をその政策とする右翼的偏向者が粉碎されたお蔭で、黨は集團化の事業において決定的な急轉を達成した』と。

\* 全ソ聯邦共産黨決議集、第二部、六五八頁。

### 第十六回大會におけるソフホーズ建設の諸問題

ソヴェト聯邦の農業の社會主義的改造の第二の重要な要素はソフホーズ建設であつた。第十回大會と第十六回大會との間の期間に黨中央委員會はソフホーズ建設の發展のために非常方策を採用した。一九二八年四月中央委員會政治局は最近の三、四年間に多くの新しいソフホーズを

組織し、これらのソフホーズがこの期間の終りに少くとも一億ブードの商品穀物を與へうることを豫想する決議を通過した。ソフホーズ建設に關する黨中央委員會の方策の結果は、次の數字の中に表現された。即ち一九二八—二九年に穀物トラストの播種面積は十五萬ヘクタールであつたが、一九二九—三〇年にはそれが百六萬ヘクタールに發展した。ソフホーズ中央本部の播種面積は一九二八—二九年に四十三萬ヘクタールであつたが、一九二九—三〇年にはそれはすでに八十六萬ヘクタールであつた。

ソフホーズ建設はその外になほ二つのソフホーズ聯合を行つた——ウクライナ・ソフホーズ聯合と全ソ聯邦砂糖業聯合とがこれであつた。一九二八—二九年における第一の聯合の播種面積は十七萬ヘクタールであつたが、一九二九—三〇年にはそれはすでに二十八萬ヘクタールであつた。一九二八—二九年における穀物栽培に關する第二の聯合の播種面積は七十八萬ヘクタールであつたが、一九二九—三〇年にはそれが八十二萬ヘクタールとなつた。一九二七—二八年におけるソフホーズ全體の粒穀の總生産高は九百五十萬ツェントネルで、その中商品生産高は六百四十萬ツェントネルであつた。一九二八—二九年にはこの生産高はすでに一千二百八十萬ツェントネルで、その中商品生産高は七百九十萬ツェントネルであつた。一九二九—三〇年にはソフホーズ全

體について粒穀の總生産高はすでに二千八百二十萬ツェントネル、その中一千八百萬ツェントネルが商品生産高と豫想された。かくの如きがソフホーズ建設における黨中央委員會の政策の結果であつた。

大會はこの政策を全體的に是認して、『……少くとも四百五十萬ヘクタールの來年における穀物トラストの線に沿ふ播種と九百萬ヘクタールの一九三二年の播種準備とを確保すること\*』を決議した。

\* ソ聯邦共產黨決議集、第二部、六五三頁。

五ヶ年計畫によれば五ヶ年計畫の終りにはソフホーズ全體から五千四百三十萬ツェントネルの粒穀總生産高を持つべく豫想されてゐたが、實際においては黨中央委員會の方策のお蔭ですでに一九三〇年にこの生産高の二千八百二十萬ツェントネルを持つことができた。そして翌年には七千百七十萬ツェントネルを持つべく豫想された。

かくしてソフホーズ建設については五ヶ年計畫は三ヶ年間に凌駕された。

農村のクラーク的要素はコルホーズ運動の昂揚に對して投資と家畜の濫殺とを以て答へた。中農の個々のグループもまた往々クラークの影響に陥つた。この結果畜産問題が尖鋭化した。大會

に先立つ時期に黨中央委員會は社會主義的原理の上に畜産問題の解決のための方策を取つた。この目的を以て畜産中央部——『養豚トラスト』と『牧畜者』とが組織され、屠殺用家畜および乳用家畜の大量的養殖がその任務となつた。この方向における黨中央委員會の政策を是認した後、大會は次の如く決議した——

『「養豚トラスト」の線に沿つて豚の商品生産を一九三〇—三一年には少くとも四十萬頭、一九三一—三二年には少くとも三百萬頭、一九三二—三三年には少くとも七百萬頭確保せよ。……「牧畜者」の家畜頭数を一九三〇—三一年には三百二十萬頭に、一九三一—三二年には五百五十萬頭に、一九三二—三三年には九百萬—一千万頭に達せしめよ。コルホーズにおける養畜部門を發展させ、農業信用のかなりの部分をこの仕事に向けよ\*』と。

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、六五三—六五四頁。

コルホーズおよびソフホーズへの複雑な農業機械の廣汎な適用を基礎とするそれらの成長は、ヨリ高度の型の大農業組織への小さな不生産的農業經濟の移行を確保すると共に、ソヴィエト國における社會主義の建設をもまた確保する。

ソフホーズは徹底的に社會主義的な型の企業である。それは労働生産性の引き上げ、農業の集

團化および機械化の仕事において指導的役割を演ずべき使命を持つてゐる。しかし黨は農業の集團化の政策を農業的集團を人為的に清算することとそれらを集團の全員、家畜および農具と共にソフホーズに包含させることに對して闘争した、——そしてかゝる事實は存在したのである。黨の方針はコルホーズの『ソフホーズ化』と何等の共通點をも持つてゐない。

### この時期におけるソヴィエト聯邦の國際的地位

上に指摘された如く、第十六回黨大會は、たゞソヴィエト聯邦の社會主義建設においてのみならず、また世界資本主義の發展における急轉期に開かれた。資本主義諸國における經濟恐慌は激化したが、これと並んでソヴィエト聯邦における社會主義は勝利的に成長した。同志スターリンは自己の報告において次の如く指摘した——

『……彼等資本家の許においては、工業の領域においても、農業の領域においても、經濟恐慌と生産の低下がある。我ソヴィエト聯邦においては、國民經濟の全部門に經濟的昂揚と生産の増大とがある。彼等資本家の許においては、勤勞者の物質的地位の劣悪化、勤勞者の賃銀の引き下げおよび失業の増大がある。我ソヴィエト聯邦においては、勤勞者の物質的地位の昂揚、勤勞者の賃

銀の引き上げおよび失業の減少がある。彼等資本家の許においては、數百萬の勞働日の損失に導くところの同盟罷業と示威運動との増大がある。我ソヴィエト聯邦においては、同盟罷業の缺如と我々の建設に數百萬の追加勞働日とを興へるところの、勤勞者および農民の勞働熱の増大がある。彼等資本家の許においては、國內情勢の激化と資本主義制度に對する勤勞者階級の革命運動の成長がある。我ソヴィエト聯邦においては、國內情勢の鞏固化とソヴィエト權力の周圍における勤勞者階級の數百萬の大衆の結成がある\*』と。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五三六頁。

ソヴィエト聯邦における社會主義建設の巨大な成長は資本主義の基礎をぐらつかせ、その終末の接近を促進する。

ソヴィエト聯邦に對する資本主義諸國家の態度は二つの傾向によつて特徴づけられてゐる、即ち一方では、干渉、經濟封鎖、ソヴィエト聯邦内における妨害活動の組織等々、他方では、經濟的相互關係を支持する傾向、そしてこれはソヴィエト聯邦の經濟的および政治的威力の増大によつて條件づけられてゐる。大會は次のことを確認した——

『……帝國主義體制のすべての矛盾の尖鋭化は、ソヴィエト聯邦とこれを圍繞する資本主義世

界との間の矛盾の尖鋭化と並んで進行する。世界唯一のプロレタリア獨裁の國家とその革命的影響に對する國際ブルジョアの憎悪は、經濟封鎖を組織しようとする企圖や、ソヴェエトの輸出に對する鬭争や、教會後援者のカンパニヤや、ブルジョア新聞および社會民主主義新聞の兇暴な誹謗カンパニヤや、ソヴェエト聯邦に對する戰爭準備の強化の中に表現されてゐる\*』と。

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、六一五—六一六頁。

大會はソヴェエト聯邦と資本主義世界との經濟的相互關係のヨリ以上の發展の必要を指摘した。それと同時にそれは『プロレタリア國家の防衛能力の鞏固化と國際帝國主義の側からの干涉のあらゆる企圖の反撃\*』の必要を力説した。

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、六一六頁。

第十六回黨大會は、すべての資本主義國に對するその影響が日毎に増大し、ヨリ善き未來のための鬭争へ數百萬のプロレタリアを高めつゝある、ソヴェエト國、世界に唯一の社會主義國家の威力と成長との強力な表明であつた。

## 二つの體制

數年間經驗され且つ征服された革命を總決算しつゝ、同志スターリンは全世界の勤勞者の前に、經濟の二つの體制——社會主義的ソヴェエト的體制とブルジョア的資本主義的體制との問題を提起した。同時スターリンはこの問題を、ソヴェエト聯邦における社會主義の成長と全資本主義世界の深刻な危機との徴候が特に明瞭に暴露された瞬間に提起した。社會主義經濟のこの成長と資本主義經濟の破滅とは何によつて説明されるか？ ソヴェエト體制の優越と資本主義體制の破産とが極めて明瞭に暴露された。ソヴェエト體制の優越を同志スターリンは勞働者階級の掌中への權力の移行の中に、勞働者および勤勞農民の掌中への生産手段および要具の移行の中に、大衆の物質的および文化的水準の引き上げに向けられた生産の計畫的組織の中に、勞働者および農民の物質的地位の體系的向上と都市および農村における社會主義的生産の擴張とのための國民所得の分配の中に、國民所得のかゝる分配が過剰生産、失業等々の危機から勞働者階級を保證することの中に、勞働者階級が資本家のためではなくて、自分自身の階級のために働くところの、國の主人であることの中に見てゐる。

すべてこれらのことに對立して資本主義體制は、政治的權力、そしてまた生産手段および要具を一塊の搾取者——資本家の掌中に残してゐる。資本家はプロレタリアートの地位の改善につい

て配慮しないで、高い利潤について配慮する。國民所得は資本家のために分配される。大衆の貧困の下における資本主義的合理化と生産の増大とは過剰生産恐慌、失業等々に導く。搾取される労働者階級は、無縁的階級のため、搾取者階級のために働く\*。

\* 参照、スターリン、全ソ聯邦共産黨第十六回大會への中央委員會の政治報告、『レーニン主義の諸問題』収録。

第十六回大會への同志スターリンの報告における二つの體制のこの特徴づけは、二つの經濟體制の基本的特徴を指摘すると共に、この二つの體制の發展の方向をも指示してゐる。即ち社會主義體制は大衆の物質的および文化的水準の眞實の繁榮と成長の方へ、資本主義的諸階級の遺物の廢絶の方へ發展し、ソヴィエト聯邦をすべての被抑壓民族のため、萬國のプロレタリアートのために社會主義の根源地に轉化する。資本主義體制は更に大なる對立、崩壊、搾取者の少數者に對する被搾取者の多數者の階級的憎惡の尖鋭化の方へ發展する、と。

### 第十六回大會と右翼的および「左翼的」偏向に對する

#### 鬭争

第十六回大會は、ボルシェヴィキ黨の統一の強力な表明であつた。黨の一般方針に自己の政綱を對

置しうるたゞ一つの多少とも形成された反對派グループも見出されなかつた。黨は右翼的および「左翼的」偏向に對する容赦なき鬭争の中に成長し且つ鞏固になつた。二つの戰線において鬭争しつつ、黨は右翼的および「左翼的」偏向への和解主義に對してもまた最も無容赦な鬭争を行つた。

都市並びに農村における社會主義建設の巨大な成功は右翼日和見主義者の最も完全な破産、本質において裏切者的な彼等の役割を暴露した。

『何故右翼的偏向は今や黨における主要な危険性であるか？——同志スターリンは大會における自己の報告の中で質問した、——何故ならそれはクラーク的危険性を反映するものであり、そしてクラーク的危険性はこの瞬間、展開された攻撃と資本主義の根絶との瞬間には、國內における基本的な危険性だからである……我黨における右翼的偏向の勝利が労働者階級の完全な武装解除、農村における資本主義的要素の武装およびソヴィエト聯邦における資本主義の復活の機會の成熟を意味するであらう、といふことは疑ふ餘地がない\*。』

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五五七—五六一頁。

レーニンが第十回黨大會において、無政府サンデカリズムの偏向を我國において特に強い小ブルジョアの要素の見解の反映として審判したことは、我々がすでに見たところである。

すでに早く、『共産主義における「左翼主義」の小兒病』においてレーニンは、それに對する闘争の中にボルシエヴィズムが成長し、鞏固になり鍛鍊されたところの労働者運動における二つの主要な敵について語りつゝ、たゞ右翼的日和見主義のみならず、また『左翼的』小ブルジョアの革命性——トロツキー主義と同様に、『左翼』共産主義がその變種であるところの——のブルジョアの性質についても指摘した。その後、論文『新時代、新しき形における舊き誤謬』の中に、レーニンはかう書いた——

『……歴史の各々の轉換は、常にプロレタリアートと並んで行はれ、常にあれやこれやの程度にプロレタリアートの中に侵入するところの、小ブルジョアの動搖の形態で若干の變化を喚び起す\*』と。

\*レーニン、第二十七卷、五頁。

第十六回黨大會において同志スターリンは、最近數年間に黨内において發展した諸偏向の社會的性質の深刻な特徴づけを與へた。レーニンと同様に、同志スターリンは、プロレタリアートが他の階級から『萬里の長城』によつて隔てられてゐないこと、彼等が『真空の中に生活し且つ活動してゐるのではない』こと、プロレタリアートを圍繞する環境は種々の階級および社會的グル

ープより成ることに、何よりも先づ注意を向けた。社會主義的攻撃は殘存する諸階級の抵抗を喚び起す。我黨の隊伍に存在するレーニンの方針からのありとあらゆる偏向こそ、殘存する諸階級の抵抗の反映である。

だから社會主義的攻撃は偏向、特にこの段階における主要な危険性としての右翼的偏向に對する無容赦な、非和解的な闘争を要求する。

トロツキー派も右翼も死滅する階級の氣分を反映してゐるけれども、彼等の間には本質的な差異がある。『……トロツキー主義の本質は何よりも先づ我國の労働者階級と農民層との力によるソヴェト聯邦における社會主義の建設の可能性の否認に』、『農村における社會主義建設の仕事への基本的農民大衆の吸引の可能性の否認に』、『黨における鐵の規律の必要の否認に、黨における分派形成の自由の承認に、トロツキー黨の形成の必要の承認に\*』ある。

\*スターリン、レーニン主義の諸問題、五五七—五五八頁。

トロツキー主義は、崩壊しつつある都市小ブルジョア階級の動搖の反映である。こゝから『左翼的』文句によつて隠蔽された降服主義が生じ、こゝから政治における冒險主義とヒステリーが生ずる。ブルジョア階級のこの層の地位の二重性は、トロツキー主義の二重的相貌と『……トロツ

キー主義が右翼的偏向者に對する自己の一見「猛烈」な攻撃を通常假面を被らない降服主義者としての彼等とのブロックによつて完成する」といふ事實を説明する\*。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五五九頁。

『左翼的』偏向（例へばコルホーズ運動の領域における）は「……實際、我國において實踐においてトロツキー主義の傳統を復活させ、中農層に對するトロツキー的態度を復活させようとする若干の意識的な企圖である。それは、レーニンが過度の行政化と名づけてゐる政治における誤謬の結果である\*」。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五五九頁。

右翼日和見主義の方は他の點にある。『右翼日和見主義の方は小ブルジョアの要素の方に、一般に資本主義的要素の側から、特にクラーク層の側からの黨に對する壓迫の力にある\*』。トロツキー派とは異つて、右翼は、ソヴェト聯邦における社會主義の建設の可能性を形式的に認めながら、黨によつて印づけられた社會主義建設の道、資本主義的要素に對する非和解的な階級闘争と展開された社會主義的攻撃との不可避性と必然性を認めない。『彼等は實際において我國における社會主義の建設の可能性の否認の見地に轉落しつゝある』。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五六一頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

また、トロツキー派と異つて、右翼は『基本的農民大衆を農村における社會主義建設の仕事に吸引する可能性を形式的に認めながら、……それなくしては社會主義建設の仕事への農民層の吸引が不可能な道と手段とを否認する\*』。右翼は、コルホーズとソフホーズとが社會主義への『大道』であることを否認するのである。『社會主義へのクラークの成長』、農村の社會主義的發展における『自動』、市場的相互關係による農村との結合の優越といふクラーク的理論を説教しつつ、黨によつて印づけられたコルホーズおよびソフホーズの建設のテンポに對して闘争しつつ、農村における社會主義的發展にとつての工業化の意義を過小評價しつつ、『右翼的偏向者は實際において社會主義の建設の仕事への基本的農民大衆の吸引の可能性の否認の見地に轉落しつゝある\*\*』。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五六〇頁。

\*\* 同上、五六一頁。

こゝからトロツキー派とのブロックに關する右翼とトロツキー派との秘密協議が生ずる。

『右翼日和見主義の基本的な害悪は、それが階級闘争のレーニンの理解から分離して、小ブルジョ



ア、的、自由主義の見地に轉落しつゝあることにある』。

同志スターリンはトロツキー派と右翼的偏向者とをかやうに特徴づけてゐる。

彼等に對するすべての以前の闘争の歴史は、党内生活のすべてのその後の出來事と同様に、この特徴づけの正しさを完全に確認した。嘗て右翼がトロツキー派と祕密の協議をした（ブハーリン——リュコフ——トムスキー）と同様に、その後もまた彼等は一再ならずトロツキー派とプロクを結んだ。だから、『……小ブルジョアの急進主義を代表する「左翼」並びに小ブルジョアの自由主義を代表する右翼に對する二つの戦線における非和解的闘争を今後もまた繼續せよ』といふ同志スターリンの呼びかけは巨大な意義を持つてゐた。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五六二頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

『……任務は、二つの戦線における決定的闘争の必要を理解せず、または理解しないやうに見えらるる党内における和解主義的要素に對する非和解的闘争を今後もまた繼續することにある\*』。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五六二頁。

大會は右翼反對派の舊指導者に對して、彼等が擁護し且つ黨の一般方針に對置した見解が、客觀的にはソヴィエト聯邦における資本主義の復興に導いたことを承認すべきことを要求した。大

會は、彼等が自己の見解の反レーニ的なことを承認し且つ黨の方針の擁護のために積極的闘争を行ふことを要求した。右翼反對派の舊指導者リュコフ、トムスキーおよびウグラノフは大會において個々の問題における自己の誤謬を承認したけれども、彼等は自己の見解を完全には放棄せず、黨の一般方針に反した自己の以前の見解を當時審判しなかつた。

右翼的および『左翼的』偏向に對する闘争における中央委員會の政策を是認した後、大會は次のことを確認した——

『……黨は、黨の一般方針の確乎たる實行のお蔭で、二つの戦線における——即ちトロツキー主義とそれへの和解主義に對する、この段階における主要な危険性としての右翼的偏向と右翼的偏向への和解主義に對する無容赦且つ決定的な闘争のお蔭で、社會主義建設の最大の成功を獲得した。』

『たゞ二つの戦線における闘争のみが、反革命的メンシエヴィキ的立場に全く轉落したトロツキー主義の完全な暴露に導いた……トロツキー主義を粉碎した後、黨は右翼的偏向（ブハーリンのグループ）における日和見主義の新しい現はれと衝突した。右翼的偏向は黨の一般方針に自己の日和見主義の方針を對置した。右翼的偏向者の方針は國のクラーク的<sup>1</sup>資本主義的要素に對する降服

に導く。客觀的にはクラーク層の手先である右翼的偏向者の方針の實現は、我國における社會主義建設の失敗と資本主義の復興とを意味するであらう。資本主義的要素に對する全線における展開された攻撃の時期には、右翼的偏向は黨における主要な危険性であつたしまた現にある』と。

この場合大會は『右翼的反対派の見解は、全ソ、聯邦共產黨に所屬すること、一致しないこと』を宣言した。

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、六二三頁。

第十六回黨大會は全ソ聯邦共產黨の隊伍における右翼反対派の完全な粉砕を完成した。それと共に大會は、將來における右翼的または『左翼的』偏向の最小の現はれに對する、同じくまたそれらへの和解主義に對する最も間斷なき闘争の必要を指摘した。

### 第十六回大會における民族問題

我黨史の研究者は、我黨が民族問題の正しい解決、正しい民族政策に如何に巨大な意義を賦與してゐるか、といふことに注意を向けなければならなかつた。第二回黨大會における——一九〇五年の革命以前におけるボルシエヴィキとブンド派との論争、反動期においては文化的民族自

治のスローガンに對する闘争、帝國主義戦争期においては『民族自決權』といふスローガンの問題に關するポーランドの黨の代表者との第二回大會における討論の擴大された規模での反覆、一方ではカール・ラデック、エル・ルクセンブルグ、他方ではエヌ・ブハーリン、ゲー・ビヤタコフ、イニ・ポシュのこの問題における誤謬に對するレーニンの闘争、一九一七年四月會議における民族問題の提起とゲー・ビヤタコフの誤つた立場に對する闘争、第八回黨大會における綱領の作成に際しての民族問題に關する論争、第十回黨大會における民族問題の提起、再び第十二回黨大會における民族問題の提起、最後に第十六回大會においては同志スターリンによる大會への政治報告の中における民族問題の提起——すべてこれらのことは、この問題に對する黨の排他的な注意を證明してゐる\*。民族問題の研究における大なる役割を、我々がすでに指摘したやうに、レーニンと並んで同志スターリンが遂行した。

\* 本書の當該諸章参照。

黨内に見られる一般方針からの偏向について語りながら、同志スターリンは第十六回大會の注意を大ロシア的排外主義および地方的民族主義への偏向に向けた。『これらの偏向は、——同志スターリンは述べた、——左翼的または右翼的偏向のやうに顯著でなく壓倒的でない。それらは

這ふ偏向と稱することができる。しかしこれはまだ、それらが存在しないことを意味しない。それらは存在する、そして肝要なことだが、——成長しつつある』と。この偏向を同志スターリンは次の如く特徴づけてゐる——

『大ロシア的排外主義への偏向の本質は、言語、文化、生活の民族的差異をなくしようとする志向に、民族共和國および州の清算を準備しようとする志向に、民族同権の原則を掘り崩し且つ機構の民族化、新聞、學校その他の國家的および社會的組織の民族化に關する黨の政策を破棄しようとする志向にある。』

『この型の偏向者はこの場合、社會主義の勝利の下においては諸民族は一緒に融合され、彼等の民族語は統一的共通的言語に轉化されなければならないのであるから、今や民族的差別を清算し、そして以前の被抑壓民族の民族文化の發展を支持する政策を放棄する時が來たのだ、といふことから出發する\*』と。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五六二頁。

同志スターリンは、その場合レーニンを引證するところのこの型の偏向者の反マルクス主義的理論を詳細に暴露した。同志スターリンは、如何にこれらの偏向者がカウツキー的社會排外主義

の陥穽に陥つてゐるか、一つの共通的言語に味方しながら、如何に『……彼等がただ一つの國家の限界内において、ソヴェト國家の限界内において、事の本質において、以前に支配した言語、即ち大ロシア語の特權の復興を獲得しようとする努力してゐる\*』かを指示した。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五六四頁。

黨は自己の民族政策の正しさの十分な吟味を持つてゐる。民族共和國ウクライナ、白ロシア、クリミア、ジョルジア、アゼルバイジャン、タタリア、ヤクーチア、アルメニア、ヴォルガ流域地方ドイツ人、ウズベキスタン、カザクスタン、タジクスタン、トルクメニスタン、カレリアと多くの自治州とは、十年間以上存在する。これらの共和國や州は、同志スターリンが正しく指摘したやうに、『ソヴェト聯邦における社會主義の勝利に關聯してたゞロシア化されなかつたのみならず、反對に獨立民族に復活し且つ發展した\*』。これらの共和國や州は、大衆を國際主義の精神で教育し且つプロレタリアートの獨裁を鞏固にすることを目的とするところの、その内容においては社會主義的な、そして形式においては民族的な文化を、プロレタリア獨裁の下に發展させた。かくして社會主義建設の時期はたゞ民族文化——母國語での學校、新聞雜誌、文學、劇場その他の文化的啓蒙的機關——の崩壊と瓦壊の時期でないのみならず、正にこの時期においてロシア

史上初めてこの形式において民族的な、そしてその内容において社會主義的な文化が國家の支持を獲得した。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五六三頁。

黨綱領と第十回大會において採用された決議とに基いて、各共和國および州において、各民族の民族的生活條件に照應する形態で、ソヴェト國家性の發展と鞏固化とに關する巨大な活動が展開された。『地方人口の生活と心理を知る地方人より成る、母國語で活動する裁判所、行政部、經濟機關、權力機關』が發展され且つ鞏固にされた。この基礎の上に黨や共産青年同盟の組織が成長した。

たゞ一つの共通的语言を有するたゞ一つの共通の（形式においても内容においても）文化への民族文化の未來における融合の支持者たる我々が、それと共にこの瞬間における、プロレタリア獨裁期における民族文化の繁榮の支持者であるといふことに外觀上の矛盾が存在することに關聯して、同志スターリンは、この辨證法的矛盾が全く重大であることは、我々が國家の死滅、國家權力の死滅の支持者でありながら、プロレタリアートの獨裁の強化に賛成してゐることが重大なのだと同様である、といふことを指示した。『國家權力の死滅のための條件の準備を目的とする國家

權力の最高の發展、——これがマルクス主義的定式である……\*』。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五六三頁。

第十六回大會がそれに對して闘争すべく呼びかけた他の偏向は、地方的民族主義であるが、それは、

『自己の民族的な殻の中に孤立し且つ閉ぢこもらうとする志向に、自己の民族の内部における階級的矛盾を抹殺しようとする志向に、社會主義建設の一般的な流れから分離することによつて大ロシア的排外主義から擁護されようとする志向に、ソヴェト聯邦が諸民族の勤勞者大衆を接近させ且つ結合することを見ないで、たゞ彼等を互ひに遠ざけようすることのみを見ようとする志向にある\*』。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五六七頁。

『……この偏向の危険性は、それがブルジョアの民族主義を培養し、ソヴェト聯邦の諸民族の勤勞者の統一を弱め且つ干涉者に調子を合はせることにある\*』。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五六七頁。

第十六回大會はこの精神で中央委員會の報告に關する決議の中に、階級闘争の反映としてのこ

の偏向に對する鬭争に關する特殊な指示を包含せしめ、強國的偏向がこの段階における主要な危険性であることを指摘した。

#### 第二十四章 参考文献

スターリン、偉大なる急轉の年、『レーニン主義の諸問題』、四二九—四三六頁。

スターリン、農業政策の問題によせて、同上、四四二—四六〇頁。

スターリン、成功による眩惑、同上、四六五—四七〇頁。

スターリン、第十六回大會における中央委員會の政治報告と結語。

### 第二十五章 第十六回大會と第十七回黨會議

#### この間

#### ソヴェエト聯邦に對する經濟封鎖と干渉の諸問題

社會主義建設において黨によつて達成された成功は、鞏固であるのみならず、破却し難いものである。コルホーズにおいて労働者階級は、彼等が貧農や中農の分散的な個人農民經營において持つてゐたものは原則的に異つた新しい支柱を獲得した。コルホーズにおける中農との同盟は、コルホーズにおける中農が同盟者からソヴェエト權力の鞏固な支柱に轉化されたほど、鞏固になつた。これは、社會主義の完全な建設にとつて、階級の完全な廢絶、都市と農村との差異、農村の労働者と工場労働者との間の差異の廢絶にとつて必要な歩みであつた。『社會主義は階級の廢絶である』——とレーニンは書いた。プロレタリアートは農民層と同盟して一九一七年に地主と資本家とを顛覆したが、これはたゞ諸任務の最初の部分たるにすぎなかつた。『階級を廢絶するためには、——と更にレーニンは書いた、——労働者と農民との間の差異を廢絶し、すべ

ての人を労働者にしなければならぬ。黨はこの任務に漸く第十六回大會によつて決算された時期に全面的に着手した。

最近數年間労働者階級は自己の指導下にすべての工業を——大工業をも、中工業をも、またかなりの部分において小工業をも——結合することができた。工業の戦前の水準は遠く後方に残された。

ソヴェト國における社會主義建設の巨大な成功、その工業化と農業の集團化の暴風雨の如き規模は、ソヴェト權力の崩壊とソヴェト聯邦における資本主義の復興に對する國際ブルジョアジの期待に大打撃を與へた。

當分干渉に訴へることができない國際ブルジョアジは、ソヴェト聯邦に對する鬭争の方法を求めて、ソヴェト聯邦における社會主義建設の顛覆のために經濟封鎖を利用しようとした。この目的で、謂ゆるソヴェト『ダンピング』に對する保守的なフランス新聞の長期にわたる執拗な準備的カンパニヤの後、フランス政府（一九三〇年十月三日）は、次いで北米合衆國政府（一九三一年二月）もまた、フランスおよび北米合衆國への若干のソヴェト商品の輸入禁止に關する法律を發布した。フランス帝國主義は、ソヴェト聯邦に對する經濟封鎖を組織しつゝ、他の資

本主義國をもそれに引き入れようとした。國際帝國主義は經濟封鎖と直接關聯してソヴェト聯邦に對する軍事的干渉をもまた準備した。

『産業黨』事件はこの方向における國際帝國主義のすべての奸計を完全に暴露した。すでにシャハト事件が如何に國際ブルジョアジが、個々の反ソヴェト的資本家組織、ブルジョア専門家および舊シャハト所有者の勢力および資金によつて妨害活動を組織することによつて、ソヴェト聯邦における經濟建設の顛覆を準備したかを暴露したとすれば、『産業黨』事件は、如何に反革命的、妨害者の活動がソヴェト聯邦に敵對的な國民的勢力の活動と結びついてをり且つ我々の社會主義建設に對する鬭争における彼等の道具となり、ソヴェト聯邦に對する帝國主義的干渉と戦争との道具となつたかを示した。

ソヴェト權力の顛覆の直接の道具として世界帝國主義は、『産業黨』の名の下に反革命的組織に結成されたブルジョア的技師、技術インテリゲンチヤの一部をソヴェト聯邦の内部で利用しようとした。

一九三〇年末における『産業黨』事件は、フランスの參謀本部と他の帝國主義諸國家の參謀本部およびソヴェト聯邦の内部の妨害者の裏切者的活動との間における緊密な連絡の存在を證明

した。『産業黨』の妨害者——ラムジン、ラリチエフその他——の供述は審理においてこのことを完全に確認した。フランス帝國主義はたゞソヴェト聯邦の内部における妨害者の犯罪的活動を指導したのみならず、またソヴェト權力の武装的顛覆のために活潑な幹部を養成した。帝國主義フランスはすべての白色亡命反ソヴェト集團にとつての第二の祖國となつた。フランスのブルジョアジーの右翼的グループの保護の下にパリにおいて、十月革命の後そこへ逃亡したツァール・ロシアの舊有産者の組織、謂ゆる商工黨トルグプロムが発生したが、それは實にフランスの支配的グループとソヴェト聯邦の内部の妨害者の組織——『産業黨』との間における連絡の環であつた。

『産業黨』事件は全世界の前に、ソヴェト聯邦に對する直接の軍事的干渉の脅威が國際帝國主義によつて日程に上されてゐることを暴露した。干渉者の計畫は、『産業黨』事件によつて暴露されたけれども、それにも拘らず、ソヴェト聯邦に對する干渉の危険性、戦争の脅威がこれによつて決して日程から除去されなかつたことを忘れてはならぬ。世界帝國主義は、自己の急速な破滅を豫感しながら、あれやこれやの形で干渉の試みを更新しようと努力してゐるのである。

### スィルツォフ—ロミナー—ジェ—シャツキンの右翼的

### 『左傾的』ブロック

第十六回大會の後黨は非常に急速に右翼的『左傾的』ブロックの現はれの一つに關する問題を解決しなければならなかつた。

社會主義建設の困難に面しての狼狽は、右翼的偏向の觀念的基礎の上にスィルツォフ—ロミナー—ジェ—シャツキンその他の地下的反黨的グループの形成を喚び起した。この右翼的グループの基本的核心はスィルツォフによつて率ゐられたが、『左翼』のそれはロミナージェとシャツキンによつて率ゐられた。彼等がそれを基礎にして一緒に進んだ共同政綱は、根本的な點において右翼日和見主義者の政綱と一致した。それは、社會主義建設の困難で投機しようとするところの、黨の方針に對する不満者のために綱領を與へ、ボルシニヴィキの放棄と『資金建設の戦線を狭めること』(ロミナージェ)とを要求した。スィルツォフ、ロミナージェその他は自己の日和見主義的政綱の辯明のために、我々の建設の成功を『詐欺』(スィルツォフ)と説明すること、スターリングラード・トラクター工場を『暗黒の農村』(スィルツォフ)と説明すること、外コーカサスのソヴェト機構の中には『労働者や農民の必要や利益に對する貴族的』封建的關係が支配してゐる

る』(ロミナージュ)と主張すること等々の如き、黨やソヴェートの指導に對する鬭争の純粹にメンシヴィキ的な、深刻に誹謗的な仕方に訴へた。『兩グループは自己の分派的活動において黨の秘密決議の暴露を許した。スィルツォフも、ロミナージュおよびシャツキンも、黨の指導に對する自己の態度において二心と黨の欺瞞との戦術を實行したが、中央統制委員會における審問に際しては豫め知つてゐて間違つた供述を與へた』。これに基いて中央委員會および中央統制委員會は一九三〇年十二月一日スィルツォフとロミナージュ等を全ソ聯邦共產黨中央委員會の中から除名し、シャツキンを全ソ聯邦共產黨中央統制委員會の中から除名することを決議した\*。

\*スィルツォフ、ロミナージュその他の分派的活動に關する全ソ聯邦共產黨中央委員會および中央統制委員會の決定。

かやうに黨はソヴェト聯邦が社會主義へ入つた時期に、二心あるグループに對して、黨の正しい方針への信頼を掘り崩さうとする熱烈な企圖に對して、反對派の日和見主義の方針を隠蔽する讚美的行動に對して、黨の方針の歪曲のすべての形に對して鬭争を行はなければならなかつた。しかし黨に對する反對派の攻撃の支持者は益々少くなつた。右翼的『左傾的』ブロックの敗北は、社會主義への道の成功的な前進の當然の結果たる、トロツキー主義および右翼日和見主義の觀念的粉碎の反映であつた。

### 中央委員會および中央統制委員會の十二月(一九三〇年)聯合總會

第十六回黨大會はこの發展段階における黨の基本的諸任務を決定した。これらの任務は、五ヶ年計畫を四ヶ年で遂行し、社會主義の原理の上に國の農業を根本的な點において再建し、ソヴェエト聯邦を全面的集團化の國に轉化し、そしてこの基礎の上に資本主義の最後の遺物を根絶することに歸着した。一九三〇年十二月十七—二十一日に開かれた中央委員會および中央統制委員會の聯合總會は、第十六回大會の時から過ぎ去つた半年間における黨の活動を總決算し、そして一九三一年における活動計畫を立てた。ソヴェエト國は五ヶ年計畫の實現の第三年に入つた。この決定的な年における經濟建設の諸任務の成功的な解決は、巨大な歴史的意義を帯びた。

社會主義的部分が國民經濟において絶対に支配的役割を占めた我國は、——と總會の決議『一九三一年におけるソヴェエト聯邦の國民經濟計畫について』の中には述べられてゐる、——展開された社會主義的攻撃の時期、社會主義の時期に入つた。攻撃の一九三一年は資本主義に對するその鬭争における社會主義の新しい達成、新しい最大の成功の年であらう。集團化の領域における計畫の遂行は、農村における個人的部分に對する社會主義的要素の絶対的優位を與へ、勞働者



階級と勤勞農民大衆との結合を鞏固にし、そしてソヴェト聯邦の社會主義經濟の土臺の建設を完成する。これは世界史的意義を有する事件であらう\*』。

\* 全ソ聯邦共産黨決議集、第二部、六八一頁。

中央委員會および中央統制委員會十二月總會の巨大な意義は、それが五ヶ年計畫——社會主義の戰勝的攻撃の計畫、國民經濟の全部門における巨大な社會的、經濟的および技術的課題の計畫——の重要な第三年における黨の活動の具體的任務を樹てたことにある。レーニンの政策の基礎の上に、黨は、その結果として來るべき社會主義社會の明瞭な輪廓が示されたやうな成功を達成した。

『社會主義の經濟的基礎を作り出すことは、——同志スターリンはコミンテルン執行委員會第七回總會において述べた、——農業と社會主義的工業とを一つの全體的な經濟に結合すること、農業を社會主義的工業の指導に従屬させるこそ、農工業生産物の直接的交換の基礎の上に都市と農村との間の關係を調整すること、その助けによつて階級が生れるところのすべての運河、何よりも先づ資本を閉鎖し且つ清算すること、結局、階級の廢絶に直接導くやうな生産および分配の條件を作り出すことを意味する\*』と。

\* スターリン、反對派について、四五三頁。

決議『一九三一年における國民經濟計畫について』の中で、中央委員會および中央統制委員會總會は次のことを指摘した——

『……決定的勝利の見透しは勞働者や農民の中に熱心の新しい爆發と新しい勞働の昂揚とを喚び起さざるをえない。しかしそれはまた我々の階級敵の憎惡と敵意とを強めざるをえない。さればこそソヴェト聯邦の内部の資本主義の遺物はかくも絶望的に抵抗する（クラークの抵抗、妨害活動等々）。さればこそ國際資本主義はソヴェト聯邦に對する武裝的干渉にたくも熱狂的に準備しつゝある。尖鋭化された階級闘争のこれらの條件の下においては、社會主義建設の途上に、『五ヶ年計畫を四ヶ年で』といふスローガンの實現の途上に横はる困難の克服への勞働者階級、コホーズ農場員およびすべての勤勞者の創造力の最大限の動員が要求される。正にこれらの條件の下においてこそ國の工業化のヨリ以上の展開と社會主義建設のために、國の防衛能力の強化のために力の最大限の緊張が我々から要求されるのである\*』と。

\* 全ソ聯邦共産黨決議集、第二部、六八一頁。

中央委員會および中央統制委員會總會において同志リュコフとブハーリンは社會主義建設の成

功の承認を以て進出した。遺憾ながらこの承認は著しく遅れた。

『敵が我々の力と我々の成長とを見始めた後、——と同志カガノヴィチは自己の報告において指摘した、——我黨を誹謗した人々が我々の力を認め始めることは、困難ではない』と。

總會は同志ルィコフを中央委員會政治局員およびソヴィエト聯邦人民委員會議長の職務から解任することを決議し、彼の代りに同志モロトフを人民委員會議長に指名した。

社會主義經濟の土臺の建設は數百萬の勤勞者大衆の社會主義建設への吸引を要求する。ソヴィエト國における社會主義建設の巨大な成功はプロレタリア民主主義の廣汎な發展と關聯してゐる。この民主主義の最高形態——工場や、ソフホーズやコルホーズにおける社會主義的競争、突撃活動および呼應産業、財政計畫——の展開は、プロレタリア民主主義の原理の上における勤勞者國家の全機關——そして第一にソヴィエト——の再建の基礎であつた。國家機構と最下層の勤勞者大衆との直接の連絡を達成するために、中央委員會總會は一九三二年の初めに行はれるソヴィエトの改選のためにソヴィエト選舉戦に全勤勞者人口を一人残らず引き入れよ、といふスローガンを與へた。

### メンシエヴィキの反革命的組織事件

ソヴィエト聯邦の巨大な社會主義建設を背景にして、都市および農村の勤勞者大衆の益々高まる幸福を背景にして、國の巨大な文化的小および經濟的昂揚の存在の下に、『産業黨』事件に次いでメンシエヴィキ的『聯邦局』事件が展開された。この事件は勤勞者階級に對するロシアのメンシエヴィキの裏切と犯罪との連續を完成した。一九三一年三月一日十四人の最も有名なメンシエヴィキが被告席に就いたが、彼等はソヴィエト機構において責任ある指導的地位を占め、それと同時にソヴィエト聯邦に對する妨害活動と干渉の準備に従事したのである。ソヴィエト國內および國外の白色亡命者の中にその熱烈な破片が保持されてゐた限りにおいて、この十四人のメンシエヴィキと共に、その過去および現在における全ロシア・メンシエヴィズムが被告席に就いたのである。しかしこれは、ロシアのメンシエヴィキが第二インターナショナルの中に入つてをり、そのイデオロギイを説教し且つその指令に服従した限りにおいて、また第二インターナショナルに對する裁判であつた。

政治闘争の歴史的舞臺において粉碎され、完全に破産したロシアのメンシエヴィキは、ブルジョ

アジの利益と全く一致して、すでに一九二四年に、ソヴィエト聯邦における資本主義の復活を全く期待した自己の活動の綱領、謂ゆる『ロシア社会民主労働者黨政綱』を作成した。この『政綱』においてメンシエヴィキは次の要求を提起した、即ちソヴィエト制度の廢止——たゞブルジョア民主共和國への過渡的段階としてのみかゝるものを許すこと。例へば鐵道、郵便、電信等々の如き全國家的意義を有する企業、およびまた、主として燃料の採取および金屬加工に關する國民經濟の基本的部門における若干の最大の企業を除いて、そして『これらの企業の經營が國家にとつて力相應であるならば』といふ條件の下に、舊所有者に彼等の企業を返還すること。土地國有の廢止と個々の家主への彼等の所有に屬する土地の自由處分權の提供。外國貿易の獨占の廢絶と國內における私營商業の復興。これがソヴィエト聯邦における資本主義的關係の完全な復興を期待したロシアのメンシエヴィキの綱領であつた。

ネップとトロツキー派および右翼日和見主義者の進出との最初の段階は彼等の綱領の『平和的』實現に對するメンシエヴィキの期待を支持した。しかしこの期待は急速に消滅しなければならなかつた。

國の工業化の増大、ソフホーズおよびコルホーズ建設の増大、そして最後に農業の全面的集團化とこの集團化の基礎の上における階級としてのクラーク層の清算とへの移行は、メンシエヴィキにソヴィエト聯邦における資本主義的關係の『平和的』復興に對する彼等の期待の破産を決定的に確信せしめた。ソヴィエト聯邦における資本主義的關係の『平和的』復興に對する自己の期待の破産を確信せしめられた後、メンシエヴィキは社会主義建設事業の直接の妨害活動と他の干涉者グループ——同一の源泉、即ちロシアの白色亡命者ブルジョアジーおよび外國の帝國主義ブルジョアジの袋によつて養育された、『産業黨』および『勤勞農民黨』——と共に、ソヴィエト聯邦に對する武裝的干涉の準備に移行した。

ソヴィエト聯邦内におけるメンシエヴィキの反革命的妨害者的組織は、ソヴィエト聯邦における資本主義の『平和的』復興に對する賭けが決定的に擊破された一九二八年の初めに形成されたところの、謂ゆる『聯邦局』によつて率ゐられた。『聯邦局』の中へは、一九一七年の革命前數十年間メンシエヴィキ組織において活動した有名なメンシエヴィキが參加した、——グローマン、シエル、ギンズブルグ、ソコロフスキー、フィン・エノタエフスキー、イコフその他。すべて彼等はソヴィエト機構において顯著な、責任ある地位を占め、信頼を利用した、それだけ彼等の妨害活動は一層厭ふべきものであつた。

『聯邦局』はメンシエヴィキの國外中央委員會と結ばれ、自己の妨害者の活動においてそれから指令を受け、ソヴィエト權力に對する暴動準備の資金を受けた。内部的反革命の力によつてソヴィエト權力の顛覆を達成することに失望した後、ダン、アブラモヴィチ、ガルヴィその他を先頭とするメンシエヴィキの國外中央委員會によつて指導される『聯邦局』は、世界帝國主義ブルジョア階級の力によるソヴィエト聯邦に對する武裝的干渉の準備の道に立つた。

『聯邦局』は自己の反革命的活動を他の反革命的組織——『産業黨』や『勤勞農民黨』——との密接な聯合の下に行ひ、『産業黨』から妨害者の活動の資金を受け、その代りに『産業黨』へ干渉の準備の對象に關する秘密の情報を提供した。公判の審理は、『聯邦局』に結合されたロシアのメンシエヴィキおよびロシア社會民主労働者黨國外中央委員會からの彼等の直接の激勵者のすべての反革命的活動を暴露したのみならず、この審理はまたメンシエヴィキが自己の活動において最も黒い反動と——白色亡命者陣營の札附の反革命家や資本主義國の帝國主義陣營のソヴィエト聯邦に對する戰爭挑發者と結ばれてゐるところの、すべての秘密の絲を暴露した。被告は相次いで自己の供述において裁判所の前に、ソヴィエト聯邦の労働者や農民に對して彼等の敵によつて計畫されたしまた計畫されてゐる惡業の戰慄すべき繪卷を展開した。

メンシエヴィキ事件は、我々を脅かしてゐる危険性のすべての忘却者に、ソヴィエト共和國の敵の陣營がカトリック僧侶から第二インターナショナル指導者まで及んでゐること、ソヴィエト聯邦の敵は、如何に彼等が無花果の葉によつて隱蔽されてゐようとも、ソヴィエト聯邦に對する自己の敵對行爲において結局精神を同じくしてゐることを今一度力説し且つ明瞭に納得させた。この意味において反革命的メンシエヴィキ組織の事件は、ソヴィエト聯邦の労働者にとつても、國際プロレタリアートにとつても、巨大な教育的意義を持つてゐたしまた持つてゐる。被告達は裁判所の前に、それと共にまた全世界の前に、如何に彼等が反革命的活動を行つたか、何人によつてこの活動のために活氣づけられたか、何人と結ばれ且つ何に主として望みをかけたかを自ら物語つた。最後のクラーク的要素の外には、労働者階級および農民層の中に些かの支柱をも持たないメンシエヴィキは、干渉者の陣營へ無條件に参加した。

メンシエヴィキが自らをその支部と看做した第二インターナショナル全體もまた同じ方向へ向つて行動した。

メンシエヴィキ事件は全ロシア・メンシエヴィキの立派な曲尾の和音であつた。比較的長期間メンシエヴィズムは、その當時ボルシエヴィキによつて労働者階級の中におけるブルジョアの手先として

暴露されながら、労働者階級の指導を渴望し、社会主義のための闘争の旗によつてさへも隠蔽された。この事件は、すでに一九一七年に政治的流派として葬られたロシア・メンシエヴィキの墓にやまならしの杭を打ちこむと共に、第二インターナショナル旗の下に國際プロレタリアートの利益を裏切る世界メンシエヴィズムの内臓をも暴露した\*。

\*メンシエヴィキの活動を隠蔽したデー・ビー・リャザノフがこの事件と關係して黨から除名された。

### 一九三二年中央委員會六月および十月總會

その後の二つの中央委員會總會（一九三一年六月および十月における）は、一九三一年の播種の豫備的結果や收穫増進カンパニヤの問題の如き當面の問題と並んで、鐵道運輸の組織やソヴェト聯邦の都市經營の發展に關する極めて重要な問題を提起した。この二つの問題が中央委員會總會の審議に提起されたのは、鐵道運輸の發展が國民經濟の他の部門の發展よりも緩慢なテンポで進行し、そしてその發展のヨリ以上の遲滯は増大しつつある貨物流通や商品流通および巨大に増大した人口移動にとつて大なる困難を齎したからである。最近の數年間に黨の強化された注意を要求するところの都市經營についても同様である。何故なら都市の整備は都市人口の増大と歩を

共にせず、そしてこのことは労働者階級の物質的および文化的水準の當然の増大に對する障礙であるからである。

すでに一九三一年の播種の豫備的結果は、黨が農業の集團化の道において如何に巨大な、決定的な成功を達成したかを示した。この當時集團化は基本的穀物地方において完了されてゐた。他の穀物地方および決定的な甜菜および棉花地方においては集團農場は經營の半數以上と農民播種地の六〇%以上を結合してゐた。かくして、一九三〇年一月五日中央委員會の決議および第十六回大會の決議によつて樹てられた集團化のテンポは凌駕された。集團農場に結合された農民經營の生産性は著しく高まつた。コルホーズ農民は農村におけるソヴェト權力の眞實且つ鞏固な支柱に轉化し、コルホーズとソフホーズとは農業における基本的生産者となつた。穀物地方および原料地方においては階級としてのクラーク層の清算が完了された。個人經營者の貧農的および中農的經營は二次的役割を演じ始めた。ソフホーズの數は僅か一年間に二倍に増加した。

レーニンの政策の結果ソヴェト聯邦は最大の農業國となつた。一九三一年春、千三百萬の舊個人經營を結合した約二十萬のコルホーズが、四千のソフホーズと共に、春蒔播種面積の三分の二以上に播種した。

けれどもこの場合多くのコルホーズの組織的、經濟的狀態はまだ非常に低い水準にあつた。やりつ放しに對する鬭争、出來高拂制度の實施、コルホーズにおける勞働日の正しく提起された計算、コルホーズ農場員の中における収入の正しい、そして時宜を得た分配——これらのことにヨリ以上の集團化の成功、すでに設立されたコルホーズの鞏固化は依存した。總會は穀物、野菜、棉花その他の工業用作物、乾草その他の飼料の收穫の確保のために、コルホーズへの農業機械の供給のために多くの方策を採用した。黨は國民經濟の眞の組織者になつた、だから、細胞から中央委員會總會および大會に至る黨の諸集會において、黨は社會主義建設の具體的諸問題を提起し、それを社會主義社會の完全な建設のための鬭争の一般的任務の見地から解決した。

### 鐵道運輸の再組織

鐵道運輸の再組織もまた巨大な重要性を有する問題である。國民經濟の社會主義的改造、……國の工業化の成功的な實現、すべての工業部門の急速な發展、新しい工場、強力な綜合企業工場の建設、その集團化の基礎の上における農業の増大する昂揚、ソフホーズの建設、最も農富な生産地を有する新しい地方の暴風雨の如き發展、國の經濟生活への邊疆の廣汎な吸引は、社會主義

的工業化の不可分の有機的部分たる鐵道運輸の活動の巨大な成長を豫定する\*。總會はソヴィエト聯邦の鐵道網の著しい増大を確認した。一九三〇年における貨物の流通は戦前の水準を八〇%凌駕し、旅客運輸は三倍に増加した。しかし鐵道網は餘りに小さいから、運輸にも明瞭に反映される世界恐慌と特に關聯して、何れの國も知らないところの、過度の緊張が見受けられる。ソヴィエト國はその存在の數年間に、一萬二千八百キロ米の新しい鐵道を建設し、その中にはツルクシブの如き強力な線もある。しかし運輸の成長のテンポは『……國の社會主義建設の展開のテンポに照應せず、その結果運輸は國民經濟における狭い場所となつた\*\*』。

\* 一九三一年中央委員會六月總會の決議から、全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、六九八頁。

\*\* 同上、六九九頁。

黨中央委員會は自己の諸會議において運輸の改善や、再組織や、鐵道従業員の物質的地位の改善の問題を一再ならず提起した。一九三一年中央委員會六月總會は、鐵道の電化の方向における體系的改善、強力な輪轉材料（蒸氣機關車、電氣機關車、内燃機關車）、五、六十噸の貨車、自動聯結機、自動發動機、自動閉塞機の採用、路線の表面構造、牽引構造、給水、連絡の改造、積荷、荷卸作業の機械化等々を計畫した。總會は鐵道従業員の賃銀問題に、住居、生活條件に、およ

び運輸における労働組合および黨の活動のヨリ善き組織に、大なる注意を拂ひ、『運輸——國の社會主義的工業化の破却し難い一部分——は社會主義建設の一般的展開と完全に照應してそのすべての環において發展せしめられなければならない』ことを力説した。

中央委員會（一九三一年）十月總會には鐵道運輸の問題が以前採用された決議の遂行の検査の意味で再び提起された。

### ソヴェエト聯邦の都市經營の發展

モスクワ市經營とソヴェエト聯邦の都市經營の發展とに關する中央委員會書記同志カガハヴィチの報告は、すべての我都市經營の改善に關する、特に大工業中心地——モスクワ、レニングラード、ハリコフ、ニジノヴゴロドその他におけるその改造に關する巨大な活動の出発點であつた。都市經營の改善の問題は我國の數百萬のプロレタリアと指導的幹部の物質的および文化的、生活的必要の改善の問題である。

ソヴェエト權力は都市經營をプロレタリアートへの奉仕のために提起した。それは『資本主義的家主のすべての家屋を完全に收奪してそれを都市ソヴェエトへ引渡した。それは町外れからブ

ルジョアの邸宅への労働者の大衆的移轉を實行した\*。黨とソヴェエト權力との任務は、すべての注意が都市の中心に注がれて、町外れは、排水設備もなく、水道もなく、交通手段もなしに、泥濘、暗黒に沈んでゐた時、家屋が家主の壓迫手段として役立つてゐた時の都市經營に對する貴族的、領主的態度を片づけることにあつた。困難は、多くの大都市經營において妨害活動が繁榮した時に、プロレタリアートに經驗が缺けてゐたことのみにあつたのではなくて、帝國主義戦争と内亂がそれなくしても劣悪な状態に置かれてゐた都市經營（水道、排水設備、浴場、住宅）を完全な崩壊、破壊の状態に導いたことにあつた。ソヴェエト權力の初年には主たる注意が工業および農業の復興に拂はれなければならなかつた、そして漸く最近三年間にソヴェエト權力は一層眞面目にこの任務——都市經營の發展の解決にもまた着手することができた。この領域においてもまた基本的な點において復興期が完了されて、改造期が始まつた。だから中央委員會總會は任務を次の如く決議した——

『……今日工業化の暴風雨の如きテンポによつて、都市人口の増加によつて、廣汎な労働者大衆の生活のおよび文化的需要の増大によつて提起される要求に適應して、都市經營の擴大、再建および發展に關する活動を展開せよ\*\*』と。

\* 一九三一年中央委員會六月總會の決議から、全ソ聯邦共産黨決議集、第二部、七〇九頁。

\*\* 同上、七一〇頁。

新しい社會主義的都市が成長し（十四年間に四十二の新都市が發展した）、そしてこれらの都市においては『……廣汎な勤勞者大衆の文化的昂揚と健康の保全、勞働生産性の向上と婦人労働の家庭經濟の鐵鎖からの解放を確保すること\*』が必要であつただけに、この任務は一層緊切であつた。中央委員會總會は、『都市經營の諸問題（住宅、給水、照明、煖房、排水設備、都市運輸、外部的整備、浴場、洗濯所、社會給養）が最大の意義を帯びてゐる\*』時に、勤勞者の物質的生活條件の改善のため、文化的昂揚と彼等の健康の保全のため、實質賃銀の不斷の増大のために闘争せよ、といふ斷乎たる指令を與へた。

\* 一九三一年中央委員會六月總會の決議から、全ソ聯邦共産黨決議集、第二部、七一〇頁。

總會は最近數年間におけるソヴィエト聯邦の都市經營の發展における——モスクワ、レニングラード、バクー、グロズヌイ、ノヴォシビルスク、スターリングラードその他の都市における巨大な成功を確認した。即ち住宅建設、電車網、水道網、排水設備網の擴張、社會的文化的施設、醫療の改善等々がこれである。特に一九三一年中央委員會六月總會はソヴィエト聯邦の首都——

モスクワの都市經營に注意を向け、そしてモスクワ委員會とモスクワ・ソヴィエトによつて樹てられた都市經營の社會主義的再建の廣汎な計畫を是認し、住宅建設三ヶ年計畫を作成することを委任し、この場合生活狀態の新しい任務を豫想しつゝ、（洗濯所、浴場、病院、食堂、幼稚園、店舗、倉庫等々）、最高國民經濟會議に工業建設と並んで又適當な住宅建設を展開すること、社會給養とパン製造とを擴張し且つ改善すること、市の動力經濟を擴張し且つ改善すること、都市運輸を再組織して、市内電氣鐵道を建設し、そして一九三二年には地下鐵道の建設に着手すること、市の衛生狀態を改善すること、モスクワへ水を十分に供給することと水路の改善の目的で、モスクワとヴォルガ河とを結ぶ運河を建設すること（これに關する適當な具體的な決定は一九三二年の夏採用された）を委任した。最後に中央委員會總會はモスクワの諸組織に『モスクワ市のヨリ以上の擴張と建設との眞面目な、科學的に基礎づけられた計畫の作成』に着手することを委任した。

同時に總會は、最も重要な工業中心地へ注意を集中しつゝ、全ソヴィエト聯邦における都市經營の發展のテンポを速めること、地方的建設材料、特に都市經營のためのあらゆる種類の機械の生産と適用とを眞面目に提起すること、都市經營のための幹部の養成を眞面目に組織することを



決議した。組織關係においては總會は共和國に存在する公營事業局を特殊な都市經營人民委員部に改造することを計畫し、そして住宅及び都市經營の基本的諸問題の研究のためにソヴェト聯邦中央執行委員會の下に都市及び住宅經營問題に關する全聯邦會議を形成すべきことを決議した。

總會はまた『……社會主義經濟の發展のボルシェヴィキ的テンポに反對し、労働者およびコルホーズ人口の文化生活的施設の再建に反對する右翼日和見主義者並びにあらゆる種類の山師的提議（個人的臺所の強制的清算、生活コミュニンの人為的移植等々）を以て進出する「左翼」日和見主義的誇張者の偏向に對する』闘争の必要を指摘した。

總會は、黨が自己の一般方針の實行の基礎の上に『今日の都市を文化的な、技術的な、そして經濟的に發展したプロレタリア的中心地に轉化し且つ數十數百の新しい社會主義的都市を建設し』うるという確信を表明した。

### ソヴェト商業の展開と労働者への供給の

#### 改善の問題

廣汎な大衆への食糧品、衣服、履物その他の大衆的消費品の供給を適當に組織するために、我々

が如何に多くの障礙と如何なる困難とを克服しなければならなかつたか、商業を營むことが如何に困難な仕事であつたかを、來るべき世代は殆ど理解しないであらう。

レーニンが第十一回黨大會において我々の前にこの問題を提起したとき、多くの人は、ソヴェト商業および協同組合商業の正しい組織のためにそれほど歳月を要するとは想像しなかつた。レーニンは死の少し前の協同組合に關する自己の論文において、この問題に再び立ち歸り、文化的なソヴェト商業および協同組合商業が社會主義の勝利にとつて如何に巨大な意義を有するかを指示した。商品の數量がこの時期に必要な増大および消費の規模の増大から立ち後れた、といふ事情は、我々五年計畫によつてそれを克服しなければならなかつた基本的な困難を疑ひもなく作り出した。そして五年計畫は生産の増大といふ意味で著しい程度にこの困難を克服した。しかし國の商品生産物の全量の分配はまだ依然として極めて不満足な状態にあり、黨は最も近い時期にそれに注意を集中し、『商品の機械的分配からソヴェト商業の展開、ネップマン的精神の完全な驅逐および商業協同組合機構の官僚主義的要素の排除の軌道へ』の移行を達成しなければならなかつた。

中央委員會は一九三一年および一九三二年に協同組合商業およびソヴェト商業のこれらのプ

レーキの排除、清算のために多くの決定を採用した。同時に黨は、コルホーズ商業の展開の任務を提起し、コルホーズに多くの利益を提供し、都市においてこの商業の正しい組織を確保し、そしてコルホーズの商業の調節の點において協同組合におけると同じ方式が樹立された。

同時に黨は牧畜ソフホーズの改善、養豚ソフホーズと食堂所屬の飼料補給所等々の設立、國內の湖沼における魚類の養殖、養兔の發展のために多くの方策を採用した。一九三一年中央委員會十月總會は、遅くとも一九三三年末までにすべて大工業中心地において、そしてモスクワ、レニングラード、ドンバスおよびウラルにおいては一九三二年末、パン製造の機械化を完了すべきことを決議した。

## 第二十五章 参考文献

一九三〇年中央委員會十二月總會の決議。

一九三一年中央委員會六月總會の決議。

一九三一年中央委員會十月總會の決議。

## 第二十六章 現段階における黨

『新しい仕方で活動せよ——新しい仕方で指導せよ』

同志スターリンは一九三一年二月四日社會主義工業活動家全ソ聯邦會議における演説『經營者の任務について』の中で、プロレタリアートの獨裁の條件の下における、巨大な自然の富の存在の下における、強大な、試練を経たボルシヴィキ黨の存在の下における、社會主義社會の建設を確保するところの新しい任務を定式化した。これらの客觀的條件は我國に存在する。しかし勝利のためには更に次のものが必要である——

(一) 具體的な、事務的な指導、(二) 技術、生産の科學の獲得、(三) 管理における單獨責任制の實施。特に同志スターリンは技術の獲得の必要を力説した。彼はかう述べた、『……最小限十年間、我々は先進資本主義國から後れてゐる距離を走り通さなければならぬ』\*と。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五八五頁。力點は筆者のもの——ヤロスラフスキー

同志スターリンのこの指示は、その後の社會主義的攻撃において、技術の獲得のテンポの促進

において、國民經濟の指導の改善において、巨大な役割を演じた。

同志スターリンの演説『新情勢——經濟建設の新任務』は、更に大なる役割を持つてゐた。この演説の中で同志スターリンは新しい仕方の活動の六つの條件を定式化した。問題は非常に深刻に提起されて、たゞ工業のみならず、國民經濟の他の部門や管理もまた、同志スターリンのこの指示の中に、活動の改善のため、新しい、ヨリ高い段階へのその引き上げのための槓杆を見出した。これらの條件は如何なるのであるか。

一、何より何よりも先づ労働力の問題、失業が清算された時期におけるその組織的な監督の問題、過剰な労働力を解放する労働過程の機械化の問題である。これは労働力の流動の停止の問題であると同時に、これは労働の社會主義的合理化の問題である。

二、労働者（および使用人）の賃銀。同志スターリンは、労働力の流動の主要原因としての賃銀の平等化に激しく反対し、マルクスやレーニンが『……社會主義の下においてさへも、階級の廢絶の後においてさへも』熟練労働と不熟練労働との間の差別の保存の不可避的なことについて述べたこと、『たゞ共產主義の下においてのみこの差別が消滅しなければならないこと、この故に「賃銀」は社會主義の下においてさへ必要によつて支拂はれないで、労働によつて支拂はれな

ければならないこと\*』を想起した。こゝから『……労働力の流動を清算し、賃銀の平等化を廢絶し、賃銀を正しく組織し、労働者の生活條件を改善する\*』任務が生ずる。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五八九頁。

\*\* 同上、五九二頁。

三、労働の組織が根本的に改造されなければならない。即ち『……やりつ放しを清算し、労働の組織を改善し、力を正しく諸企業に配置し\*』なければならない。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五九三頁。

四、ソヴェト聯邦の労働者階級が自身の生産的技術的インテリゲンチヤを持つことが達成されなければならない。『……競争の創意者、突撃隊の指導者、労働の昂揚の實際的鼓舞者、建設のあれやこれやの部分における労働の組織者——それが高等學校を卒業した同志と共に労働者階級インテリゲンチヤの核心を、我工業の司令部の核心を形成しなければならない労働者階級の新しい間層である\*』。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、五九五頁。

五、『……舊派の技師、技術員の層に対する態度を改變し、彼等にヨリ多く注意と配慮とを表

はい、より大膽に彼等を活動に引き入れよ。同志スターリンは根據なき特技者侵害に決定的に反對し、社會主義建設の成功と關聯してソヴェト權力に對する忠實な態度の方への『舊い生産的技術的インテリゲンチヤの中における轉換の徴候』を力説した。

六、『經濟計算を定着させ且つ鞏固にし、工業内の蓄積を高めよ』。

これらの六つの條件の實行はすべての活動の再建を要求した、即ち『新しい仕方で活動せよ——新しい仕方で指導せよ』がこれである。我々の生産計畫の現實性を疑つた人々に、同志スターリンは、その遂行を保證する諸勢力を指摘した、『……生産計畫は數百萬人の生きた實踐的な活動である。我々の生産計畫の現實性は、新生活を創造する數百萬の勤勞者にある。我々の計畫の現實性は、生きた人々、我々と諸君、勞働に對する我々の意思、新しい仕方で活動しようとする我々の準備、計畫を遂行しようとする我々の決意にある。それが、この決意自體が我々にあるであらうか？ 然り、ある。従つて、我々の生産計畫は實現されうりましたまたされなければならぬ\*』と。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、六〇三頁。

### この決定的な時期における同志スターリンの

### 理論的活動の意義

その存在の三十年間における黨の最大の征服は、その隊伍に三百萬人以上の黨員と候補者が集められたこと、數百萬の共産青年同盟組織が黨の指導下に成長したことである。偶然的な、無縁の、黨に取り入つた要素はこの大衆の中でいふに足らぬ少數者を成し、そして黨は彼等を容赦なく黨の中から驅逐した。マルクスレーニン主義の革命的理論——この最も強力な革命的な武器——によつて武装された數百萬の人々は、社會主義的攻撃を指導しうる巨大な勢力を成した。この勢力については、數年前の如く、これは『たゞ農民の大海における一滴にすぎない』とは、すでにいふことができなかった。黨は管理と社會主義建設の巨大な實際的經驗を積み、黨は大なる理論的經驗を積んだ。黨員および全勤勞者大衆のマルクスレーニン主義的啓蒙は黨の不斷の心配であつた。共産主義高等専門學校、ソヴェト黨學校、諸企業における政治教習の網——すべてこれらは以前に比して一層大なる高さに黨によつて引き上げられた。レーニン全集第三版、五十萬部のレーニン選集、マルクスレーニン全集——これがマルクスレーニン主義的啓蒙の基本的な典據であつた。

しかし何れの黨史家も、特に近年同志スターリンによつて遂行された巨大な理論的活動を見逃すことができない。

我々にはすでに上に、地下運動の時期およびその後の時代——プロレタリア革命期における理論家としての同志スターリンの意義を指摘した。レーニンの死後マルクス—レーニン主義の理論および實踐のすべての最も重要な問題が、我黨の指導者同志スターリンによつて研究された。何よりも先づ一國における社會主義の勝利の問題、——それについて同志スターリンがすべての日和見主義者と闘争し、たゞ黨全體の前にそれをレーニン式に理論的に解明したのみならず、社會主義的攻撃のすべての細目を實踐的に研究したところの問題——がこれである。我々にとつてマルクス主義はドグマではなくて、行動への指針である、といふレーニンの命題をば、同志スターリンは黨の存在の三十年間を通じて輝しく適用することができた。それがために我々が過去から指示を汲み取るころがなかつた社會主義的改造の最も困難な時期に、同志スターリンは國の工業化と關聯した諸問題、小および極小商品農民經營の集團的經營への轉化、ソフホーズの設立、生産的結合の展開、ソヴィエト商業およびコルホーズ商業、機械トラクター配給所の組織の如き諸問題を研究した。すべてこれらの巨大な意義を有する社會主義經濟、社會主義經濟學の問題は、そ

れらの實踐的、事務的解決と結合された深刻な理論的取扱を要求した。黨によつて樹てられた目的の實行における鐵の如き堅牢さ、政治的に遠くの見えることおよび人を評價する最大の能力は、同志スターリンをその周圍に黨全體と共産インターナショナルとが結成したところの指導者の搖ぎなき權威たらしめた。

同志スターリンの活動におけるプロレタリアートの國際政策、コミンテルンの政策の幾多の問題の解決も、これに劣らず大なる意義を持つてゐる。

ソヴィエト社會主義共和國聯邦の設立の如き任務が同志スターリンの指導の下に研究され且つ解決された。ネップの最後の段階における全面的集團化と階級としてのクラーク層の清算の問題は理論的にも實踐的にも同志スターリンによつて研究された。

我々はずいで同志スターリンの手紙、雜誌『プロレタルスカヤ・レヴォリュチヤ』編輯部宛の『ボルシエヴィズムの歴史の若干の問題について』の巨大な意義について述べた。この手紙の中で同志スターリンはトロツキー派の宣傳を暴露し、その助けによつて我文獻においてレーニン主義に敵對的な見解が曳きづられてゐる腐敗せる自由主義のすべての害毒を指示したのみならず、——同志スターリンは、如何にボルシエヴィズムの歴史の研究を一層大なる理論的高さに高めなければな

らないかを指示した。この手紙は疑ひもなく黨史、革命史の多くの問題の研究における轉換點であつた。『内亂史』の如き、『工場史』の如き黨の企ては、同志スターリンの直接の指導下に行はれた。同志スターリンの『レーニン主義の諸問題』はあらゆる共産主義者にとつて彼等の活動において必要な指針となつた。

### 第十七回黨會議

社會主義建設第一次五ヶ年計畫の第四年を終了した一九三二年の初め、第十七回黨會議が開かれた。會議は、益々深まり行くところの、規模と深刻さにおいて未曾有の帝國主義の世界的危機の情勢の下に開かれた。資本主義諸國における生産が減少し、新しい建設が殆ど全く停止され、ヨーロッパと北米合衆國における失業者数が二千五百萬を超過し、そして多くの最大の資本の大立物が絶望して自殺を遂げた（『マッチ王』クロイゲル、剃刀及王、シカゴ寫真器械王等々）時に、——この時期に、ソヴェト聯邦は、工業生産高が増大した（一九三一年には前年と比較して二一%の増加、だが重工業については二八%）唯一の國であつた。かゝる繁榮は未だ曾て何れの國においても資本主義工業が知らなかつたところである。ソヴェト聯邦は、たゞ失業が絶滅さ

れたのみならず、國民經濟の巨人的なヨリ以上の成長が保證された唯一の國である。

同志スターリンの六つの條件の實施の基礎の上に『黨全體、經營者、組織者、最良の技師、技術活動家の努力によつて、労働者階級全體の努力によつて新技術の大規模な定着と新生産の獲得が行はれた』。強力的且つ超強力的な（塊鐵、壓延機）機械製造と最も重要な工業部門の裝備の建設が巨大な發展を遂げた。化學工業の發展が強力な刺戟を受けた。人造纖維の生産が大なる前進をなした。

黨の指導下における労働者階級の友誼的な努力の結果、あらゆる色彩の日和見主義者に對する鬭争の中に、一九三一年および一九三二年には、マグニトゴルスク、クズネツクストロイ、ハリコフ・トラクター、モスクワ自動車、ニジェゴロド自動車、『シャリコポドシブニク』、ウラル銅熔鑛、ヴォルホヴォ・アルミニウム、『ヒバ鱗灰石』、ヴォスクレシエンスク化學、ベレズニキ、ネフスキ―その他多くの大企業の如き巨大工業經營が、動力および技術者設備において第一流の社會主義的企業が、期限前に運轉せしめられた。一九三一年五月一日巨人的なドネブルの堰堤が完成されてドネプロストロイの最初の電流が與へられた。乾燥地方における數百萬ヘクタールの土地の灌漑およびヴォルガ左岸地域の電化のためのヴォルガ河畔におけるその規模と意義において世界

最大の水力発電設備の問題が解決された。

同時にシベリア、ウラル、中央アジアにおいて新しい強力な石炭、冶金根據地が作り出され、新しい、未知の礦物の富が我がものにされた。

會議は決議の中で、これらの巨大な成功が同志、スターリンによつて提起された命題の基礎の上における労働の組織と全體としての工業の活動との再建によつて達成されたことを強調した。即ち「……賃銀制度の改造、賃銀の平等化とやりつ放しとに對する鬭争、労働力の流動に對する鬭争、工業への労働力の組織的吸引のためおよび労働者の住居、生活條件のヨリ以上の改善のための鬭争、經濟計算の定着と鞏固化、それを企業に近づけ且つ具體的指導を強化する目的を以て聯合を更に小さくすること、プロレタリア的生產技術的インテリゲンチヤの養成に關する活動のヨリ以上の展開と舊派の技師、技術的勢力に對する一層大なる注意と彼等についての配慮の方へ、彼等をヨリ多く活動へ吸引すること、彼等のイニシアティブを鼓舞すること、の方への彼等に對する態度の變更\*」がこれである。

\* 全ソ聯邦共産黨決議集、第二部、七三〇頁。

この決議に基いて一九三二年最高國民經濟會議が更に小さくされて、重工業、輕工業および木

材工業の三つの人民委員部が設立された。内外商業人民委員部もまた、供給人民委員部と食糧工業人民委員部との二つの人民委員部に小さく分けられた。農業人民委員部は農業人民委員部とソフホーズ人民委員部との二つの人民委員部に小さく分けられた。その他の多くの聯合が更に小さくされた。

専門家のための百以上の大家屋の建設に關する特殊な決議が採用された。労働者の住居、生活條件の改善と給養の改善とのための鬭争が展開された。一九三二年春開かれた第九回労働組合大會は、第十七回黨會議の決定の精神での労働組合の活動の再建を意味するところの多くの決議を採用した。

ソヴェエト聯邦國民經濟第二次五ヶ年計畫の作成に

關する指令。第十七回黨會議の歴史的意義

第十七回會議は第一次五ヶ年計畫の豫備的結果を總計した。達成の一つは全國民經濟の改造の完成のための固有の基礎、社會主義的大機械工業の基礎の設立であつた。

他の最大の獲得は「ソヴェエト聯邦が小および極小農業國から、集團化、ソフホーズの展開お

よび機械的技術の廣汎な適用を基礎とする世界最大の農業國に轉化された\*』ことであつた。

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、七三九頁。

全國の社會主義的改造に關する巨大な活動の最も重要な結果は次のことであつた、『……資本主義的要素の清算と階級の完全な廢絶を豫定するところの、農村における資本主義の根源の最終的爆破。ソヴエト聯邦における社會主義の土臺の建設の完成は、誰が——誰を——といふレインの問題が都市においても農村においても資本主義に反對し社會主義のために完全に且つ撤回し難く解決されたことを意味する\*』。

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、七四〇頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

だがこのことは、『……人による人の搾取の基礎と源泉とが清算されつゝあり、資本主義諸國にとつて達成されえない國民所得のテンポが増大しつゝあり、失業と貧困（赤貧）が廢絶されてしまひ、都市と農村との間の「缺狀價格差」と對立とが清算されつゝあり、労働者と勤勞農民との幸福および文化水準が年一年と増進しつゝあり、死亡率が低下しつゝあり且つソヴエト聯邦の國民人口が急速に増加しつゝある\*』ことを意味する。

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、七四〇頁。

これらの勝利は、黨がトロツキー派と右翼日和見主義者との日和見主義的および反革命的理論を粉碎して、數百萬の大衆の活動力を動員すること、社會主義的競争と突撃活動とを組織することに成功し、そして全線において資本主義的要素に對して攻撃を行ひつゝ、階級敵を粉碎したことによつて、確保されたのである。

黨はどの點に第二次五ヶ年計畫の任務を見、それは労働者階級および勤勞農民層に如何なる見透しを與へたか？ 會議は『……第二次五ヶ年計畫の基本的な政治的任務は資本主義的要素および階級一般の最終的清算、階級差別と搾取とを生む原因の完全な廢絶、經濟および人の意識における資本主義の殘存物の克服、國の全勤勞者人口の無階級的社會主義社會の意識的および積極的な建設者への轉化である\*』と考へた。

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、七四〇—七四一頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

勿論、かゝる素晴らしい任務の解決は大衆の生活の物質的および文化的水準の急速な昂揚を伴はなければならぬ。だから會議は、『食糧品をも含めて基本的消費商品の住民への保證が第二次五ヶ年計畫の終りには第一次五ヶ年計畫の終りに比して少くとも二、三倍に増大されなければならない』と考へた。



これがためには全國民經濟——工業、運輸、農業の技術的改造が必要である。

これに照應して第十七回黨會議は國民經濟のすべての基本的部門にわたる第二次五ヶ年計畫の建設の指令を與へた。

無階級社會の設立の任務を提起した會議としての第十七回黨會議の歴史的意義は、この會議の決議を、その後一九三三年一月總會の決議と同様に、最も重要な我々の諸大會の決議と並列せしめてゐる。

### 階級敵、この時期におけるその闘争の諸形態

社會主義は階級の廢絶である。このレーニンの思想を我々は社會主義のためのすべての我々の闘争において決して忘れなかつた。レーニンは次のことを力説した、『……階級を廢絶することはたゞ地主と資本家とを放逐することのみを意味しない——これを我々は比較的容易になしどげた、——これはまた小商品生産者を廢絶することを意味する。だが我々は彼等を放逐することができず、彼等を壓迫することができない、彼等と仲よく暮さなければならぬ、たゞ非常に長期にわたる、徐々の、注意深い組織的活動によつてのみ、彼等を改造し、再教育することができる（ま

たしななければならぬ）』。

\* レーニン、第二十五卷、一九〇頁。

社會主義經濟の設立に關する農村におけるすべての我々の活動は、この第二の任務の解決に向けられてゐるが、我々は我々に敵對的な階級を完全には廢絶しなかつた。我々はクラーク層を擊破したが、それを叩きのめしはしなかつた。敵對的階級の遺物は全國に四散して、ソヴィエト機關、經濟機關に、供給機關、協同組合、國營商業に潛入した。特に頑強に抵抗したクラーク層はコルホーズや、コルホーズの管理部に潛入し、階級的用心の缺如のために、個々の共產主義者の階級的盲目のために、個々の黨員の腐敗、變質のために、往々農村においてまだ『廠制高地』を占めてゐる。クラーク層は假面を被ることができた。革命が以前の寄生生活を營む可能性を剝奪したところの、往々力強い僧侶、修道士、修道尼の遺物がクラーク層を援助する。彼等は、可能な場所では、腐敗的、覆滅的、反ソヴィエト的、反革命的活動を行つてゐる。即ち反革命的な噂を放ち、社會主義の方策への信頼を掘り崩し、囂喝し、あちこちでテロルに訴へてゐる。彼等は巧みに假面を被つてゐる。これは、通常人々が描き出したやうな以前の型のクラークではない。彼はコルホーズに入つてそれを破壊するために、『働くやうな身振をする。』

彼は機械を腐らせ、サボタージューし、春蒔穀物のための秋の犁起し、春の播種、刈込入れおよび脱穀を失敗させ、穀物および肉類の買上げを失敗させ、家畜および穀物を毀損し且つ絶滅する。彼は穀物を脱穀しないでまたは凹地で腐らす。

都市においてはこの階級敵は工場に潜入し、機械を腐らせ、労働規律、社会主義的競争を掘り崩し、労働者階級の隊伍を腐敗させようとする。

この場合、無階級社会への移行が、日和見主義者の考へるやうに、尖鋭化された階級闘争なくして行はれるだらう、といふことができるであらうか？

第十七回黨會議はこれに對して明瞭な回答を與へた。それは次のことを承認した、即ち『……今後においてもまた個々の瞬間および特に個々の地方および社会主義建設の個々の部分における階級闘争の尖鋭化が不可避的であること、それと共に勤勞者の個々の層およびグループに對するブルジョア的影響の保存、および若干の場合にはその強化の不可避性、更に長期間労働者の中や黨においてさへもプロレタリアートに無縁な階級的影響の侵入の不可避性を力説すること。これに鑑みて黨の前にはプロレタリア獨裁の強化と日和見主義および特にこの段階における主要な危険性としての右翼的偏向に對する闘争の、ヨリ以上の展開の任務が横はつてゐる』と。

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、七四四頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

一九三二—三三年の秋冬に行はれたクーバン（北コーカサス）、ウクライナおよび下ヴォルガの若干の地方における穀物買上げの失敗は、著しい程度にクラーク層と他の敵對的階級の遺物との階級闘争の現はれであつた。

この時期における敵對的階級の遺物に對する闘争に

おけるプロレタリア獨裁

社会主義に敵對的な階級のこれらの遺物に對してプロレタリアートの黨は最も決定的な方策を取らなければならなかつた。國家に對する義務の遂行の惡意的な拒否の個々の場合には地方からの追放が適用され、多くの地方においてコルホーズに隠れてゐるクラークの清掃が行はれた。

國營企業、コルホーズおよび協同組合の財産の保存並びに社会化された社会主義的所有權の確定に關する法律が發布され、その中にはかう書かれてゐる、『……ソヴィエト聯邦中央執行委員會および人民委員會は、社会化された所有權（國家、コルホーズ、協同組合の）がソヴィエト制度の基礎であり、それが神聖不可侵であり、そして社会化された所有權を侵害しようとする者は人

民の敵と見られなければならない、と考へる。故に社會化された財産の私消費者に對する決定的闘争はソヴェト權力機關の何よりも第一の義務である」と。この法律はコルホーズおよび協同組合の財産の掠奪（窃盜）に對する司法的壓迫の處分として社會的防衛の最高の處分——銃殺を要求し、加ふるに全財産の沒收と酌量すべき情狀ある場合に限り十年を下らざる期間自由の剝奪を以てこれに代へることを以てし、この事件に關する被告に對する大赦の適用を拒否してゐる。

かくしてプロレタリア獨裁は社會主義的社會化された所有權の敵に對する國家權力の武器を鋭くし、労働しないで、労働者階級および勤勞農民の労働によつて生活しようとする者に打撃を與へた。事の本質においてこの法律は、たゞ、人民の敵に對して無慈悲な革命的合法性の最も峻嚴且つ徹底的な適用の一つたるにすぎない。

一九三二年十二月ソヴェト聯邦中央執行委員會および人民委員會はソヴェト聯邦を通じて統一的旅券制度の確立と旅券の義務的査證に關する法律を發布した。プロレタリア獨裁の敵はこの法律を舊時への復歸として説明しようとした。しかしこれらの敵は、この法律が、社會主義的所有權の保護に關する法律と同様に、何よりも先づ人民の敵に對して、寄生生活者、寄食者、階級敵に對して向けられてゐるからこそ、旅券化に關する法律を敵意を以て迎へたのである。この

法律は都市、労働者部落および新建設地の住民の優遇の任務を提起してゐるが、これは住宅面積の正しい分配、供給の組織等々にとつて巨大な意義を持つてゐる。發表された法律にはかう述べられてゐる、『……これらの住民地域から、生産および公務機關または學校における活動と關係なき人、並びに社會的に有益な労働に従事せざる人（病人および年金受領者を除く）を排除すること、そしてまたこれらの住民地域から隠れたクラーク、犯罪者その他の反社會的要素を清めるために』云々。

『彼等——「定住者」および新來の寄食者——の中から、諸企業で騙り取られた食糧券で投機をする「飛び歩き者」のかなりの層が形成される、——と一九三二年十二月二十八日の「ブラウダ」は書いた。——彼等の中から、商業を妨害し、コルホーズ生産の生産物の價格を法外に上げる投機業者、轉賣者の徒黨が形成される。彼等の中から、店舗の前で行列を組織し、工業品を取引する廣汎な消費品の買占業者のグループが形成される。彼等の中から、都市において盜賊的要素と贓品買占業者とが著しい程度に形成される……』『我々の都市、新建設地、労働者部落からこれらの寄生生活的要素を清掃し、排除することは、最も重要な任務である』。

旅券化が階級敵の容易に潛りうる形式主義に轉化しないために、社會主義的社會化所有權の保

護に關する法律を廻つてと同様に、大なる政治的活動を展開することが必要であつた。大衆の中でこの政治的活動を行ふことによつて、黨は労働者階級の革命的警戒を動員し、寄生生活的要素に對する鬭争に労働者および農民大衆を吸引した。

### 労働規律の向上のために。明かに活動的な、廉價な

#### 國家機構のために

この時期における成功的な社會主義的攻撃の他の最も重要な條件は、工業および農業における意識的な労働規律の向上であつた。非プロレタリア的要素が工場へ侵入したために、労働規律が到るところで掘り崩され、缺勤が通常の現象となつた。だが社會主義は資本主義社會におけるよりも高度の労働生産性と一層高度の意識的労働規律なくしては考へられない。缺勤に對する鬭争、労働規律の向上のための鬭争のために、この時期に法律が作られたが、それは、相當の理由なくして缺勤する者を企業から解雇すると同時に、企業から供給と住居とを受ける權利を彼から剝奪する義務を企業管理部に負はせてゐる。

この方策は生産における無政府主義的、小ブルジョア的、強慾的、我利々々亡者的要素に對して向けられた、それは同時に生産に對してプロレタリア的態度を取る者、生産を保護し、労働の質と生産性を向上せしめる者に對する最大の注意と、彼等の激勵および物質的な點におけるヨリ善き保證と結びつけられてゐた。

この時期に黨によつて實行された最良の方策は、國家機構の縮小、國家機構および經濟機構の簡單化であつた。この縮小は機構を簡單化し、それを一層活潑、柔軟ならしめ、不必要な環を排除し、諸機關の並行的活動を絶滅し、委任された仕事に對する指導者およびすべての活動家の責任を強化し、社會主義建設のためにヨリ多くの資金を國のために貯蓄した。それと同時にこの方策は機構を檢査し、それを今一度清掃し、明かに不適當な、異分子的な労働者をそれから遠ざけることを助けた。工場労働者がこの方策に引き入れられた。

新五ヶ年計畫は多くの領域において活動の改善を要求した。そして黨は、脆弱、無性格、無規律性を少しでも大目に見ることが社會主義の決定的勝利の道を測り難くヨリ困難ならしめることを知るが故に、この改善を鐵腕を以て實行した。それは數百萬の全國民大衆の『良心、誠實、英雄主義の行爲』のうちに労働の變革を達成した。

## 中央委員會および中央統制委員會一月總會。その歴史的意義

一九三三年一月中央委員會および中央統制委員會の聯合總會が召集されて、全國の——否、一層正しくは、全世界のどさへもいふべきであらう、——それに對する緊張された注意の下に經過した。この總會は我黨史の中に、たゞ第一次五ヶ年計畫を總決算した總會としてのみならず、新五ヶ年計畫の基本的輪廓を樹てた總會として入らなければならぬ。それは新五ヶ年計畫の第一年（一九三三年）の國民經濟計畫を確認した。二つの五ヶ年計畫の境に立つて、資本主義體制の益々深刻化する崩壞の情勢の下に、同志スターリンは自己の歴史的演説において偉大な第一次五ヶ年計畫の實現の結果を總括した。中央委員會および中央統制委員會總會には初めて來賓と共に約一千二百人が參加した。總會の決議は大衆の英雄的熱心に新しい刺戟を與へ、國の經濟の今後の發展の明瞭な方針を與へ、多くの極めて重要な組織的任務を提起した。

第一次五ヶ年計畫のための闘争史からの最も重要な一般的結論はどうかであるか？

ブルジョア的および社會民主主義的政治家は『五ヶ年計畫は空想であり、害毒であり、實現されない夢である』と主張した。然るに『五ヶ年計畫の總結果は、五ヶ年計畫がすでに實現されたことを示した』。これらの總結果は、『労働者階級が、舊きものを破壊しうると同様によく新しきものを建設しうること』を示した。社會民主主義者の主張に反して、『五ヶ年計畫の總結果は、一國において社會主義社會を建設することが完全に可能なことを示した、何故ならかゝる社會の經濟的土臺はすでにソヴェト聯邦において建設されてゐるからである』。『五ヶ年計畫の總結果は、資本主義經濟體制が破産してをり且つ脆弱であること、それがすでに自己の世紀を經過してその地位を他の、ヨリ高度の、ソヴェト社會主義經濟體制に譲らなければならないこと、恐慌を恐れず且つ資本主義にとつて解決されえない困難を克服しうる唯一の經濟體制は、ソヴェト經濟體制であることを示した。』

『最後に、五ヶ年計畫の總結果は、もし黨が仕事を何處へ導くべきかを知り且つ困難を恐れな  
いならば、それは打ち克ち難いことを示した\*』。

\* スターリン、第一次五ヶ年計畫の總結果。

第一次五ヶ年計畫の實現の數年間は、この素晴らしい任務の周圍に大衆を動員した數年間であつた。

ソヴェト聯邦における社會主義建設五ヶ年計畫は全世界におけるプロレタリア革命のための宣傳の強力な手段となつた。資本主義の未曾有の危機は資本主義體制のすべての矛盾を暴露し、全世界の勤勞者に、たゞプロレタリアートの獨裁のみが、たゞ社會主義制度のみが、眞實の解放、失業およびあらゆる形の階級的搾取の廢絶を齎すことを示した。一九三三年中央委員會一月總會におけるこの五ヶ年計畫の總決算は、だから崩壊する資本主義體制の面前における成長する社會主義體制の力の表明であつた。

第十七回黨會議と中央委員會および中央統制委員會一月總會とによつて樹てられた新五ヶ年計畫の差異はどの點にあるか？

『第一次五ヶ年計畫は、全國民經濟の改造のための工業の新しい技術的基礎を代表するところの新工場建設の五ヶ年計畫、農業における新企業——社會主義の原理の上における全農業の組織のための槓杆を代表するコルホーズおよびソフホーズ——の建設の五ヶ年計畫であつた。このから新建設の方への傾斜、感激、第一次五ヶ年計畫時代の最初の基本的特徴の如き、新建設の靈感が生ずる\*。』『第一次五ヶ年計畫と異つて、第二次五ヶ年計畫は主に工業における新企業の獲得の五ヶ年計畫、農業における新企業——コルホーズおよびソフホーズ——の組織的鞏固化の

五ヶ年計畫である。そしてこのことは勿論新建設のヨリ以上の發展を排除するものではなくて、前提するものである\*\*。

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、七六九頁。

\*\* 同上、七七〇頁。

この差異は『……第二次五ヶ年計畫時代における——少くとも第二次五ヶ年計畫の初めの二、三年間にとつて——工業生産高の増大のテンポの低下\*の必然性に導く。』

\* 全ソ聯邦共產黨決議集、第二部、七七〇頁。力點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

新建設の見透しを展開した同志モロトフ、クイブリシエフおよびオルジニキーゼの報告によつて、一月總會は第二次五ヶ年計畫の第一年（一九三三年）の國民經濟計畫をまた採用したが、それは一九三三年における工業生産高の増加を一九三二年に比して一六・五%と規定した。そしてこれは價格的表現において絶對的數字において前年の數字を凌駕した。

機械トラクター配給所およびソフホーズの政治部の組織同志スターリンの演説『農村における活動について』

中央委員會一月總會は機械トラクター配給所およびソフホーズの政治部の組織の問題に關する同志カガノヱ、チの報告を聴取した。この組織を鞏固にすることは黨とその中央委員會とが不斷に心配したところであつた。しかし新五ヶ年計畫に入るにあつては、たゞ農業の社會主義的改造に關する巨大な活動を總決算するのみならず、黨全體の注意をば、コルホーズおよびソフホーズを新しい、一層高い段階に質的に高めることに集中させなければならなかつた。同志カガノヱは自己の報告において、コルホーズ、ソフホーズおよび機械トラクター配給所の状態の明瞭な繪畫を展開し、我々の活動のすべての缺陷を批判的に指示し、これらの缺陷の原因および源泉を暴露した。同志スターリンは農村における活動に關する自己の綱領的演説において、農村における活動の點において黨組織によつて如何なる誤謬が許されたか、この活動の缺陷は如何なるものであるか、そしてその結果一九三二年における穀物買上げ計畫の遂行のヨリ有利な機會の下にこの買上げが一九三一年よりも拙く行はれたことを指示した。同志スターリンは五つの最も重要な誤謬を指摘した――

同志スターリンは次のことを第一の原因と考へてゐる、『……地方における我々の同志、我々の農村活動家はコルホーズ商業の布告によつて作り出された農村における新しい情勢を計算に入ることができなかつた……情勢を理解しないものだから、彼等は穀物の引渡しにおける農民の差し控へが穀物買上げを停滞させることを恐れないで、農民がコルホーズ商業の線に沿うて後に市場へ出すために穀物を保留することに氣がつかないで、多分、全く急にすべての自己の穀物を穀物倉庫に引渡すことを恐れ始めた\*』と。

\* スターリン、農村における活動について、一九三三年全ソ聯邦共產黨中央委員會および中央統制委員會一月聯合總會における演説。

農村における活動の條件の變化の無理解が、農村における我々の活動の缺陷の第二の原因である、とスターリンは考へてゐる。集團化への移行はたゞ農業に關する我々の配慮を弱めないのみならず、『農業の昂揚における共產主義者の指導的役割を増大する』。しかしコルホーズ經濟は直接農村における十分な具體的指導なくして發展した。『實際において我々は幾多の地區および州組織がコルホーズの生活や、その質問から分離してゐることを見る。人々は事務室に坐つて自己満足的にペンをキー／＼いはせてゐて、コルホーズの發展が官僚的な事務室の側を通り過ぎてゐることに氣がつかない。個々の場合にはコルホーズからの分離は、若干の地方組織員がコルホーズにおける事件を自ら地方においてまたは當該地方組織からではなくて、モスクワの中央委員會

委員から知つたといふ程度にまで達してゐる。……個人經營からコルホーズへの移行は農村における共産主義者の指導の強化に導かなければならぬ。だが實際において多くの場合この移行は、共産主義者が、集團化の高い比率を切札に出しつゝ、小成に安んじ、事態を自動に委せ、事態を自然の成行に委せた、といふことに導いた。コルホーズ經濟の計画的指導の問題は、コルホーズにおける共産主義者の指導の強化に導かなければならなかつた。だが實際においては多くの場合に、共産主義者が絶無で、コルホーズの中では以前の白色士官、以前のペトリューラ軍および一般に労働者および農民の敵が支配した、といふ事態が発生した\*。

\* スターリン、農村における活動について。

新しき經濟形態としてのコルホーズの過大評價、その形態の理想化、コルホーズの『偶像化』を、同志スターリンは農村における活動の缺陷の第三の原因と考へてゐる。『主要な缺陷はそこでは、多くの我々の同志が、農業組織の新形態としてのコルホーズ自體の力と可能性を過大評價したところにある。彼等は、コルホーズがそれ自體において、それが社會主義的經濟形態であるにも拘らず、——決してまだあらゆる種類の危険性およびコルホーズの指導へのあらゆる種類の反革命的要素の侵入から保證されてゐず、若干の條件の下においてはコルホーズが反ソヴェエト的

要素によつて自己の目的のために利用されうることから保證されてゐない、といふことを理解しなかつた\*。

\* スターリン、農村における活動について。

だから同志スターリンは、コルホーズが、もし共産主義者によつて指導されないならば、一時反革命的要素の活動のための掩護に轉化されさへもしうることを警告した。『従つて、問題は、社會主義的組織形態としてのコルホーズ自體のみにあるのではなくて、何より先づ如何なる内容がこの形態の中に流しこまれるかにある、——問題は、何よりも先づ、何人がコルホーズの先頭に立ち、何人がこれを指導するかにある\*』。

\* スターリン、農村における活動について。

『農村における我々の活動の缺陷の第四の原因は、——同志スターリンは述べてゐる、——地方に於ける幾多の我々の同志がクラスクに對する鬭争の戦線を再建しえなかつたことに、階級敵の相貌が近來變化し、農村における階級敵の戦術が變化したこと、そして勝利を得るためには、これに照應して自己の戦術を變更しなければならぬことを理解しなかつたことにある。敵は情勢の變化を理解し、農村における新しい制度の力と威力とを理解した。そしてそれを理解して、



自己の戦術を建て直し、変更した、——コルホーズに對する直接の攻撃から隠密の攻撃に移行した。……クラークは撃破されたが、彼等は決してまだ叩きのめされてゐない。そのみならず、——もし共産主義者がボカンと口を明いて平和な気分である、そしてクラークがいれば自己の發展によつて自ら墓場に行くだらう、と想像するならば、彼等はまた急速には叩きのめされないであらう……今日我ソヴィエト國に存在するやうな尖鋭な階級闘争の下においては、「中立的」コルホーズにとつてはすでに餘地がない、かゝる情勢の下においてはコルホーズは或ひは、ボルシエヴィキ的であるか、或ひは反ソヴィエト的でありうる。そしてもし我々があれやこれやのコルホーズにおいて指導しないならば、これは、反ソヴィエト的要素がこれを指導することを意味する\*。

\* スターリン、農村における活動について。

同志スターリンは第五の原因を指摘したが、それは、『……コルホーズ建設の仕事における共産主義者の役割および責任の過小評價に、穀物買上げの仕事における共産主義者の役割および責任の過小評價にある……責任と罪過とが問題である場合には、責任は全然共産主義者に歸し、そしてこの場合すべてのことにおいて罪があるのは、——たゞ我々、共産主義者である』。

『この缺陷を矯正することができるであらうか？ 然り、無條件にできる。我々はそれを最近

時に矯正するであらうか？ 然り、無條件に矯正するであらう。この點には何等の疑ひもありえない\*。

\* スターリン、農村における活動について。

機械トラクター配給所とソフホーズにおける政治部の組織は、『その助けによつてこれらの缺陷が最も短期間に排除される決定的手段の一つ』でなければならなかつた。

同志スターリンのこの注目すべき演説、同志カガノヴィチの批判的に集中され、具體的内容で飽和された報告、同志ボスツイシエフの演説その他この總會における多くの演説は、ボルシエヴィキ的自己批判の模範であつて、黨組織の活動の誤謬と缺陷とに注意を集中し且つこれらの誤謬と缺陷との矯正の道を指示した。

機械トラクター配給所は國の集團化において巨大な役割を演じた。それらは農業の社會主義的改造の最大の力となつた。しかしそれらもまた汚されてゐた。それらは是非とも鞏固にされなければならなかつた。だからそれに鞏固な政治的指導を與へることが決議された。

『機械トラクター配給所とソフホーズの政治的鞏固化、——我々は一月總會の決議において讀む、農村における機械トラクター配給所およびソフホーズの政治的役割と影響との向上および

コルホーズとソフホーズにおける我々の細胞の政治的および経済的活動の改善の目的で、全ソ聯邦共産黨中央委員會はすべての機械トラクター配給所およびソフホーズに政治部を組織し、その先頭に、同時に機械トラクター配給所およびソフホーズの政治部長たる、機械トラクター配給所およびソフホーズの監督代理を置くことに決定した\*。

\* 全ソ聯邦共産黨決議集、第二部、七七五頁。

多年試験された黨員の中から中央執行委員會によつて選抜されたこれらの政治部は、極めて短期間に自己の使命を果した。即ちそれは農村におけるボルシエヴィキ組織を鞏固にし、それらは農村における黨および共産青年同盟の影響を鞏固にする仕事や、社會主義經濟を鞏固にし、またコルホーズおよびソフホーズからの敵對的要素を清掃する仕事における黨の眞實の楨杆となつた。

### 黨の肅清に關する決議

第二次五ヶ年計畫によつて、社會主義建設によつて黨の前に提起された任務を遂行するため、黨は自己の隊伍を検査しなければならなかつた。數量的に黨は一九三三年には巨人的に成長した。即ちそれは自己の隊伍に約三百五十萬人の黨員と候補者とを算した。勿論その基本的骨格、

そのプロレタリア的構成はこの數年間著しく成長した。それは黨の全構成の約三分の二を成した。しかしそれと共に、必ずしもすべての組織が新黨員の採用の問題を明かに提起しなかつたので、黨にはかなり多數の望ましからぬ、不確實な要素が潛入し、それらは階級闘争の新しい段階においてすべての自己の弱點を暴露した。

穀物のための闘争、新しい労働規律のための闘争、農業の集團化のための闘争は——黨的意識、規律、堅實、忍耐、黨への獻身の高度の模範と並んで——個々の細胞や個々の黨員の腐敗、變質、異分子との結合、日和見主義の模範を示した。だからすでに中央委員會は總會前に、北コーカサス、ウクライナおよび若干の他の地方における最も評判の悪い農村細胞を検査することを決議した。

一九三二年十二月十日全ソ聯邦共産黨中央委員會は次の如く決定した、『一九三三年中に黨員および黨員候補者の肅清を實行せよ、この決定の發表の日から、都市においても農村においてもソヴェト聯邦全體を通じて候補者の採用と黨員への進級とを停止せよ』と。

一九三三年一月における中央委員會および中央統制委員會聯合總會はこの決定を是認し、そして中央委員會政治局および中央統制委員會幹部會に、『黨の肅清の仕事は、黨内に鐵のプロレタ

リア的規律と黨の隊伍からのすべての望ましからぬ取り入り分子の掃蕩とを確保するやうに、組織すべきこと』を委任した。それと同時に中央委員會は、穀物買上げの仕事において特に重大な失敗を暴露したところにおいて黨組織を鞏固にする多くの方策を採用した。かくてウクライナ、特にハリコフ州組織における活動を鞏固にするために、中央委員會書記ボスツィシエフが派遣された。

肅清中に黨員の採用を停止することに關する中央委員會および中央統制委員會の決議は、我々が知つてゐるやうに、すでに一再ならず我黨がそれに訴へた方策である。疑ひもなく、黨の閉鎖の原因は、黨員の採用にあつて個々の組織の用心が不十分で、あちこちで黨に採用される者の數を追求したことであつた。黨組織は必ずしも到るところで黨への加入者の注意深い選擇を行はず、そして反對に、大量的採用に誘惑されて、新採用者の適當な政治教育について配慮しなかつた。十月革命以後黨の定期的肅清と統制委員會の系統的活動とは、黨の隊伍から約八十萬人の黨員と候補者とを投げ出し、約二十萬人の黨員と候補者とがこの期間に機械的に脱退した。除名者の僅かに小部分、約一〇%が再び黨の隊伍に復歸した。

この期間に巨人的に成長し、新しい巨大な經驗を我がものにし、自己の社會的構成を著しく改善した黨は、それと共に、自己の隊伍の更に大なる統一、更に大なる一致、鍛鍊、規律、忍耐、政治的意識の問題、すべての成員のイデオロギイ的水準や責任感の向上の問題を提起しなければならなかつた。黨は自己の隊伍からすべての望ましからぬ者、不確實な者、取り入り者、變質者、『ポケットに黨員證を有する詐欺師』を清掃するために、自己の隊伍を見直さなければならなかつた。これによつて黨は數百萬の大衆の信頼を更に多く鞏固にした。

### 日和見主義は反革命的組織の旗となつた

第十七回黨會議の決議は、『労働者階級が社會主義の新しき成功をたゞ資本主義の遺物に對する闘争において、腐敗しつゝある資本主義的要素の抵抗に無慈悲な反撃を與へることによつて、労働者の中におけるブルジョア的および小ブルジョア的偏見を克服することによつて、彼等の社會主義的再教育に關する辛抱強い活動を行ふことによつてのみ、確保する』ことを警告した。第十七回黨會議は、『今後においてもまた個々の瞬間および特に個々の地方および社會主義建設の個々の部分において階級闘争の尖鋭化がまた不可避的であること』を豫見した。それは『まだ長い期間労働者の中や黨の中にさへもプロレタリアートに無縁の階級的影響が侵入することの不可

避性』を豫見した。

黨は階級闘争のこの時期に、悪意を有するクラーク、社會主義的攻撃に兇暴に抵抗する狂亂した、愚鈍な小ブルジョアの氣分を現はしたグループを黨の隊伍から根こそぎにしなければならなかつた。リューチン、ガルキン、イヴァノフ、カユロフその他のグループがかゝるグループであつて、それは黨から除名されたトロツキー派その他の反黨的要素と、これまで種々の反黨のおよび反ソヴィエト的要素が説教したやうな最も反動的な見解の擁護を基礎にして結合した。一九三二年秋暴露された、多年の間黨の方針に對して闘争した人々によつて主として構成されたこの反革命的グループは、自己の文書において、資本主義の復興、クラークの復興の實際の計畫を説教し、コルホーズとソフホーズとの解散の必要を説教し、労働者階級の英雄的労働と熱心によつて創造された社會主義的企業を利權として資本家に引渡すことを意味するやうな政策を要求した。

ウグラノフ、カメネフ、ジノヴィエフの如き人々は、或ひは直接の、或ひは間接の、この反革命的グループの補助者であつた。彼等の以前の最大の誤謬と黨に對する犯罪にも拘らず、黨は彼等に信頼を示し、たゞジノヴィエフとカメネフとを自己の隊伍に復歸せしめたのみならず、彼等に責任ある仕事を委任した。反革命家、黨を悪意を以て誹謗した者に對する無慈悲な反撃の代りに、

黨の面前における——即時且つ無留保の——彼等の暴露の代りに、彼等はこの反革命的グループを隠蔽した、そして黨は彼等を二心ある者として取扱つた。即ち黨は反革命的リューチン組織員——ガルキン、イヴァノフ、カユロフ、スレブコフ、マレツキーその他——と共に、またジノヴィエフ、カメネフ、ステン、ペトロフスキー、ウグラノフおよびラヴィチルカフスキーをも黨から除名した。

中央委員會および中央統制委員會一月總會は、エイスマント、トルマチエフ、アー・ペー・スミルノフその他の反黨的集團に關する同志ルズタツクの報告によつて、これらの黨員が言葉の上では黨の方針に同意すると聲明しながら、實際においては黨の政策に對して反黨的活動を行つたことに關聯して、エイスマントおよびトルマチエフの黨から除名および同志アー・ペー・スミルノフの中央委員會からの追放に關する決定を採用した。彼等はこの目的を以て地下的分派グループを作り、そしてエイスマントとトルマチエフとは腐敗的要素、労働者階級から離れた腐敗分子の中で自己の支持者を募集した。黨が五ヶ年計畫の最大の勝利の結果を總括した瞬間に、このグループは、リューチン・スレブコフ・グループと同様に、事の本質において國の工業化の拒否と資本主義の復興、特にクラーク層の復興に關する自己の任務を提起した。

黨中央委員會の中からアー・ペー・スミルノフを除名するにあつて、總會は、スミルノフが今後自己の活動によつて黨の信頼に副はない場合には、彼は黨から除名されるだらう、と警告した。

その外に一月總會は同じくまた中央委員會委員候補者同志シュミットの行狀を審判した。彼等は過去において彼等によつて犯された重大な政治的誤謬にも拘らず、『反黨的要素に達する、黨の一般方針と黨中央委員會の實際政策とのための眞實且つ積極的な闘争の代りに、——反黨的要素に對する闘争から遠ざかり且つスミルノフやエイスマントとの連絡を支持さへし、かくして、本質において、彼等の反黨的活動を援助し、そしてすべての自己の行狀によつてあらゆる反黨的要素に右翼反對派の舊指導者の支持を考慮する動機を與へた。』『中央委員會および中央統制委員會聯合總會は、同志ルィコフ、トムスキーおよびシュミットから反對的要素に對する闘争の問題における自己の行狀の根本的變更を要求し、そして彼等の誤つた行狀が繼續される場合には黨の處罰の厳格な處分が彼等に適用されるであらう、といふことを彼等に警告するものである。』

既に一月總會の後、嘗て同志ブハーリン、ルィコフ、トムスキーの周圍にグループを作つてゐた右翼日和見主義者の殘黨（スレブコフ、マレツキー、ベトロフスキー、アストロフ、アイヘンヴァ

リドその他）は、一九三二年反革命的グループを組織したが、それは黨の指導に對する闘争のために黨員を召集する任務を自ら提起し、彼等は黨の一般方針の擁護者である、と公然聲明した。この二心を有する組織をもまた黨は自己の隊伍から投げ出した。黨はまた舊トロツキー派出身の二心を有する者にも無慈悲に打撃を與へた。彼等は反革命的トロツキー派理論の放棄を聲明しながら、レーニンの黨との一致を聲明しながら、闘争の繼續のために黨の隊伍に復歸し、トロツキー派との連絡を維持し、自己の反革命的活動を繼續した。

かくて新しい段階においてもまた黨は、社會主義の道における新しい勝利に向つて前進するために、自己の隊伍を肅清しなければならなかつた。

### コルホーズ農場員 突撃隊員 第一回全ソ聯邦大會

新五ヶ年計畫の初めにおける社會主義のための闘争のこの新しい段階における全黨的活動の再建の完成は、一九三三年二月に開かれたコルホーズ農場員 突撃隊員 第一回全ソ聯邦大會であつた。全國から田園の突撃隊員が集まり、彼等はこの大會に社會主義建設の最大の經驗、農業の社會主義的改造の先驅者の熱心を齎した。

黨は、一九三三年春が農業の發展、その新しい一層高い段階への上昇の急轉の瞬間となるために必要なすべてのことをした。同志カガノヴィチ、ヤコヴレフおよびコサレフの報告は、コルホーズ農場員およびソフホーズの突撃隊員の前に、農業の領域において國が當面してゐる諸任務を具體的形態で展開した。これらの報告、大會參加者自身の演説、大會における同志ヴォロシロフ、ブデオンヌイ、カリニンおよび特に同志スターリンの演説は、農村における社會主義建設の最大の困難、誤謬および缺陷の克服のために、大衆の創造的熱心の新しい波の創造にとつて疑ひもなく巨大な意義を持つてゐた。

同志スターリンは、深い内容と結合された質朴の模範であり、大衆の言葉でこの大衆と語る能力の模範である自己の演説において、——コルホーズ農場員の前に多くの問題を提起した。

『第一の問題は、コルホーズ經濟が入つた道が正しいかどうか、コルホーズの道が正しいかどうか、といふことである。』

この問題に對して同志スターリンは遺漏なき答を與へた、『たゞ二つの道があるのみである、即ち或ひは山へ、新しいコルホーズ制度への前進か、或ひは山の下へ、舊いクラーク的、資本主義的の制度への退却かである。第三の道は存在しない。』『勤勞農民層は正しく行動して、資本主義

的を拒否して、コルホーズ建設の道に立つた。』

『第二の問題は、我々が新しい道において、我々のコルホーズの道において何を獲得したか、そして我々が最近二、三年間に何を獲得しようかと考へてゐるか、といふことである。』

同志スターリンは、たゞ我々が最良の土地をコルホーズに、すべての土地を農民に引渡したことにあるのみならず、我々が『少くとも二千萬の農民人口、少くとも二千萬の貧農を貧困と零落から救ひ、クラーク的カパーラから救ひ、そしてコルホーズのおかげで、生活の保證された人々に轉化した』ことにあるところの、巨大な達成を指摘した。しかしこれはたゞ第一歩たるにすぎなかつた。コルホーズを鞏固にするためには、第二歩を踏み出さなければならぬ。『この第二歩はどの點にあるか？』——『それは、コルホーズ農場員を、——以前の貧農をも、以前の中農をも——更に高く引き上げることにある。それは、すべてのコルホーズ農場員を富裕ならしめることにある。然り、同志諸君、富裕ならしめることにある。』

この場合、これと關聯した他の任務をも忘るべきではない、即ちコルホーズ農場員は富裕ならしめられなければならないが、コルホーズはポルシエヴィキ的ならしめられなければならないことである。

同志スターリンは、農村における黨員と非黨員との相互關係について述べつゝ、農村における若干の黨員が非黨員を押し退けてゐることから生ずる、黨にとつての巨大な害毒を指摘した。「我々ボルシェヴィキは、——同志スターリンは述べた、——もし數百萬の非黨員の勞働者および農民を黨の側へ獲得することができなかつたら、今日持つてゐる成功を持つてゐなかつたであらう。だが何がこれがために必要か？　これがためには、黨員が非黨員を隔離しないこと、黨員が自己の黨の殻の中に閉ぢこもらないこと、彼等が自己の黨派性を自慢しないで、非黨員の聲に耳を傾けること、彼等が非黨員を教へるのみならず、非黨員からもまた學ぶことが必要である」と。

同志スターリンはこの第一回コルホーズ大會においてコルホーズにおける婦人の意義について進出して、非常に大なる仕事をした。同志スターリンは、『コルホーズにおける婦人は大なる力である。この力を隱密に保持することは、犯罪を許すことを意味する。我々の義務は、コルホーズにおける婦人を拔擢し且つこの力を活動せしめることにある』ことを指摘した。同志スターリンは、『コルホーズなくしては權利の不平等があり、コルホーズにおいては平等がある。このことをコルホーズ農場員の同志に理解せしめ、コルホーズ制度を極めて大切にせしめよ』と力説した。同志スターリンはコルホーズ農場員の前にこの任務をすべての具體性において提起した、「我々

は、コルホーズ農場員の大多數がすでに屋敷の中に一頭宛の牝牛を有することを達成した。更に二年間経てば、——諸君は自己の牝牛を持たない一人のコルホーズ農場員をも見出さないであらう。我々ボルシェヴィキは、すべてのコルホーズ農場員が我國で一頭宛の牝牛を持つやうに努力しよう」と。

同志スターリンのこの約束を黨はすでに一九三三年著しい程度に遂行した。この夏は社會主義的農業の發展と質的成長とにおける急轉の夏であつた。急轉は黨の巨大な組織的活動の直接的影響と、第一回コルホーズ大會の結果たるコルホーズ大衆の意識における躍進の影響の下に、進行した。この大會の後、州、地方および共和國別の大會が続いた。それらは一層高度の收穫のため、一層立派な土地耕作、時宜を得た播種と刈入れ、買上げ穀物の國家への一層早い引渡しのため、闘争に大衆を動員した。熱心の大なる昂揚および一層立派な活動の結果、收穫は期限よりも早く集められ且つ分配され、而も一層立派な品質であつた。冬蒔および春蒔穀物のための犁起しが増大され、コルホーズへの農民の新しい流入が見られた。

一九三三年夏黨中央委員會および人民委員會は牝牛を有しないコルホーズ農場員に數百萬の牝牛を供給することに關する決定を發布した。これは黨の意思の實現の道における現實的實際的

な歩みであつた。コルホーズ農場員を富裕ならしめ、コルホーズをボルシエヴィキ的たらしめよ、といふ黨のスローガンは、決議の採用後の第一年に著しい程度に生活に移された。

同志スターリンはコルホーズ大會における自己の演説の中で、我々の交替者たる農村における共産青年同盟の役割を特に強調した。

『……青年は我々——老人に交替しなければならぬ。彼等は我々の旗を勝利の最後まで押し進めなければならぬ』。しかし彼等がこれをなすうるためには、『レーニン主義を學び且つ今一度學ぶこと』が必要だ。『同志諸君、男女の共産青年同盟員諸君、——同志スターリンは、この注目すべき大會の若い半分に向つて述べた、——ボルシエヴィズムを學び、そして動搖者を先導せよ。ヨリ少くしやべり、ヨリ多く働け、——然らば仕事は我國において確實に成功するであらう』。

まだコルホーズに入つてゐない個人經營者に對する全く正しくない態度、そして所々では正に誤つた態度を同志スターリンが指摘したことは、集團化のその後の運命にとつて、その完成にとつて疑ひもなく巨大な意義を持つてゐた。『私は人々がよく選んでコルホーズに採用することに反對ではない。しかし私は、人々が區別なしにすべての個人經營者にコルホーズへの道を閉鎖することには反對である。これは我々の、ボルシエヴィキの政策ではない。コルホーズ農場員は、彼等

自身が少し前まで個人經營者であつたことを忘れてはならぬ』。

大會は何等の特殊な決議をも採用しなかつた。ソヴェト聯邦の全コルホーズ農民へのメッセージが採用された。この注目すべきメッセージ——コルホーズをボルシエヴィキ的たらしめよ、確乎たる労働規律のために闘争せよ、全聯邦的社會主義的競争を展開せよ、種子を完全に集めよ、春までにトラクターを準備せよ、馬に適當な世話を保證せよ、突撃隊の中に鐵の規律を作れ、國家に對するすべての義務を遂行せよ、レーニンの黨の周圍に、ソヴェト權力の周圍に結成せよ、といふ呼びかけを有するメッセージ——このメッセージは、疑ひもなくコルホーズ運動の歴史において巨大な意義を有するであらう。

農村へ婦人組織を派遣することに關する中央委員會の決議もまた大なる意義を持つてゐた。政治教育、文化水準の向上、先進的コルホーズ婦人大衆の農村の社會主義的改造への吸引が、この改造、生活の新形態と社會主義文化との農村生活への定着の強力な推進者であつた。

### 運輸における政治部

一九三三年夏黨は運輸における政治部の組織に關する決議を行つたが、それは、機械トラクタ



―配給所およびソフホーズの政治部と並んで、黨組織の鞏固化にとつて巨大な意義を持つてゐる。農村および運輸におけるこれらの黨の中心の設立は、疑ひもなく組織の新しい基礎の實施である。即ち地域的表徴による組織が、生産的表徴による組織によつて補充されたのである。この組織の必要はこの當時『鐵道運輸において活動の中絶の若干の徴候が現はれた』ことによつて喚び起された。黨は、『都市と農村との間、工業と農業との間、ソヴェト聯邦の諸地方の間の連絡にとつて、最後に――背後と戦線との間の連絡にとつて物質的支柱』たる『國の經濟生活の主要な神経』における中絶を許すことができなかった。運輸における政治部の任務はどの點にあるか？

『政治部の任務は、説得を基礎にして、組織的および觀念的の政治的影響の方策によつて、鐵道運輸における「意識的な鐵の規律」(レニーン)、社會主義的競争と突撃活動との新しい強力な昂揚の創造を確保すること、鐵道従業員の勞働者および使用人の中におけるすべての黨的の政治的活動を最高の水準に引き上げることにある。』

『運輸における政治部の任務は、更に、階級的に無縁且つ敵對的な要素(怠業者、盜奪者、強慾者、無頼漢等々)に對する闘争を展開すること、彼等を摘發し、暴露し、鐵道運輸から遠ざけ

ること、掠奪に對して必要な方策を實行すること、國家的社會主義的所有權に對する鞏固な保護および保護的態度を確保することにある。』

『政治部の任務は、更に、共產主義者および非黨員活動分子による鐵道運輸の技術の眞實の把握を組織すること、彼等が自己の伎倆を高めることを援助すること、およびかくして彼等に委任された仕事の實際の主人となる可能性を彼等に與へることにある。』

『黨員證に隠蔽されつゝ、爆破作業を行ふところの日和見主義的要素および社會的な異分子を暴露し且つ黨および共產青年同盟の組織から無慈悲に追放することによつて、政治部は黨員および非黨員活動分子の觀念的および政治的水準、運輸における彼等の指導的役割を高め、黨組織の周圍に全く有望な非黨員活動分子を作り出し且つ結成しなければならぬ。』

『鐵道運輸のすべての領域に黨の監視と統制を確保することによつて、政治部は鐵道運輸の指導における自己批判の恐怖や事務室的の官僚的方法に對する無慈悲な闘争を行ひ、そのすべての環における明白な事務的活動、無條件的な正確さと責任、暴露された誤謬と缺陷の無條件的且つ即時の矯正を獲得しなければならぬ。』

『……政治部は黨の幹部を運輸に配置し、細胞書記を確認し、共產主義者の更迭を行ふ。』

これらやその他の組織の方策を實行することによつて、黨中央委員會はソヴェト聯邦の國民經濟の最も重要な部門の活動を新しい高さに質的に引き上げ、黨の綱領の遂行のための戦ひへの最も廣汎な勤勞者大衆の一層急速な且つ一層成功的な吸引のための條件を準備した。

かやうに黨は、新五ヶ年計畫のための戦ひへ進みつゝ、自己の隊伍を鞏固にし、かやうに黨は社會主義のための闘争に大衆を動員した。

## 結 語

著者はこの著作を一九三三年九月、黨が自己の巨人的な活動を、プロレタリア獨裁の十六年間に於ける國際的意義を有する最大の成功を總決算した時に、終へる。

この年黨はカール・マルクス——我黨が最大の徹底さを以てその遺言を實現した共產主義の創始者および教師——の五十年忌を總決算した。この半世紀の歴史は、唯一の正しい道が科學的社會主義の道であることを示した。ボルシエヴィキ黨はマルクス——エンゲルス——レーニン——スターリンの革命的マルクス主義の忠實な苦行僧であり、その勝利のための熱烈な搖ぎなき闘士であつた。

一九三三年黨はまた政治的ボルシエヴィキ的黨としてのその存在の三十周年を總決算した。ボルシエヴィキ黨の三十年間の名譽ある進路は全世界のプロレタリア黨にとつて闘争の模範である。あらゆる形の非合法的および合法的、革命的闘争の我々の經驗——革命的活動の最大の經驗、世界唯一の社會主義プロレタリア革命と世界最初の社會主義國家の建設、世界唯一の社會主義經濟の建設の經驗は、最大の國際的意義を持つてゐる。ボルシエヴィキズムは『萬人にとつての戦術』で

ある。

一九三三年プロレタリア革命の十六周年を祝賀しつゝ、我々はプロレタリア獨裁期における社會主義のための我々の闘争を總決算する。たゞ一つの民族も、たゞ一つの國も、たゞ一つの他の共產黨もこの經驗を持つてはゐない。この道において黨は最大の困難を克服した。最大の困難と不可避的な誤謬との克服の中に、我黨はそれがすべての他の黨にとつて模範であることを示した。

一九三三年我黨は社會主義建設第一次五ヶ年計畫の遂行を總決算した。大衆の英雄的な努力によつて、社會主義的競争によつて、レーニンの黨の保證された正しい政策によつて、この五ヶ年計畫は四ヶ年で遂行された。

革命は、歴史の疾走を速めることによつて、第二次五ヶ年計畫のための闘争の最大限の結果――無階級的社會主義社會の建設を最短期間に確保しつつある。

ボルシェヴィキ黨は自己の勝利を資本主義諸國における最大の危機の情勢の下に總決算した。全世界の勤勞者は、全世界のプロレタリアートは、一つの黨の意思によつて結合された數十民族の闘争の實例を、社會主義のための闘争の實例を眼前に持つてゐる。

我々の成功は世界プロレタリア革命の進行を巨人的に速めるであらう。我々の一步一步は、世界プロレタリア革命への一步前進である。黨はこの成功を「左翼」日和見主義者やこの段階における主要な危険性としての右翼日和見主義に對する闘争の中に、和解主義や、腐敗した自由主義に對する闘争の中に確保した、そしてそのヨリ以上の成功はこの道の上に横はつてゐる。

この黨を指導するものは、同志スターリンを先頭に頂く、戦ひの中に鍛えられた中央委員會である。

黨はまだ社會主義の最終的勝利のための極めて困難な激烈な戦ひに當面してゐる。しかし我々はこの最終的勝利にとつて必要なすべてのものを持つてゐる。

一九三三年九月

## 全ソ聯邦共産黨史および革命運動史年表

### 一八七〇年

インテリゲンチヤの中における革命的「ナロードニキ」的運動。▲ペテルブルクにおける労働者の最初の同盟罷業。▲四月二十二(十)日——シンピルスクにヴェ・イー・レーニン生る。

### 一八七二年

ナロードニキによつてロシア語に譯されたマルクスの『資本論』出版せらる。

### 一八七五年

オアッサにおける全露労働者同盟の創立。

### 一八七六年

『土地と自由』黨創立。プレハノフを先頭とするペテルブ

ルカのカザン廣場における『土地と自由黨員』の示威運動への労働者の参加。

### 一八七七年

ナロードニキ主義の政治闘争へ、テロルへの移行。

『五十人』事件はこの事件におけるピョートル・アレクセエフの演説。

### 一八七八年

ペテルブルクにおける『北部ロシア労働者同盟』の創立。

### 一八七九年

『土地と自由』黨二つの組織——『人民の意思』黨と『土地改革』黨——に分裂す。

### 一八八〇年

アレクサンドル二世暗殺の目的を以てステパン・ハルツリン

によつて組織された各宮における爆発。

一八八一年

『人民の意思』黨の執行委員會の決定によるアレクサンドル二世の暗殺。

一八八二年

ロシア版への著者の序文を附したマルクス・エンゲルス共著『共産黨宣言』のロシア譯。

一八八三年

スウイスにおいて『労働解放』團の創立(ブレハーンフ、アクセリロッド、ザスリツチ、イグナトフ、テイチ)。▲三月十四日カール・マルクス死す。

一八八四年

ハテルブルグにおけるアラゴエフの最初の社會民主主義者サークルの組織。

一八八五年

『労働解放』團ロシア社會民主黨綱領の最初の草案を發表す。▲サツヴァ・モロゾフの工場における紡績工の同盟罷業(モロゾフ罷業——指導者モセエノク)。

一八八六年

ロシアの諸都市における社會民主主義者サークルの發生。

一八八七年

アレクサンドル三世に對するアー・イー・ウリヤノフの謀殺未遂。ウリヤノフ、シエヴ・レフその他の處刑。

一八八八年

レーニンはカザンにおいてフェドセエフのマルクス主義者サークルの活動に参加し、『資本論』を研究す。

一八八九年

第二インターナショナル第一回大會におけるブレハーンフ

一八九五年

レーニンを先頭とするハテルブルグ『労働者階級解放闘争同盟』。▲ロシア社會民主労働者黨における日和見主義的流派(經濟主義)の最初の現はれに對するレーニンの闘争。——レーニンその他ハテルブルグ『闘争同盟』の指導的活動家の逮捕。

一八九六年

『闘争同盟』の指導の下にハテルブルグにおける織物工の同盟罷業。▲ロシア社會民主主義者代表ロンドンにおける第二インターナショナル大會の活動に参加す。

一八九七年

東シベリアへのレーニンの流刑。レーニンは流刑地よりロシアにおける労働者運動の中心地および國外における『労働解放』團との連絡を維持す。▲スターリンはチアリスにおけるマルクス主義者サークルを指導す。

一八九八年

ミンスクにおけるロシア社會民主労働者黨第一回大會。大

の演説、その中で彼はかう述べた、『ロシアにおける革命運動はたゞ労働者の革命運動としてのみ勝利する、こがで、さる』。▲ハテルブルグにおいてアルスネフの社會民主主義者グループの形成。

一八九一年

ハテルブルグにおける労働者の最初のメーデー。

一八九三年

レーニンはサマラにおいて最初のマルクス主義者サークルの活動に参加す。▲ハテルブルグ、ハリコフその他の諸都市における労働者の動搖。

一八九四年

レーニンの著作『人民の友』とは何ぞや、そして彼等は如何に社會民主主義者に對して闘争するか』の出版。▲レーニンはストルーヴェの著作『批判的覺書』の第二書に關聯して報告を朗讀し、その中で合法的マルクス主義に決定的に反對す。

會參加者の逮捕。▲イヴァノヴ・ヴォズネセンスク労働者の  
總同盟罷業。▲スターリンはロシア社会民主労働者黨チフリ  
ス組織に参加す。

### 一八九九年

レーニンの著書『ロシアにおける資本主義の發展』出版。  
▲レーニンは日和見主義の種々の現はれおよびマルクス主義  
の修正(ベルンシュタイン主義)に對する革命的社會民主主義  
者の闘争を指導す。▲スターリンの指導の下にチフリスにお  
ける社會民主主義運動は宣傳から大衆的煽動および労働者の  
政治的示威運動に移る。

### 一九〇〇年

『イスクラ』第一號の發行。▲チフリスにおける労働者の大  
同盟罷業と多くの大都市——ハリコフ、ワルソー、ヴィリノ  
——におけるメーデーの示威運動。

### 一九〇一—一九〇二年

ペテルブルクのオルホフスキー工場における同盟罷業の時

### 一九〇三年

パクー、チフリスおよびパツームにおける同盟罷業運動の成  
長の擴大と總同盟罷業の開始。▲第二回黨大會。ボルシエヴィ  
キとメンシエヴィキとのロシア社会民主労働者黨の分裂。獨  
立黨としてのボルシエヴィズムの成立。ヴェ・イー・レーニンの  
『イスクラ』編輯部からの脱退に關する聲明。『イスクラ』第  
五十二號はブレハノフの編輯の下に發行せらる。▲ロシア  
社会民主主義者『國外同盟』第二回大會。ヴェ・イー・レーニン  
は中央委員會委員に互選され、中央委員會國外代表者に任命  
せらる。

### 一九〇四年

日露戦争。▲レーニンは第三回黨大會の召集の必要に關す  
る決議を黨評議會議に提出す。中央委員會内の和解主義に對  
するレーニンの闘争。▲レーニンの小冊子『一步前進二歩退  
却』出版。シュネーヴにおける二十二人のボルシエヴィキの協議  
會。ボルシエヴィキ委員會局の組織。▲スターリンは流刑地か  
ら逃走のちコーカサスのボルシエヴィキ組織の先頭に立つ。

労働者は軍隊および警察に抵抗を示す。▲警察社會主義のズ  
バトフ組織の出現。▲レーニンの最も親密な参加の下に國外  
において社會民主主義雜誌『ザリャー』が發行され始める。

▲レーニンは社會民主主義者『國外同盟』の組織に参加す。  
▲スターリンはコーカサスにおけるプロンタリアートの闘争  
を指導す(チフリスにおける五月の政治的同盟罷業、ロシア社  
會民主労働者黨パツーム委員會の組織)。▲レーニンの著書『セ  
ムストヴォの追求者』に關聯してヴェ・イー・レーニンと『イス  
ラク』編輯部との意見の相違。レーニンの著書『何を爲すべき  
か?』の出版。▲ロストフにおける大政治的同盟罷業。▲『イ  
スクラ』は黨綱領草案を發表し、第二回黨大會召集の準備を行  
ふ。ブレハノフの綱領草案に對するレーニンの批判。レ  
ニンは自己の綱領草案を書き、別に農業綱領の問題を研究す。  
▲經濟主義者、社會革命黨員および自由主義者に對する『イス  
クラ』の闘争。ヴェ・イー・レーニンの参加の下に第二回黨大會  
の召集に關する組織委員會形成せらる。▲スターリンの逮捕  
とその東シベリアへの流刑。

### 一九〇五年

スターリンは第三回黨大會の召集のためにメンシエヴィキに對  
して闘争を行ふ。▲ペテルブルクにおける『警察社會主義』の  
ガボン組織の發生。

『血の日曜日』。一月九日——ロシアにおける第一革命の開  
始。▲ボルシエヴィキの機關紙『ペリョード』創刊。▲ロンドン  
における第三回黨大會。▲シュネーヴにおける第一回全露メン  
シエヴィキ會議。▲レーニンの著作『民主主義革命における社  
會民主主義の二つの戦術』出版。黨中央機關紙『プロンタリー』  
第一號發行。▲戦艦『ボテヨムキン』における暴動。▲スタ  
ーリンはコーカサス・ボルシエヴィキの合法機關紙『ボリバ・プ  
ロレタリアタ』を指導す。▲『アルイギン・テューマ』のボイコッ  
ト。十月總同盟罷業。十月十七日の宣言。ペテルブルク、イ  
ヴノヴォ・ヴォズネセンスク、モスクワその他の諸都市にお  
ける労働者代表ソヴェートの發生。▲ボルシエヴィキの指導の  
下に組織されたセヴァストポリ、クロンシュタットにおける  
武装暴動。モスクワにおける十二月暴動。ロシアの諸中心地  
における同盟罷業と武装暴動。▲第一國會の選挙。ボルシエ

ヴィキのタンメルフォルス會議、レーニンとスターリンその活動に参加す。

### 一九〇六年

四月十一、二十五日、ストックホルムにおける第四回統一黨大會。  
▲第一國會の解散。スウェーデンホルムミクロンシユタットにおける武装暴動。▲第二回全露黨會議。ボルシエヴィキの軍事組織および戦闘組織のタンメルフォルス會議。▲スターリンはココカサス・ボルシエヴィキの合法機關紙『ウレーミヤ』を指導す。  
▲スターリンの小冊子『無政府主義と社會主義』シヨルシア語で出版。▲新聞『カザルム』——ハテルブルク・ボルシエヴィキ組織の機關紙——第一號發行。

### 一九〇七年

レーニンの小冊子『ハテルブルクにおける選挙と三十一人のメンシエヴィキの偽善』出版、それに對して中央委員會（概してメンシエヴィキ的）はレーニンを黨の裁判に附す。▲四月三十日—五月十日、ロンドン黨大會。▲第二國會の解散と社會民主黨國會フラクシヨンの逮捕。國會選挙に關する七月三日條令

### 一九一〇年

パリにおけるロシア社會民主労働者黨中央委員會一月總會。同志スターリンを先頭とする中央委員會ロシア委員會組織せらる。▲八月——レーニンはコペンハーゲンにおける國際社會黨大會の活動に参加し、第二インターナショナルにおける日和見主義および中央主義に對する闘争において左翼協議會を組織す。▲九月——國際社會主義青年會議。▲十一月——パリにおいてボルシエヴィキの『ラボーチャヤ・ガゼータ』の創刊。  
▲十二月——ロシアにおいてボルシエヴィキの合法新聞『ズヴェスター』の創刊。▲十二月——モスクワにおいてボルシエヴィキの雑誌『ムイシリ』第一號發行。

### 一九一一年

一月——レーニンの論文『黨内における情勢について』。  
▲五月——『ノイエ・ツァイト』におけるトロツキーおよびマルトフの論文に關聯したレーニンの著作『ロシアにおける黨内闘争の歴史の意味』。▲六月——黨會議の準備に關する國外組織委員會の設立。▲六月——ロンジュモにおける黨學校の活動

の發布。▲第三國會の活動の開始。ストルイビンの農業改革。  
▲レーニンは第二インターナショナルのストックホルム大會に参加し、戦争に關するペーベルの決議に修正案を提出し、左翼協議會を組織す。第三回および第四回全露黨會議。清算派に對する闘争。

### 一九〇八年

レーニンの著作『農業問題』出版。黨中央機關紙『ソチアル・デモクラート』第一號發行。▲スターリンの逮捕とソリヴィチエゴドスクへの流刑。▲中央委員會國外局選任せられる。▲レーニンは著書『唯物論と經驗批判論』を完成す。

### 一九〇九年

パリにおける第五回ボルシエヴィキ會議。建神主義、召還主義に對するボルシエヴィキの闘争。▲スターリンは流刑地からバクーへ逃走し、そこにおいて非合法的活動をなす。▲『プロレタリー』編輯部擴大協議會。▲ロシアにおける産業的品揚の開始。

開始、ヴェー・イー・レーニンはそこで講義し且つ活潑に参加す。  
▲十二月——ボルシエヴィキの雑誌『プロスヴェシチエーニエ』第一號發行。▲スターリンは黨の委任によつてハテルブルクにおいて地下的活動をなす。

### 一九一二年

一月十八—三十（五—十七）日——ブラークにおける『ブラーク』全黨會議。スターリンは缺席のまゝ、中央委員會委員に選任せらる。▲四月十七（四）日——レナの統殺。四—五月——幾多の都市においてレナの統殺に對する抗議の大衆的同盟罷業。▲五月五日（四月二十二日）——ボルシエヴィキの新聞『プラウダ』第一號發行。『プラウダ』におけるレーニンとスターリンの指導的役割（レーニン全集、第十五卷、第十六卷、第十七卷参照）。▲八月三十一（十八）日——レーニンは國際社會黨事務局へ『ラズロモフツエフ』（ポーランド社會民主黨の左翼）擁護の手紙を送る。▲十月—十一月——第四國會への労働者クーリヤの選挙におけるボルシエヴィキの勝利。▲スターリンの小冊子『マルクス主義と民族問題』出版。

### 一九一三年

黨活動家を加へたロシア社会民主労働者黨中央委員會議  
會(二月協議會)。▲二月二十二(九)日——一九〇五年一  
月九日を記念して多くの都市における同盟罷業。▲五月一日  
(四月十八日)——五月十四(二)日——多くの都市におけるメ  
デー罷業および示威運動(労働者四十萬人)。▲ボロニンにお  
ける黨活動家を加へたロシア社会民主労働者黨中央委員會夏  
期(八月)協議會。▲十一月十一日(十月二十九日)——第四  
國會における獨立のボルシエヴィキ社会民主黨フラクシヨ  
ン(六人)の形成。▲スターリンはツルハンスク流刑地、クレ  
イケ村にあり。

### 一九一四年

労働者運動のヨリ以上の發展。労働者組織の選舉における  
ボルシエヴィキの勝利。▲六月十日(五月二十八日)——パ  
ーにおける總同盟罷業の開始。▲七月——ホテルブルグにお  
ける同盟罷業ミバリケード。▲第二インターナショナルによつて  
召集されたブリュッセル協議會とそこにおけるボルシエヴィキ

の決議。▲八月一日(七月十九日)——ロシアに對するドイツ  
の宣戰。▲十一月一日(十月十八日)——ロシア社会民主労働  
者黨中央委員會議の宣言『戰爭はロシア社会民主黨』。▲十一月  
十六(十七)(三十四)日——國會ボルシエヴィキ・フラクシ  
ヨンの逮捕。

### 一九一五年

二月——ボルシエヴィキ国外支部のベルン會議。▲三月——  
ベルンにおける國際青年會議とボルシエヴィキ代表の進出。▲  
八月——チンメルワルドにおける第一回國際社会黨會議。レ  
ニンはこの會議において『チンメルワルド左翼』を作る。▲十  
月——軍事工業委員會議選舉のホイコット。

### 一九一六年

四月——キーンタールにおける第二回國際社会黨會議。レ  
ニンはそこにおいて左翼を指導す。▲六月——レニンは  
『資本主義の最高段階としての帝國主義』を完成す。

### 一九一七年

ペトログラードにおける總同盟罷業。二月革命。▲スターリ

ン流刑地からペトログラードへ歸る。▲『アラウダ』第一號發  
行。レニンの『遠方からの第一の手紙』『アラウダ』に掲載  
せらる。▲四月——スウイスからペトログラードへのレニ  
ンの歸國とフィンランド大停車場における彼の最初の進出。レ  
ニンの進出『この革命におけるプロレタリアートの任務に  
ついて』(四月テーゼ)。▲ロシア社会民主労働者黨ペトログ  
ラード全市會議。▲『ソルダートスカヤ・アラウダ』第一號發  
行。▲權力の四月危機。危機に關する中央委員會議の決議。▲ロ  
シア社会民主労働者黨全露會議。レニンのテーゼが決議の  
基礎として採用せらる。▲五月——中央委員會議政治局の設立ミ  
レニンおよびスターリンのそれへの参加。ロシア社会民主勞  
働者黨戦線および背後軍事組織會議。レニンは、スターリンそ  
の他の報告。▲六月——ボルシエヴィキのスローガンのもさに  
ペトログラードの大衆的示威運動。▲七月——ペトログラ  
ードにおける七月事件。▲閉鎖された『アラウダ』の代りのボル  
シエヴィキ機關紙『ラボーチー・イー・ソルダート』第一號發行。  
▲レニンは非合法状態に移る。▲八月——武装暴動の必要を  
宣言したペトログラードにおけるロシア社会民主労働者黨第  
四回大會。同志スターリン大會を指導しレニンの方針を實

現す。▲九月——レニンは地下より中央委員會議へ手紙を送  
る、『ボルシエヴィキは權力を奪取せざるべからず』『マルクス  
主義と暴動』。▲十月——ペトログラード・ソヴィエトは權力  
組織に關するボルシエヴィキの決議を採用す。豫備議會の開會。  
豫備議會におけるボルシエヴィキの宣言とそれからの退席。▲  
レニンの参加した中央委員會議。武装暴動の準備に關するレ  
ニンの決議は二人——カメネフとジノヴィエフ——に對す  
る多数派によつて採用せらる。▲暴動の指導に關する軍事革命  
中央部選出せらる——スターリン、スヴェルドロフ、ジェルジ  
ンスキー、アブノフおよびウリツキー。▲レニンはジノヴィ  
エフとカメネフとの黨からの除名を要求した『中央委員會議へ  
の手紙』を書く。▲十一月——夜遅く變装せるレニンはス  
モルモイに移り、暴動の直接的指導に着手す。十月革命。

### 一九一八年

一月——第二回全露ソヴィエト大會。權力と平和と土地に  
關するレニンの報告。レニンを先頭とするソヴィエト政府  
の設立。▲アレストリトフスクにおける講和談判の再開。レ  
ニンのテーゼ『單獨併合講和の即時締結について』を審議



したペトログラードにおける黨活動家協議會。▲勞農赤軍の形成に關する布告の發表。▲三月——ロシア社會民主労働者黨第七回大會。アレスト・リトフスクにおいて署名された講和條約の確認に關する決議採用せらる。戦争と講和に關するレーニンの報告。ロシア社會民主労働者黨ロシア共產黨(ボルシエヴィキ)を改稱せらる。▲六月——全露中央執行委員會は貧農委員會の組織に關する布告を採用す。▲ペトログラードにおいて右翼社會革命黨員セルゲエフによるヴォロダルスキーの暗殺。▲モスクワにおけるウクライナ共產黨(ボルシエヴィキ)第一回大會。▲すべての大工業の國有化に關する人民委員會議の布告。▲七月——モスクワにおける左翼社會革命黨員の叛亂。ヤロスラフルにおける白衛軍の叛亂。▲第五回ソヴェト大會はソヴェト憲法を確認す。▲クラーク層に對する闘争および貧農への援助のための農村への大衆的遠征に關するペトログラード労働者宛のウエ・イー・レーニンの手紙。▲八月——すべてのブルジョア新聞の閉鎖に關する人民委員會議の決議。▲右翼社會革命黨員カプランによるレーニンの負傷。ペトログラードにおけるウリツキーの暗殺。▲九月——アルジョアシに對する大衆的赤色テロルおよび共和國軍事革命會議の

設立に關する全露中央執行委員會の決定。▲二十六人のパクー委員の銃殺。▲十月——レーニンの論文『プロレタリア革命と背教者カウツキー』。

一九一九年

一月——カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクの暗殺。▲三月——レーニンの指導の下にモスクワにおけるコミンテルン大會。第三(共產)インターナショナルの創立。全露中央執行委員長ヤー・スヴェルドロフ死す。▲ロシア共產黨第八回大會。公開大會におけるレーニンの演説と黨綱領に關する報告。黨綱領の採用。▲五月——雑誌『コムニニステイチエスキ』インテルナチオナル第一號發行。▲モスクワカザン鐵道における最初の『共產土曜労働』。▲十月——ベルリンにおける共產青年インターナショナルの創立。十二月——ロシア共產黨全露會議。

一九二〇年

三月——ロシア共產黨第九回大會▲七月——レーニンの小冊子『共產主義における「左翼主義」の小兒病』出版。▲モス

クワにおけるコミンテルン第二回大會の開催。▲七月——モスクワにおける國際共產主義者會議の開催。▲十月——ロシア共產黨全露會議。▲十一月——ウランゲルの撃破。白色軍からのクリミアの解放。▲十二月——労働組合問題に關する第八回全露ソヴェト大會ロシア共產黨フラクシヨンの討論會議。『労働組合について』現在の瞬間について、および同志トロッキーの誤謬について』のレーニンの演説。

一九二一年

一月——レーニンの小冊子『再び労働組合について』現在の瞬間について、および同志トロッキーおよびブハーリンの誤謬について』出版。▲三月——ロシア共產黨第十回大會。食糧税や労働組合に關するレーニンの報告。民族問題に關するスターリンの報告。現物税を以て食糧および原料の徵發に代へることに關する全露中央執行委員會の決定。▲四月——レーニンの小冊子『食糧税について』出版。▲五月——ロシア共產黨全露會議。食糧税に關する報告。▲六月——コミンテルン第三回大會。黨の肅清に關するロシア共產黨中央委員會および中

央統制委員會の決定。▲十二月——ロシア共產黨全露會議。

一九二二年

三月二十七日—四月二日——ロシア共產黨第十二回大會。▲五月五日——『アラウダ』十周年。▲六月三日—八月七日——モスクワにおける右翼社會革命黨員の公判。▲八月四—七日——ロシア共產黨全露會議。ウエ・イー・レーニンはイー・ピー・スターリンにロシア共產黨全露會議に對してその歡迎の辭において感謝を傳へ且つ間もなく活動に着手するだらうといふ期待を表明すべき全權を與へる。▲八月——モスクワにおけるコミンテルン第四回大會。▲十一月十三日——レーニンは新經濟政策と世界革命の見透しに關する報告を以て進出す。▲十二月三十日——ソヴェト社會主義共和國第一回全聯邦ソヴェト大會。聯邦條約の締結。▲十一月二十日——レーニンは内外政策に關する演説を以てモスクワ・ソヴェト總會に進出す(彼の最後の進出)。▲十二月十二日——ウエ・イー・レーニンはクレムリにおける彼の部屋において最終日の活動をなす。

## 一九二三年

一二月——ツェネイー・レーニンの論文「如何に我々は労働監督局を再組織すべきか?」、「善きことは少くとも、而も善し」、「協同組合について」出版。▲四月——ロシア社会民主労働者第一回大会二十五周年。▲ロシア共産黨第十二回大会。民族問題に關するスターリンの報告。▲十月十五日——國際農民インターナショナルの創立。▲十月——中央委員会および中央統制委員會議大總會はトロツキーおよび「四十六人」グループの進出を分裂主義的分派的進出と審判す。▲十二月——黨の討論。大多數の黨細胞は反對派の政綱に反對す。▲十二月八日——トロツキーは中央委員会に對して向けられた論文「新しき進路」を以て進出す。▲十二月十四日——討論の實行に關するロシア共産黨中央委員會議の決定。

## 一九二四年

一月十四—十五日——黨の討論の總結果の問題に關するロシア共産黨中央委員會議。▲一月十三—十八日——ロシア共産黨第十三回全露會議。スターリンの報告「黨建設の當面の任

務について」▲二月二十一日——レーニン死す。▲二月二十一日—二十二日——レーニンの死に際して召集された中央委員會議。第二回全聯邦ソヴェト大會の追悼會議。同志スターリンは黨へのレーニンの遺訓に關する演説を以て進出す。▲四月——スターリンは「レーニン主義の基礎について」講義す（スヴェドローフ大學において）。▲五月——第十三回黨大會。▲六月十七日—七月八日——コミンテルン第五回大會。▲秋——トロツキーの「十月の教訓」に關する討論。▲十一月十九日——フラクシオン總會におけるスターリンの演説「トロツキー主義かレーニン主義か」。▲十月二十五—二十七日——ロシア共産黨中央委員會議總會は農村における活動の當面の任務を審議す。

## 一九二五年

一月十七—二十日——ロシア共産黨中央委員會議總會。トロツキーの討論の問題に献げられた、總會における同志スターリンの演説。▲四月二十七—二十九日——ロシア共産黨第十四回會議。會議は黨建設や、協同組合や、統一農業稅や、

的偏向に關する總會における同志スターリンの報告。

## 一九二七年

二月七—十二日——全ソ聯邦共産黨中央委員會議總會は工業における資金建設の問題を審議す。▲五月十八—三十日——コミンテルン執行委員會議第八回總會。▲五月二十四日——同志スターリンの演説「支那における革命とコミンテルンの任務」。▲七月二十九日—八月九日——全ソ聯邦共産黨中央委員會議および中央統制委員會議聯合總會開催、多くの極めて重要な問題、特に國際情勢の問題について審議す。▲同志スターリンはコミンテルン執行委員會議總會において國際情勢とソヴェト聯邦の防衛の問題、および八月八日の反對派の聲明に關して進出す。▲九月九日——第一回アメリカ労働者代表との同志スターリンの會談。▲十月二十一—二十三日——全ソ聯邦共産黨中央委員會議および中央統制委員會議聯合總會開催。總會は國民經濟五ヶ年計畫の作成および農村における活動に關する指令を審議す。總會はトロツキーとシノヴィエフの中央委員會議の中からの除名に關する決定を採用す。▲十月二十三日——全ソ聯邦共産黨中央委員會議および中央統制委員會議聯合

金屬工業や、革命的適法性や、またコミンテルン執行委員會議大總會に關聯してコミンテルンおよびロシア共産黨の任務に關する決議を採用す。▲十二月十八—三十日——全ソ聯邦共産黨第十四回大會——工業化の大會。同志スターリンの中央委員會議の政治報告。▲レニングラードの「新反對派」に對する鬭争。大會は黨規の修正を確認し、労働組合および共産青年同盟の活動に關する報告を聴取す。

## 一九二六年

七月十四—二十三日——全ソ聯邦共産黨中央委員會議および中央統制委員會議聯合總會。總會はソヴェトの改選に關するカシニヤを最終的に總決算し、ラシゲイチその他の行動や、黨の統一や、住宅建設や、穀物買上げカシニヤの問題を審議す。反對派的トロツキーとシノヴィエフ・ブロックの成立。▲十月二十六日—十一月三日——全ソ聯邦共産黨第十五回會議。▲十一月三十日——コミンテルン執行委員會議支那委員會議における同志スターリンの演説「支那における革命の見透しについて」。▲十一月二十二日—十二月十六日——コミンテルン執行委員會議第七回擴大總會。我黨における社会民主主義

總會における同志スターリンの演説『以前および今日のトロツキスト反對派』。▲十一月五日——同志スターリンは外國の労働者代表と會談す。▲十二月二十九日——全ソ聯邦第十回黨大會——集團化の大會。トロツキー派の黨からの除名。トロツキー派の見解の宣傳は全ソ聯邦共産黨に所屬すること一致し難し。

一九二八年

四月六—十一日——全ソ聯邦共産黨中央委員會および中央統制委員會聯合總會開催。穀物買上げおよびシャハト事件の問題を審議す。▲五月二十八日——赤色教授養成所、コムアカデミー、スヴェルドロフ大學の學生との同志スターリンの會談『穀物戦線において』。▲六月四—十二日——全ソ聯邦共産黨中央委員會總會。▲七月十三日——レニングラードの黨活動分子に對する中央委員會七月總會の總結果に關する同志スターリンの報告。▲八月十七日—九月一日——コミンテルン第六回大會開催。コミンテルン綱領の採用。▲十月十九日——モスクワ委員會およびモスクワ統制委員會總會における

同志スターリンの演説『全ソ聯邦共産黨における右翼的危險性について』。▲十一月十六—二十四日——全ソ聯邦中央委員會總會開催。總會は多くの極めて重要な問題、特に七時間労働日の總結果および今後の實施や、労働者の採用と黨の成長の調節の問題を審議す。▲十一月十九日——中央委員會總會におけるスターリンの進出『國の工業化と全ソ聯邦共産黨における右翼的偏向について』。

一九二九年

四月十三—二十九日——全ソ聯邦共産黨第十六回會議。會議は國家計畫委員會によつて提出された五ヶ年計畫を是認し、全ソ聯邦共産黨の黨員および候補者の肅清と検査を行ふことを決議し、農業問題や官僚主義に對する闘争の總結果および當面の任務について審議す。▲七月——コミンテルン執行委員會第十回總會。▲八月一日——總會は同志アハリーソン、ギトラウ、セルラおよびエンメルドローをコミンテルン執行委員會幹部會員の義務から免することを決議す。▲十一月七日——十月革命第十二周年によせた同志スターリ

一九三一年

ンの論文『偉大なる急轉の年』出版。▲十一月十一—十七日——全ソ聯邦共産黨中央委員會總會。總會は右翼的偏向者のグループ（同志アハリーソンのグループ）の問題を審議し、右翼的偏向のイデオロギーたる同志アハリーソンを全ソ聯邦共産黨中央委員會政治局の中から追ひ出すことを決議し、爾餘の者に對しては、右翼日和見主義的見解の宣傳が全ソ聯邦共産黨に留まること、一致し難いといふ警告を宣言す。▲十二月二十七日——マルクス主義農學者會議における同志スターリンの演説『ソヴェエト聯邦における農業政策の問題によせて』。

一九三〇年

三月二日——同志スターリンの論文『成功による眩惑』。▲六月二十六日—七月十三日——全ソ聯邦共産黨第十六回大會——展開された社會主義的攻撃の大會。同志スターリンの中央委員會の政治報告。▲十二月十二—二十一日——全ソ聯邦共産黨中央委員會および中央統制委員會聯合總會。總會は一九三一年の國民經濟計畫について聽取す。同志レイコフを全ソ聯邦共産黨中央委員會委員の義務から免す。

一九三二年

二月——全ソ聯邦共産黨第十七回會議は同志モロトフの報告『一九三二年の工業の發展の總結果と一九三二年の任務』を聽取且つ審議し、ソヴェエト聯邦國民經濟第二次五ヶ年計畫の

作成に對して指令を與ふ。▲九月——コミンテルン執行委員  
會第十二回總會。コミンテルン執行委員會總會の名において  
全ソ聯邦共産黨およびツヴェイト聯邦の勤勞者へのメッセー  
ジが採用せらる。十月革命第十五周年。

一九三三年

一月——全ソ聯邦共産黨中央委員會および中央統制委員會  
一月聯合總會。同志スターリンの報告『第一次五ヶ年計畫の總  
結果について』、『農村における活動について』。同志カガノ  
ヅイチの報告『機械トラクター配給所およびソフホーズにおけ  
る政治部について』。▲二月十九日——コルホーズ農場員突  
撃隊員第一回全ソ聯邦大會における同志スターリンの進出。  
同志スターリンはその演説の中で、コルホーズ運動の當面の  
任務の一つとして『すべてのコルホーズ農場員を富裕ならし  
め』、コルホーズをホルシェヴィキ的ならしめる任務を指摘す。  
▲十一月——十月革命第十六周年に獻げられたモスクワ・ツ  
ヴェイト總會における同志モロトフの報告。▲オデッサ地方の  
コルホーズ農場員突撃隊員との同志スターリン、モロトフ、

カリニンおよびカガノヅイチの會談。▲中央委員會總會は第  
十七回黨大會の召集に關する決議を採用す。

全「ソ」聯邦共産黨史人名總索引

▲略歴は一九三三年現在。略歴なきは原本において省略され又は脱落せるもの(譯者)。

ア 行

- アイヘンヴァルト Айхенвальд —— 下卷六八〇。
- アヴィロフ Авиллов B. B. (1874生) —— 元ボルシェヴィク。第三回黨大會の參加者。二月革命後黨  
ペトログラード委員會員となつた。一九一七年ノヴォジズニ派に參加し、『ノーヴァヤ・ジズニ』の  
編輯部員であつた。十月革命後政治的活動から離れ、ソヴェイト聯邦において生活し且つ働いて  
ゐる。—— 下卷一一九。
- アヴェナリウス Avenarius Richard (1843-1896) —— ドイツの哲學者、チューリッヒ大學教授、經  
験批判論の觀念論的學派の創始者。—— 上卷四〇九。
- アウエル Auer I. (1846-1907) —— ドイツ社會民主黨の大活動家、その右翼に參加した。—— 上  
卷一三四、二四一。
- アヅクセンティエフ Азучентьев H. A. (1867生) —— 社會革命黨の指導者、その右翼を主宰し  
た。内務大臣としてケレンスキーの聯立政府の一つに參加した。シベリアのチニコ・スロヴァキア

戦線における内亂の組織者の一人、反革命的なウファの執政政府員。白色亡命生活の陣營にある。  
——下巻六九、七六。

アヴヂェフ Авдеев ——下巻四九八。

アキモフ Акимов В. (В. П. Махновец) (1875-1921) ——『イスクラ』時代のロシア社會民主労働者黨における最も極端な日和見主義者の一人、經濟主義者の機關紙『ラボーチエ・ディエロ』の編輯者の一人。後には全く黨の活動から離れた。——上巻一〇三。

アクセルロフ Аксельрод И. В. (1850-1928) ——『労働解放團』の創立者の一人。『イスクラ』編輯部内においてまた第二回黨大會においてメンシエヴィズムのイデオログの一人であり、爾來その生活の終りに至るまでボルシエヴィキの最も鮮明な反對者として進出した。——上巻五三、五五、六五、七〇、七二、一二二、一三七、一六二、一六三、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、二三四、三〇五、三二七、三七六、五四三。下巻四四二。

アストロフ Астров ——下巻八二、六八〇。

アゼフ Азеф Е. Ф. (1870-1918) ——挑發者、社會革命黨の戰闘組織の指導者の一人にして同黨の中央委員會委員。一九〇八年挑發者たることが暴露され、その後國外へ逃れた。——上巻三九八。

アードラー Adler Victor (1852-1918) ——オーストリー社會民主黨の創立者にして指導者、中

央派、日和見主義的社會民主主義者の典型。——上巻五一六。下巻三六一。

アフナシエフ Афанасьев (Е. А. Климанов) (1866-1919) ——労働者、ブルスネフ・サークルの参加者。數度禁錮や流刑に處せられた。——上巻七五、七六。

アプテクマン Аптекман О. В. (1849-1926) ——『土地と自由』協會の有名な活動家。——上巻五三。

アブラモヴィチ Абрамович (Рейн) Р. А. (1875生) ——ブンド派、メンシエヴィキの指導者。十月革命およびソヴィエト權力の決定的な敵手として進出した。次いで外國に亡命し、外國においてソヴィエト聯邦および全ソ聯邦共產黨に對する干涉主義的中傷的カンパニヤを指導してゐる。——上巻三〇六、四一四。下巻六三〇。

アブロシモフ Аброцимов В. М. (1878生) ——挑發者、清算派のペテルブルグ『イニシアティヴ』グループの中で活動した。メンシエヴィキの組織委員會および中央軍事工業委員會労働者グループの成員。——上巻五五二。

アラクチエフ Аракчеев А. А. (1769-1834) ——バーヴェル一世およびアレクサンドル一世の寵臣、極端な反動家、ロシアの對内および對外政策に對して巨大な影響を有した。警察的専制政治と粗野な軍人跋扈の全時代がアラクチエフの名と結びついてゐる。——上巻二八。

アラルト Аларт Е. ——上巻一八三。

アルツイバーシエフ Арибашев — 上卷三九九。  
 アルツイブシエフ Арибашев В. П. (1854-1917) — 八〇年代における革命運動の参加者、久しくシベリアへ流刑されてゐた。流刑地から歸つた後、一九〇〇年代に、社會民主黨に参加し、『イスクラ』の組織に入り、ボルシエヴィキの黨活動に活潑に参加した。——上卷一六八。  
 アルテム Арем (А. Ф. Сергеев) (1883-1921) — 老ボルシエヴィク、一九〇一年以來の黨員、全ソ聯邦共産黨中央委員會議員。十月革命後白衛軍に對する闘争のための労働者部隊の組織者、その後嶺山労働者組合中央委員會議長。一九二一年七月二十四日プロペラ附高速度車輛の試験の際横死。——上卷三〇七。下卷九〇。

アルブゾフ Абузов — 下卷一五六。

アルマンド Арманн Е. Ф. («Инееса») (1875-1920) — 一九〇四年以來の婦人ボルシエヴィク、

一九〇五年の革命に積極的に参加した。第一回國際婦人大會の組織者の一人。——上卷四六四。

アレクサンドル二世、三世 Александр II, III — 上卷四二、八六。

アレクサンドロフ Александров — 下卷七七。

アレクシンスキー Алексинский П. А. (1879生) — 第二國會議員、社會民主黨フラクションの有名な演説家として進出した。後に召還派に参加した。戦争の初めには極端な排外主義的立場を取つた。一九一七年七月事件においてはレーニンおよびボルシエヴィキをドイツの手先として誹謗

する目的で虚偽の文書を發表した。一九一七年十月の後には反革命の積極的な活動家。——上卷四一一、四一八。下卷七六。

アレクセエフ Алексеев П. А. (1849-1891) — 織物工。七〇年代の最初の革命家の一人。織物工および鐵道工場労働者のサークルの組織者。五十人事件に連坐して十年の懲役を宣告された。

公判廷においては、労働者階級の胼胝だらけの手によるツァーリズムの不可避的な破滅の豫言を以て、その明かに革命的な演説を結んだ。——上卷五一。

アレクセエフ Алексеев — 下卷九九。

アロセフ Аросев А. Я. — 共産主義者、一九〇七年以來の黨員。十月革命當時にはモスクワ軍事革命委員會の部隊の指揮者で、その委員會員であつた。近年は文筆的活動に従事してゐる。外交的活動に従事した(チニコ・スロヴァキア駐劄ソ聯邦大使であつた)。——下卷五七。

アントノフ オウゼエン Антонов-Овсеенко (1884生) — 共産主義者。一九〇六年セヴァストポリリにおける武装暴動組織の故に逮捕されて、死刑を宣告されたが、二十年の懲役に代へられた。首尾よく逃走した後國外に去り、漸く一九一七年二月歸國した。戦争中にはメンシエヴィク國際主義者。一九一七年五月ボルシエヴィキ黨に加入した。十月革命の積極的参加者で、冬宮の占領を指導し且つ臨時政府を逮捕した。内亂中には南部戦線において種々の指揮的職務に就いた。一九二二—一九二四年には勞農陸海軍政治本部長およびソ聯邦革命軍事會議員。一九二三年トロ

ツキスト反対派に参加し、一九二八年それと分離した。種々の國々におけるソ聯邦大使。現在はポーランド駐劄ソ聯邦大使。——下卷五七、三五七。

アントノフ＝サラトフスキー Антонов-Саратовский В. П. (1885生)——ボルシェヴィク、一九〇二年以來の黨員。最近にはソヴェト聯邦高等法院刑事委員會議長。——上卷五四六。

アントノフ＝ルーキン Антонов-Лукин ——下卷一六四。

アンドレエフ Андреев ——下卷四四九。

アンネニコフ Анненков ——下卷一八六。

イヴァノフ Иванов ——下卷六七八、六七九。

イグナトフ Игнатов В. П. (1854-1884)——革命家。最初『土地と自由』黨に参加し、分裂後

『土地改革』黨に加はつた。『労働解放』團の創立者の一人。——上卷五五。

イコフ Иков ——下卷六二九。

イーストマン Eastman Max ——下卷四八一。

イリイン＝ジエネフスキー Ильин-Женевский ——下卷五七。

ヴァガニャン Ваганин ——下卷五四四。

ヴァシリエフスキー Васильевский ——下卷五七。

ヴァネエフ Ванеев А. А. (1872-1899)——革命的社會民主主義者、レーニンと共に『労働者階

級解放闘争同盟』の組織に参加した。一八九五年レーニンと同時に逮捕され、やがて東シベリアへ追放され、そこにおいて一八九九年肺結核で死んだ。——上卷八八、八九。

ヴァルガ Varga E. ——下卷二六二。

ヴァレンツォワ Вапентова О. А. (1862生)——老婦人ボルシェヴィク。八〇年代に革命的活動を開始した。一八九三年以來社會民主主義者。北部地方の黨史に關する多くの著作の著者。——上卷三〇七。下卷五七。

ヴァンダーヴェルデ Vanderveide Emil (1866生)——ベルギー社會黨の指導者、第二インターナショナルの首領の一人、極端な日和見主義者。——上卷一三四、二三五、四九〇、五一四、五一六、五四〇。

ヴァイオヴ、チ Вишниц В. ——共產主義者。ユーゴ・スラヴィア共產黨員であつた。ソヴェト聯邦において活動した。コミンテルン執行委員會委員であつた。トロツキスト反対派の積極的な参加者。一九二七年秋分派のおよび分裂主義的活動の故に指導的な黨活動から除外され、次いで黨から除名された。一九三〇年中央統制委員會黨參與會の決定によつて黨に復歸せしめられた。——下卷四九五、四九六。

ウヤッチе Уитте G. Ю. (1849-1915)——十九世紀末および二十世紀初頭のロシア政府における最も活動的な大臣の一人、ロシアにおける資本主義の發展を大いに助長した。一九〇五年十月十

七日の宣言の執筆者。一九〇五年の革命の後政治的活動から退いた。——上卷二六四、二八七、三三六。

ヴォロノフ Вилнов П. Е. (Михайл Заводков) (1885-1910) ——ボルシェヴィク、労働者、職業的革命家、優秀な實踐者——組織者。一九〇二年入黨、肺結核のために國外で死んだ。——上卷四一一、四一三。

ヴィンテル Винтер ——上卷五四三。

ヴォロダルスキー Володарский ——下卷二〇四。

ヴェリチキナ Величкина В. М. (Бонч-Бруевич) (1868-1918) ——婦人ボルシェヴィク、女醫、九〇年代の社會民主主義者サークルの參加者。——上卷四四五。

ヴォイティンスキー Воитинский В. С. (Сергей Петров) ——最初はボルシェヴィキに參加してゐたが、二月革命當時メンシェヴィキに移り、革命後は反革命的陣營においてボルシェヴィキに對して激烈な闘争を行つた。——上卷三七一。

ヴォリスキー Волский, «Станислав» (Ваннеимъ Гоголова А. В.) (1880生) ——文筆家、第二回黨大會における分裂の後ボルシェヴィキに參加し、一九〇五年の革命の後ボルシェヴィズムから離れ始めた。一九〇八—一九〇九年召還派の指導者、次いで『フェリョード』グループの一員。一八一八年にはロシアにおいて、一九一九—一九二〇年には國外においてレーニンおよびソヴィ

エト權力に對して闘争を行つた。一九二〇年ソヴィエト聯邦に歸り、政治的活動から全く離れた。——上卷四一一。下卷一一九。

ヴォロシロフ Ворошилов К. Е. (1881生) ——金屬工、最も有名なボルシェヴィキの一人、一九〇三年以來の黨員、第四回および第五回黨大會の代議員、内亂時代には武裝的勢力の最大組織者の一人で、南部戦線において軍隊を指揮した。一九二五年以來陸海軍人民委員、ソヴィエト聯邦革命軍事會議議長および全ソ聯邦共産黨中央委員會政治局員。——上卷三〇七。下卷二〇五、二一一、二二四、二三二、六八二。

ヴォロフスキー Воровский В. В. (Орловский) (1871-1923) ——老ボルシェヴィク、有名な黨活動家にして文筆家、一八九〇年革命運動に入つた。第二回黨大會の後ボルシェヴィキに參加した。ソヴィエト權力の下においては、駐スウェーデン大使、駐イタリー大使、ローザンヌ會議における代表者。ローザンヌにおいてロシアの王黨コンラディに暗殺された。大なる文獻的遺産を残した。——上卷三〇七。

ウグラノフ Угранов Н. А. ——元共産主義者、一九〇七年以來の黨員。一九二二年三月黨ベトログラード縣委員會書記。後全ソ聯邦共産黨モスクワ委員會書記。一九二七年から一九三〇年までソヴィエト聯邦労働人民委員であつた。右翼反對派の指導者の一人であつた。一九二九年中央委員會十一月總會および第十六回黨大會において自己の右翼日和見的誤謬を認めることについて



聲明した。黨から除名の瞬間まで重工業人民委員部參與會員であつた。リュートイン——ガルキン——スレブコフその他の反革命的グループに協力の故に、一九三二年十月全ソ聯邦共產黨中央統制委員會の決定によつて、黨から除名された。——下巻五七〇、五七一、六〇九、六七八、六七九。

ウラヂミルスキー Владимирский М. Ф. (1874生)——老ボルシエヴィク、一八九四年社會主義組織における活動を開始した。一九〇五年モスクワ武装暴動の參加者。ソヴィエト權力の下においてはその責任ある黨および行政上の地位を占めた。現在保健人民委員。全ソ聯邦共產黨中央委員會審査委員會委員。——上巻三〇七。

ウラヂミール・ロマンノフ Владимир Романов ——上巻二〇一。

ウラヂミロフ Владимиров М. К. (Лева) (1879-1925)——有名なボルシエヴィク、天才的な組織者、一九〇二年イスクラ派の中で革命的活動を開始した。一九一一年ボルシエヴィキレーニン派から脱退して、和解派となつた。二月革命の後區際派の組織と共にボルシエヴィキに參加した。多くの人民委員部において指導的な經濟的活動に當つた。——上巻三〇七、四一二、四二五、四二六。

ウランゲル Франкель ——上巻七九、一六〇。下巻二三〇、二三一、二三二、二三三、二三六。

ウリツキー Улицкий М. С. (1873-1918)——九〇年代の初め以來革命運動に參加。一九〇三年

黨の分裂の後メンシエヴィキに參加した。二月革命の後區際派と共にボルシエヴィキ黨に加入した。

第六回黨大會において中央委員會に選舉された。ペテルブルグ反革命取締非常委員會議長として、反革命に對して無慈悲な闘争を行つた。一九一八年八月三十日學生の社會革命黨員カネギツセルによつて暗殺された。——上巻五四一。下巻九〇、一〇四、一二三、一六四、二〇四。

ウリヤノフ Ульянов И. И. ——レーニンの父。——上巻八五。

ウリヤノフ Ульянов А. И. (1866-1887)——革命家、人民の意思派、レーニンの兄。アレクサンドル三世の暗殺未遂に參加して處刑された。——上巻四三、八六。

ウリヤノフ Ульянов Д. И. (1874生)——ボルシエヴィク、レーニンの弟、九〇年代の革命運動の參加者、『イストラク』の組織に入り、第二回大會に參加した。一九〇六年以來政治的活動から退いた。一九一七年の後クリミヤの黨組織および革命的組織において活動した、一九二五—一九三〇年にはスヴェルドロフ共產黨大學の管理部長。——上巻一六八。

ウリヤノワ Ульянова М. А. ——レーニンの母。——上巻八六。

ウストリャロフ Устрялов ——下巻二九二、四八一。

ウハノフ Уханов К. В. (1891生)——ボルシエヴィク、一九〇七年以來の黨員。モスクワ・ソヴィエトの議長であつた。現在全ソ聯邦共產黨中央委員會委員、供給人民委員會委員。——上巻五四九。

ウルバンス Urbans —— 下卷四八四、四九六、四九七。

ヴルム Wurm —— 上卷四九六。

ウンゲルン УнгеРН —— 下卷一八六、二二六。

ウンシュリフト Уншлифт F. —— 下卷一六四。

エイスマント Эйсмонт —— 下卷六七九、六八〇。

エイデリマン Эйдельман B. J. (1867生) —— 老ボルシエヴィク、ロシア社会民主労働者黨第一回大會の組織者および参加者。一九〇五年ボルシエヴィキに参加した。十月革命後は経済的活動に従事してゐる。上卷九六。

エジエフ Ежов (Иеробайм G. O.) (1879生) —— 社会民主主義者、イスクラ派、第二回大會後メシエヴィク。一九〇九—一九一四年には極端な清算派の一人。戦争中には防衛的主戦論者であつた。—— 上卷四〇四。

エヌキーゼ Енукедзе A. G. (1877生) —— 一八九八年以來の黨員、ボルシエヴィキの地下的印刷所および非合法文獻の運搬の組織者。十月革命の積極的な参加者、ソヴェト聯邦中央執行委員會幹部會員および書記、中央統制委員會委員。—— 上卷三五—。

エフドキモフ Евдокимов I. E. (1884生) —— 共產主義者。一九〇三年以來の黨員。シベリア、次いでレニングラードにおいて黨活動を行つた。内亂中には第七軍において指導的な政治的活動

に従事した。一九二五年黨のレニングラード委員會書記。數會期の全ソ聯邦共產黨中央委員會委員であつた。第十四回大會の前夜には、トロツキー派と合同した『新反對派』の先頭に立つた。トロツキスト反對派の隊伍における分派的活動に参加した故に中央委員會から除名され、次いで第十五回大會によつて黨から除名された。一九二八年誤謬を認めて黨に復歸せしめられた。今日では経済的活動に従事してゐる。—— 下卷四八二、四八三、四九八、五四四。

エーベルト Ebert F. (1871-1925) —— ドイツ社会民主黨の指導者の一人、ノスケの戦友。戦争中は社会排外主義者。十一月革命の後國民全權者會議に参加し、血腥い方策によつて革命を鎮壓した。ドイツ共和國大統領であつた。—— 上卷二三五。下卷一九三。

エメリヤノフ Емельянов —— 下卷七六。

エリザロフ Елизарова A. И. (Ульянова) (1864生) —— 有名なボルシエヴィキ黨員、レーニンの姉、一八八七年以來の革命運動の参加者。—— 上卷四四五、四四八。

エルヴェ Hervé G. —— 上卷五二三。

エルム Elm A. (1857-1916) —— ドイツの社会民主主義者、改良主義者、有名な協同組合の活動家。—— 上卷四九六。

エレメエフ Еремеев K. G. (1876-1931) —— 老ボルシエヴィク、文筆家、一八九六年以來の黨員、十月革命の積極的な参加者、『ブラウダ』の間断なき寄稿家。—— 上卷四四五。

エンゲルス Engels F. (1820-1895)——科學的社會主義の創始者。レーニンによつて書かれた傳記、全集、第一卷、四三一—四四〇頁参照。——上卷一、四、七、一四、一九、二〇、三四、六五、六八、七二、七三、八六、一〇六、一〇七、一一一、一五六、二二五、四〇九、四一〇、五〇七。下卷一七七、二〇三、六九一。

オクロワ Окружа Г. И. ——『イスクラ』組織のエージェント。——上卷一六八。

オシンスキー Ошинский В. (1885生)——共產主義者。一九〇七年以來の黨員。一九〇三年以來革命運動に参加。一九一七年十月ハリコフ革命委員會委員。ブレスト講和時代には『左翼共產主義者』の指導者の一人および彼等の雑誌『コムニスト』の編輯部員、間もなく『民主主義的中央集権』のグループの指導者となる。ロシア共和國國立銀行總裁および一九一七—一九一八年における最高國民經濟會議の最初の議長であつた。一九三〇年最高國民經濟會議議長代理および全ソ聯邦自動車運輸聯合主事。ソヴェエト聯邦國家計畫委員會委員、ウクライナ國民經濟管理局主事。全ソ聯邦中央委員會委員候補者。——下卷一六四、二三九、二四一、三三〇。

オゼロフ Озеров ——下卷一一五。

オソフスキー Осовский ——三五三、三五五、四六〇、四八四、四八五。

オッポコフ ロモノв Оппоков-Ломов (1888生)——有名なボルシエヴィク、經濟學者、一九〇五年に革命的活動を開始した。一九一六年には中央委員會モスクワ州局員。全ソ聯邦共產黨中央委員

會委員。——上卷五四六。

オブノルスキー Обнорский В. П. (1854生)——労働者革命家、チャイコフスキー派サークルの参加者、『南露労働者同盟』の積極的な参加者。『ロシア労働者北部同盟』の創立者の一人。——上卷四九、五一。

オボレンスキー Оболенский (Осинский) ——上卷四四八。

オリガリアフ ナシエワ Ольга-Анастасьева ——下卷五七。

オリミンスキー Олминский М. С. (1863-1933)——共產主義者、ボルシエヴィキ黨の最も古い黨員の一人、職業的革命家。八〇年代末からの革命運動の参加者。第二回黨大會の後ボルシエヴィク。一九〇五年のボルシエヴィキの新聞『フベリョード』および『プロレタリー』の積極的な寄稿家。數年間流刑地および監獄にあつた。二月革命時代には黨モスクワ委員會において活動した。モスクワにおいて十月革命に積極的に参加した。モスクワのボルシエヴィキ機關紙『ソチアール・デモクラート』の編輯部員であつた。一九二四年末まで全ソ聯邦共產黨中央委員會所屬研究所を主宰した。レーニン研究所管理部員であつた。黨史に關する多くの貴重な著作の著者。——上卷五四六。

オルジニキーゼ Орджоникидзе Г. К. (1886生)——最も有名なボルシエヴィキ、一九〇三年以來の黨員、一九一二年ブラダグ會議において指導的な三人に選舉された。十月革命および内亂の積極的な参加者。ソヴェエト權力の下において多くの責任ある地位を占めた。中央統制委員會議長

およびソヴェエト聯邦労働監督局人民委員、ソヴェエト聯邦最高經濟會議長であつた。現在重工業人民委員、ソヴェエト聯邦軍事革命會議員、ソヴェエト聯邦中央委員會委員、全ソ聯邦共產黨中央委員會およびその政治局の委員。——上卷四一三、四五四、四五七。下卷八九、四九八、五二二、六六七。

オレフノヴィチ Олехнович — 下卷九七。

### カ 行

ガイ Гай — 下卷二三五。

カヴニャク Cavaignac Louis (1802-1857) — 將軍、一八四八年二月革命後のフランスの陸軍大臣。一八四八年六月、獨裁者の全權を獲得して、パリの労働者の暴動を撃破し、その後政府の首腦者となつた。——下卷七七。

カウツキー Kautsky K. (1854生) — ドイツの社會民主主義者、第二インターナショナルの最も有名な理論家。マルクスおよびエンゲルスの直接的影響の下に活動を開始しながら、カウツキーはマルクス主義の基本的諸問題（プロレタリアートの獨裁、黨の役割）においてマルクス主義から離れた。中央派的立場を取つた。帝國主義戰爭時代には國際中央主義の指導者であつて、社會排外主義を隠蔽した。カウツキーは改良主義に轉落して、マルクス主義の學說を深刻に歪曲し、

偽造した。十月革命の後にはソヴェエト權力の最悪且つ最も真正の敵として、ソヴェエト聯邦に對する干渉の支持者として進出した。(彼についてはレーニンの著作『プロレタリア革命と背叛者カウツキー』、全集、第二十三卷、三三二—四二二頁参照) —— 上卷九、一一、一八、一九、一三三、一三四、三七五、三七六、四四七、四七四、四八八、四九〇、四九一、五〇二、五一二、五一六。下卷三三、一三五、二〇三、三六一、六一二。

カガノヴィチ Каганович Л. М. — ボルシエヴィキ、皮革工、一九一一年入黨、黨の最も有名な指導者の一人。革命前にはウクライナにおいて黨活動を行つた、革命後黨の最大の組織を指導した。ウクライナ共產黨中央委員會書記であつた。全ソ聯邦共產黨中央委員會およびその政治局の委員。全ソ聯邦共產黨モスクワ州組織書記。—— 上卷四一二。下卷六二五、六三六、六七三、六八二。

ガネツキー Ганецкий Я. С. (Дюргенберг) (1879生) — 老ボルシエヴィク、ポーランドおよびリトワニア社會民主黨(その左翼)の最も古い黨員の一人。十月革命以後ソヴェエト聯邦で外交部において活動した。—— 上卷一四八、三〇六、四六四。

カプラン Каплан — 下卷二〇四。

ガボン Гапон Г. А. (1870-1906) — 僧侶、保安課長ズバトフの戦友で、ペテルブルグのプロレタリアートを革命的闘争から引離すために、宗教的、道徳的要求を満足させるといふ旗の下に、

『労働者會議』を組織しようとした。ガボンによつて挑発的な目的を以て組織された大衆は、一九〇五年一月九日の運動を喚び起し、この運動は一九〇五年の革命の基礎を置いた。正體を暴露されたガボンは暗殺された。——上卷一一五、一一六、一九七—二〇一、五五六。

カメネフ Камеиев А. Е. (Розенфельд) (1883生)——一九〇一年社會民主黨組織に加入した。第二回黨大會における分裂後ボルシェヴィキに参加した。黨内におけるすべての自己の活動の間最も重要な瞬間に黨の根本方針と多くの深刻な不一致を有した。一九二七年にはトロツキを頭首とする『反對派ブロック』の組織の故に黨から除名され、一九二八年全ソ聯邦共産黨の隊伍に復歸せしめられた。一九三二年には黨の欺瞞およびリューティンの反革命的グループとの連絡の故に再び黨から除名された。——上卷一六九、四〇五、四〇九、四一二、四二二、四二四、四二七、四四五、四四八、四六三、五三四—五三六。下卷二五、二六、二七、二九、三〇、三五、三七、四〇、四三、四五、四七、五一、七五、九〇、九一、九二、一一三、一一四、一一五、一一六、一一八、一一九、一二〇、一五四、一五五、一五八、三〇一、三五三、三五四、三六六、三八九、三九一、三九二、三九三、四〇八、四一〇、四一四、四一九、四二四、四二六、四三四、四三六、四四六、四六〇、四六一、四六二、四七七、四八三、四九〇、四九八、四九九、五一一、五二九、五四四、六七八、六七九。

カメンスキー Камеиовский——上卷四六四。

カユロフ Каюров В. Н.——元共産主義者、リューチンの反革命的グループの組織者、このグループの中で舊『労働者反對派』との連絡のために抜擢された。黨の裏切およびこのグループの行動への積極的参加の故に、中央統制委員會の決定によつて黨から除名された。——下卷六七八、六七九。

カリニン Калинин М. И. (1875生)——最も有名なボルシェヴィキ、金屬工、一八九八年革命運動に参加した。多くの黨大會の参加者。一九一九年以來全露中央執行委員會議長、一九二四年以來ソヴェト聯邦中央執行委員會議長。全ソ聯邦共産黨中央委員會およびその政治局の會員。——上卷四五七。下卷五三七、六八二。

ガリペリン Галиперин——上卷一六三。

ガルヴイ Гаври——下卷六三〇。

ガルキン Галкин——下卷六七八、六七九。

カルボヴィチ Карпович П. В. (1874-1917)——社會革命黨員、文部大臣ボゴレポフの暗殺の故に二十年の懲役に處せられ、そこから國外へ逃亡した。——上卷一八三。

カルポフ Карпов А. П. (1879-1921)——九〇年代における革命運動の参加者、ボルシェヴィキに加入した。第二回大會の後和解派ボシエヴィキであつた。反動時代には政治的活動から離れた。十月革命の後化學工業の組織者および大活動家。——上卷一六四。

カルムニコフ Калмыков — 下卷一八六。

カレディン Карадин — 下卷九九、一一三。

キバリチッチ Кибальчич П. И. (1854-1881) — 七〇年代の革命運動の参加者、アレクサンドル二世の暗殺を準備した。この事件の他の参加者と共に處刑された。——上卷五八。

ギンズブルグ Гинзбург А. М. — 商人の子、職業上は經濟學者。メンシエヴィク。ロシア・メンシエヴィキの反革命的組織の組織者の一人およびメンシエヴィキ中央委員會『聯邦局』員。冶金、金屬加工および機械製造工業の領域における妨害活動の組織者。最高法院で有罪を宣告された。——下卷六二九。

クイブシニエフ Куибинцев В. В. (1888生) — 共產主義者、黨の最も有名な指導者の一人、一九〇五年以來の黨員。一九〇四年革命運動において工業中心地、特にレニングラードのボルシエヴィキ組織の中で活動した。再三逮捕放された。一九一七年十月以後多くの責任あるソヴィエトの地位を占めてゐる。内亂時代にはトルキスタン戦線における第六軍および第九軍の革命軍事會議員であつた。第十一回黨大會において中央委員會へ選舉された。第十二回大會以來中央統制委員會議長および勞農監督人民委員。その後最高國民經濟會議議長。一九三〇年以來ソヴィエト聯邦人民委員會議長およびソヴィエト聯邦國家計畫委員會議長。全ソ聯邦中央委員會および政治局の委員。ソヴィエト聯邦中央執行委員會委員。——下卷一六四、三四六、六六七。

グヴォズデフ Гвоздев И. А. — 極右メンシエヴィク、清算派、戦時には防衛的主戰論者、中央軍事工業委員會勞働者グループ議長、臨時政府の一聯立内閣における勞働次官。——上卷五五二、五五五、五五六。

グサロフ Гусаров Ф. В. (1920死) — 社會民主主義者、イスクラ派、第二回大會の後ボルシエヴィク、軍醫、社會民主黨軍事組織の著名な活動家。——上卷一六四。

クスコフ Кукова Е. А. (1869生) — 革命的マルクス主義に對するその修正主義的進出(『クレード』)その他によつて有名になつた。その後カデット黨員。一九一七年の革命においてはボルシエヴィキおよびソヴィエト權力の決定的な敵として進出した。現在亡命中、白衛軍新聞の婦人寄稿家。——上卷一〇七。

クズネツォフ Кузнецов — 下卷二八六。

グセフ Гусев С. И. (1874-1933) — 有名なボルシエヴィク、一八九六年以來革命運動の参加者、第二回大會の参加者、責任ある地位において雑多の活動をした。内亂時代には、勞農陸海軍政治本部および革命軍事委員會の委員。晩年にはコミンテルンで働いた。——上卷二〇四、二〇五、三〇七。

グチコフ Гучков А. И. (1862生) — モスクワの大工業家、大工業ブルジョアジーの最も反動的な仲間の代表者であつた。二月革命の後陸海軍大臣であつて、『勝利の最後まで』戦争の繼續を要

求した。一九一七年十月革命後はソヴェト權力に對する反革命的進出の參加者および鼓吹者。  
——下卷八、一〇、六四、六五、六六。

クニボヴイチ Книпович Л. М. «Ляденка» (1856-1920)——婦人ボルシエヴィク、優秀な實際家  
組織者、『イスクラ』の取次所の設立のために大いに活動した。一九〇八年革命運動から退いたが、  
一九一七年、二月革命の後、再び黨に復歸した。——上卷一六八。

クビヤク Кубяк П. А. (1881生)——労働者、ボルシエヴィク、一八九八年以來革命運動の參加者、  
全ソ聯邦共産黨中央委員會委員。——上卷三〇七。

クラシコフ Красиков П. А. (1870生)——有名なボルシエヴィク、『イスクラ』の活潑なエジエント  
の一人。現在はソヴェト聯邦最高法院検事。——上卷一六八。

クラシン Красин Л. В. (1870-1926)——有名なボルシエヴィクの一人、一八九〇年ブルスネフ。  
サークルにおいて革命的活動を開始した。十月革命の後には主として外交官および外國貿易人民委  
員部の組織者として活動した。——上卷一六三、三〇六、三〇七、三六五。下卷三三〇、三三二、  
三三三。

クラスツィニ Крастынь Дала (Мена Егорова)——上卷五四八。

クラスノフ Краснов ——下卷一五一、一五二、一五三、一八三。

グラドネフ Граднев И. (Закс)——ボルシエヴィク、合法的ボルシエヴィキ新聞『ズヴェズダー』の指

導者の一人、一九二六年『レニングラード』反對派に参加し、第十五回大會によつて黨から除名  
された。——上卷四四五。下卷四四九、四五〇。

クリヴェンコ Кривенко ——上卷五九。

クリグァフ Кривов ——上卷三六九。

クリコフ Куиков ——下卷五七〇。

グリゴリエフ Григорьев ——下卷二二九。

クリチエフスキー Кричевский В. Н. (1866-1919)——日和見主義的理論の『經濟主義』の理論  
家の一人、この流派の機關紙『ラボーチエ・ディエロ』の編輯者。第二回大會後は黨において何  
等の役割をも演じなかつた。——上卷九四、一〇三。

クリツマン Крицман ——下卷一六四、二六一。

グリネヴィツキー Гриневицкий П. П. (1858-1881)——人民の意思派テロリスト、一八八一  
年三月一日爆彈によつてアレクサンドル二世を暗殺し、その際彼自身も致命的な重傷を負うた。  
死刑された。——上卷四三。

クリマノフ Климанов ——ブルスネフ・グループの労働者、ペテルブルグにおける最初の社會  
民主主義サークルの組織者の一人。——上卷七五、七六。

グリュム Grimm Robert (1881生)——戦争時代におけるスウイス社會黨の書記、チンメルワルド

會議およびキーンタール會議の議長。——上卷五一六。

クリューコフ Крюков ——下卷五七。

クルイレンロ Крыленко Н. В. (1885生) ——ボルシエヴィク、一九〇五年以來の黨員。十月革命の積極的參加者、ドッホーニン將軍が人民委員會の指令に服従することを拒絶した後、最高軍司令官となつた。現在は司法人民委員。全ソ聯邦共産黨中央統制委員會委員。——下卷七五。

クルイロフ Крылов ——上卷五四九。

クルジジャンフスキー Крижановский Г. М. (1872生) ——一八九三年以來革命運動に参加、第二次黨大會以來ボルシエヴィク、有名な實踐者および組織者、全ソ聯邦共産黨中央委員會委員。最初の電化十年計畫(ゴエルロ)の作成者の一人、現在教育人民委員部次長。——上卷八七、八九、一六二、一六八。下卷二五一。

クルブスカヤ Кривская Н. К. (1869生) ——有名なボルシエヴィキ黨員。九〇年代からレーニンの死に至るまで彼の最も親しい協力者および援助者であつた。全ソ聯邦共産黨中央委員會委員および教育人民委員部次長。——上卷八七、一二〇、三〇七。下卷四四五、五〇〇。

クレインボルト Крайнов ——上卷五五〇。

クレスチンスキー Крестинский Н. И. (1883生) ——共産主義者、古い黨活動家、一九〇三年以來の黨員。反動時代にはボルシエヴィキの合法出版所『ブリボイ』の組織に参加し且つ『ブラウダ』

において活動した。一九一八—一九二一年財政人民委員。一九一七年全ソ聯邦共産黨中央委員會委員。一九一九年から一九二一年まで中央委員會書記。ブレスト講和の談判の時にはトロツキの立場の支持者。一九二一年労働組合討論の時にはトロツキの立場の支持者。一九二一年から一九三〇年までドイツ駐劄ソヴェト大使。現在では内務人民委員部次長。——下卷九〇。

クレマンソー Clemenceau G. (1841-1929) ——フランスの大政治家。反動的なフランスのブルジョアジーの指導者にして世界帝國主義戦争の鼓吹者の一人。數回首相となつた。ヴェルサイユ平和の創造者の一人。ソヴェト・ロシアの非和解的敵およびソヴェト聯邦に對する干涉の積極的鼓吹者。——下卷四九八、五〇七。

クレメル Кремер А. И. (1865生) ——ブンドの創立者の一人およびロシア社會民主労働者黨第一次大會の組織の一人、この大會において中央委員會へ選舉された。一九〇五年の後政治から退いた。一九一九年再びポーランドのブンドに参加し、極右的立場を取つた。——上卷九六。

クレメンスキー Кременский ——上卷五四三。

クロイゲル Kreuger ——下卷六五〇。

クロバトキン Куропаткин 上卷一九三。

グロマン Роман В. П. ——メンシエヴィク、經濟學者、ソヴェト聯邦國家計畫委員會舊幹部會員。反革命的メンシエヴィキ組織の組織者および指導者にしてメンシエヴィキ中央委員會『聯邦



局』員。ソヴェト國家機構の責任ある活動家であつたから、國民經濟の種々の部門の計畫化の領域における直接的妨害活動のために勤務上の地位を利用した。最高法院で有罪を宣告された。——下卷六二九。

グード Gueude J. (1845-1922) —— フランス社會黨の創立者の一人、第二インターナショナルの最大の指導者、戦前には左翼に屬してゐた。帝國主義戦争の初め以來自己の革命的過去を激しく裏切り、ブルジョアジーと『神聖同盟』を結び、祖國防衛のブルジョア政府に参加した。——上卷五一三、五四〇。下卷三六一。

ケレンスキー Керенский A. Ф. (1881生) —— 社會革命黨員、二月革命と十月革命との間の多くの聯立政府の首班。十月革命によつて顛覆されて國外へ逃亡した。白衛軍暴動と帝國主義的干渉計畫の鼓吹者の一人。——上卷二三五。下卷一三、六五、六六、六八、六九、七一、七五、九八、九九、一〇一、一〇三、一一一、一一三、一一八、一二〇、一二二、一四五、一五二、一八四。

コーガン Koran —— 上卷五七。

コサレフ Kocapeв —— 上卷四一三、下卷六八二。

コシオル Kocиop B. —— 下卷三〇二、三五七。

コシオル Kocиop G. —— 下卷一六四。

コッパン Kopp A. P. —— 右翼社會革命黨員、テロリスト、社會革命黨中央委員會委員。十月革命

後プロレタリアート革命の指導者に對する多くのテロリスト行爲を組織した。一九二二年右翼社會革命黨事件において死刑を宣告され、禁錮に代へられた。——下卷七六。

コトフ Kотов B. A. (1885生) —— 共產主義者、一九一五年以來の黨員。一九一九年黨ソコロニチエスキー地區委員會書記。クロンシュタット叛亂の清算の参加者。一九二五年黨モスクワ委員會書記。第十五回大會において中央委員會委員に選舉された。『右翼反對派』の参加者。一九二九年中央委員會十一月總會において反對派からの脱退を聲明し、自己の右翼日和見主義的誤謬を承認した。——下卷五七〇。

コノヴァロフ Коновалов —— 下卷一一三。

コノブレフ Коноблева 下卷二〇四。

コマロフ Комаров Н. П. (1886生) —— 共產主義者、一九〇九年入黨。一九二一年ペトログラード非常委員會議長。一九二五年から一九二六年まで西北地方執行委員會議長。一九三〇—一九三一年最高國民經濟會議幹部會員。全ソ聯邦共產黨中央委員會委員。ロシア共和國公共事業人民委員。——下卷四一八。

コラロフ Кораров. B. (1877生) —— 有名なブルガリヤの革命家、後に共產黨と改稱されたブルガリヤ労働社會民主黨『少數派』の指導者。コミンテルン執行委員會幹部會員。——上卷五四三。

ゴーリッキー Горький М. (A. M. Пешков) (1868生) —— 極めて天才的な、世界的に知られたプロ

タリア作家、ロシアにおける革命運動の發展を大いに促進した。二つの革命の中間期には『フベリョード』派に共にイタリーのカプリ島において黨學校を組織した。國際的反動に對して積極的に闘争した。『工場史』および『内亂史』の組織者。——上卷三七三、四一〇。下卷一一九。

ゴリデンベルグ Гольденберг —— 下卷一一九。

コルシュ Korsch —— 下卷四八一、四八四。

コルチャック Колчак —— 上卷一六。下卷二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二二〇、二二〇、二二二。

コルニコフ Корнилов —— 下卷六二、九九、一〇〇—一〇五、一〇七、一一〇、一一一、一一二。

コレガエフ Колераев —— 元左翼社會革命黨指導者、今日では共產主義者。司法人民委員として人民委員會議の一員であつた。一九一八年七月左翼社會革命黨員によつて組織された暴動の後、社會革命黨から脱退した。一九一八年十一月ボルシエヴィキ黨に加入した。現在では經濟的活動に従事してゐる。——下卷一五七。

ゴーレンフ Горева В. И. (Гольдман) (1874生) —— 有名な社會民主主義者、嘗てボルシエヴィキに参加し、一九〇六—一九〇七年にはロシア社會民主労働者黨中央委員會委員、後メンシエヴィキに移り、徹底的に清算派、防衛的主戰論者であつた。一九二〇年メンシエヴィキと分離した。——上

#### 卷四一四。

ゴロシチニキン Голосинкин Д. —— 老ボルシエヴィク、一九一二年ロシア社會民主労働者黨ブラグ會議の参加者、この會議において中央委員會へ選舉された。全ソ聯邦共產黨カザン州委員會書記であつた。全ソ聯邦共產黨中央委員會委員。——上卷四五四、四五七。

コロンタイ Колонтай А. М. —— 下卷三三、七五、九〇、一六四、二八二、二八三、二八五、三〇三。

#### サ 行

サヴェリエフ Савельев М. А. (1884生) —— 老ボルシエヴィク、文筆家、經濟學者。一九〇三年以來の黨員。一九一七年以後黨活動および科學的活動に従事してゐる。——上卷四四八。下卷一六四。

ザストラフスキー Заславский Е. О. (1840-1878) —— 七〇年代の最も有名な革命家の一人、『南露労働者同盟』の組織者および指導者。獄中で死んだ。——上卷四七—四八。

ザスリッチ Заслыч В. И. (1851-1919) —— 『労働解放團』の参加者および組織者。第二回大會以來メンシエヴィキに、その後清算派におよび社會排外主義者に参加した。戰爭中は極端な防衛主戰論的立場を取つた。——上卷五五、六五、一一二、一六二、一六九、一七〇、二三四、三七六。

サファロフ Сафаров Г. И. (1891生)——共産主義者、ジャーナリスト。一九〇五年以來革命運動に参加。一九〇三年以來の黨員。ブレスト講和時代には『左翼共産主義者』第七回および第八回黨大會の参加者。ロシア共産黨第十回大會における決議権を有する代議員。一九二二—一九二六年には『レニングラードスカヤ・ブラウダ』の編輯者。第十四回大會の時代には新反對派の支持者、第十五回大會によつて反對派ブロックの支持者として黨から除名された。自己の誤謬を認め一九二八年五月三十日全ソ聯邦共産黨中央統制委員黨參與會の決定によつて黨の隊伍に復歸せしめられた。コミンテルンにおいて活動してゐる。——下卷一六四、二二二、三〇一、四二四、五三〇、五四四。

サブロノフ Сапронов Г. В. (1887生)——元共産主義者。一九一二年から一九二七年まで黨員であつた。一九二〇年ハリコフ革命委員會議長。一九二〇年に反對派グループ『民主主義的中央集權』を主宰した。『サブロノフ』派の名で知られた『十五人』の左翼反對派グループを主宰した。一九二五—一九二七年における反對派ブロックの積極的参加者。自己の分派的活動中明かに反革命的な立場に轉落した。第十五回大會によつて黨から除名された。——下卷一六四、二二九、二四一、三五七、三六一、四七五、五〇〇。

ザポロジツ Запорожен ———上卷八九。

サモイロフ Самойлов Ф. И. (1882生)——労働者、ボルシエヴィク、一九〇三年以來の黨員、第四

國會議員。一九一四年他のボルシエヴィキ議員と共にシベリアへ追放された。一九一七年流刑地から歸つた後、種々の黨活動および行政的活動をなした。——上卷四七八、五三三。

サルキス Саркис ———下卷四四二、四四五、五四四。

ザルツキ― Залцкий П. А. (1887生)——ボルシエヴィク、一九一六年末黨中央委員會局員であつた。一九二七年トロツキスト反對派の隊伍における積極的活動の故に黨から除名された。自己の誤謬を承認した後、再び黨に復歸せしめられた。——上卷五三八。下卷七、三〇一、四一七、四二四、四三五、五四四。

ザレジスキ― Залеский В. ———ボルシエヴィク、戰爭中黨のベテラブルグ委員會の成員、第四回黨大會の参加者。——上卷五五四。

サンバ Samba M. ———上卷五一三、五四〇。

シエラヴィン Шеравин ———下卷五〇〇。

ジエリャポフ Желябов А. И. (1851-1881)——『人民の意思』黨の組織者および指導者、その執行委員會委員、そのテロリスト行爲の主要指導者。一八八一年三月一日のアレクサンドル二世の暗殺事件のために處刑された。——上卷五八。

シエナ Шена В. В. ———元ソ聯邦國立銀行管理部長、メンシエヴィク。メンシエヴィキ中央委員會『聯邦局』の妨害活動の組織者および指導者の一人。銀行業務の領域において妨害行爲を實現し、

そこにおいて信用の正しからざる分配を意識的に行ひ、時宜を得た方策を採らないことによつて信用改革の實行を覆へした。——下巻六二九。

シエルグノフ Шергунов В. А. (1867生)——老ボルシェヴィク、金屬工、ペテルブルグ『労働者階級解放闘争同盟』の創立者の一人。現在老ボルシェヴィキ協會で活動してゐる。——上巻七五、八八。

ジェルジンスキー Дзержинский Ф. Я. (1877-1926)——ポーランド社會民主黨の最も古い活動家およびボルシェヴィキ黨の最も偉大な活動家の一人。一九一七年十月における武装暴動の組織に關する指導的な五人の一人。十月革命後黨中央委員會委員、全露反革命取締非常委員會および合同國家保安部長、その後内務、交通人民委員およびソヴェト聯邦最高經濟會議議長。——上巻三〇六。下巻五〇、五六、九〇、一一三、二〇二、二〇八、三四六、四一八、四六六。

シチエドリン——Шерин 上巻二〇三。下巻四八二。

シドロフスキー Шидловский Н. В. (1843-1907)——上院議員、一九〇五年『労働者の不満の原因調査』委員會議長に任命された。労働者委員によつて委員會に提出された多くの要求に對して、政府は委員會の解散を以て答へた。——上巻二五八。

ジノヴィエフ Зиновьев Г. Е. (1883生)——一九〇一年以來社會民主主義的活動の参加者。第二回黨大會の後ボルシェヴィキに参加した。十月革命の準備中にも、同じくまたソヴェト權力のその

後の時期にも一再ならず大なる動搖とレーニンの立場や黨の一般方針からの離脱を暴露した。一九二七年トロツキー派の反黨的プロククの組織者として中央委員會および黨から除名された。一九二八年自己の誤謬を認め黨員として復歸せしめられた。一九三二年リューティンの反革命的グループとの連絡および黨の欺瞞の故に再び黨から除名された。——上巻一六九、四〇四、四〇九、四一二、四一四、四二二、四四五、四四八、四五七、四六三、五四三。下巻五〇、九〇、一一四、一一五、一一六、一一八、一一九、一二〇、一五四、一五五、一七八、二二六、二二二、三〇〇、三五三、三五四、三六六、三八九、三九一、三九二、三九三、四〇八、四〇九、四一〇、四一四、四一七、四一八、四一九、四二〇、四二四、四二六、四三四、四三六、四四三、四四六、四五〇、四五二、四五三、四六〇、四六一、四六二、四七七、四七九、四八〇、四八二、四八三、四九〇、四九四、四九七、四九八、四九九、五〇八、五一一、五二二、五二九、五四四、六七八、六七九。

シユタキソフ Шагин А. С. (1853-1902)——一八九一—一九〇二年時代における内務大臣。最も反動的なツァールの官僚の一人。社會革命黨員バルマシェフに暗殺された。——上巻一八四。

シハインゲルマン Scheidemann Ph. (1865生)——右翼ドイツ社會民主主義者。戦争の初め以來ドイツ社會民主黨の國家主義派の指導者。一九一八年十一月革命の時には君主制を救はうとした。君主制の倒壊の後國民全權者會議——『ドイツ社會主義共和國』臨時政府——に参加し、あらゆる手段によつてドイツの革命的プロレタリアートに對して闘争した。——上巻二三五、五一四。

シャウミャン Шаумян G. P. (1878-1918)——最も有名なボルシェヴィク、一九〇〇年以來革命運動に参加。コーカサスにおけるボルシェヴィキの活動を指導した。十月革命の後コーカサスの反革命運動取締非常委員に任命され、バクーにおけるソヴェト権力の樹立のために強度の闘争を行った。ソヴェト権力がバクーにおいてイギリス人の援助の下に右翼社会主義者ブロックによつて顛覆された後、二十五人の他のバクーの委員と共に銃殺された。——上卷三〇七。

シャエヴィチ Шаевич ——警察の手先、オデッサにおけるズバトフ的『金屬労働者組合』の組織者。——上卷一一五、一一六、五五六。

シャゴフ Шаров H. P. (1882-1918)——労働者、ボルシェヴィク、第四國會議員。他のボルシェヴィキ國會議會と共に一九一四年シベリアへ追放され、一九一七年精神病者となつて流刑地から歸つた。——上卷四六四、四七八。

シャツキン Шакин J. A. (1902生)——共産主義者、一九一七年以來の黨員。一九一七年から一九二六年までロシア共産青年同盟中央委員會および國際共産青年同盟中央委員會の責任ある活動家。全ソ聯邦レーニン青年同盟中央委員會の書記であつた。第十五回黨大會以來中央統制委員會委員。スィルツォフ——ロミナージエの右翼的『左傾的』ブロックへ参加の故に、一九三一年黨中央統制委員會の中から除名された。ソ聯邦消費組合中央聯合の中で活動した。——下卷六二一、六二二。

シャーニン Шанин ——下卷四三二、四六七。

シャロフ Шаров ——下卷五〇八。

シャンツァン Шанцер B. J. («Марат») (1867-1911)——ボルシェヴィク、職業的革命家、一八九五年以來の黨員。一九〇五ボルシェヴィキのモスクワ組織を指導した。一九一一年國外から歸つて逮捕され、警察の手術室で死んだ。——上卷四二二。

シュヴァルツ Шварц G. (1879生)——老ボルシェヴィク、職業的革命家、鑄物工、一八九九年以來の黨員。十月革命の後責任ある黨および經濟機關の地位にあり、鑛山労働者組合長であつた。全ソ聯邦共産黨中央委員會委員、ソヴェト聯邦中央執行委員會委員。——上卷四一三、四五四。

シュヴァルツマン Шварцман ——上卷四五七。

シュキリヤトフ Шкирятов ——下卷五七、三〇四。

シュテインベルグ Штейнберг И. З. ——左翼社会革命黨の指導者。司法人民委員として人民委員會議に参加した。國外へ亡命した。——下卷一五七。

シュミット Шмитт ——下卷六八〇。

シュリヤトニコフ Шурятников ——上卷四二二。

シュリャブニコフ Шляпников A. P. (1883生)——黨中央委員會ロシア局員、帝國主義時代には黨の一般方針に對して反對派として進出した。十月革命後労働人民委員に任命されたが、十一月

十七日、他の右翼ボルシェヴィキと共に人民委員會議から退いた。一九二〇—一九二一年には労働組合運動の活動家であつたが、『労働者反對派』の頭首となつた。第十回黨大會後も引續いて黨に對する反對派的闘争の参加者であつた。そして最後に、一九一七年の革命に關する自己の文學的著作において黨および革命のメンシェヴィキ的評價を與へた。一九三三年黨の肅清に際して全ソ聯邦共產黨の隊伍から除名された。——上卷三八四、五三八。下卷六、七、一五六、二八二、二八五、二八六、三〇一、三〇三。

シヨットマン Шотман А. В. ——老ボルシェヴィキ、労働者、一八九九年『労働者階級解放闘争同盟』において革命的活動を開始した、第二回黨大會の参加者。一九一七年十月の後經濟的活動に従事してゐる。第八回黨大會以來、中央統制委員會委員、ソヴェト聯邦中央執行委員會委員。——上卷四六四。下卷七六。

シヨーツン Шорин ——下卷二二三。

シヨルダニヤ Жордания Н. Н. (1869生) ——シヨルジア・メンシェヴィキの指導者、一九〇七年ロシア社會民主労働者黨中央委員會委員、一九二二—一九一四年の八月ブロックの指導者の一人。一九一八—一九二〇年、シヨルジア・メンシェヴィキ政府の首腦として、ボルシェヴィキに對する共同闘争のためにデニキンと協定を結んだ、——現在は亡命者、ソヴェト權力の熱烈な敵手。——上卷四一四、四六九。

シヨールヌ Jaures Jean (1858-1914) ——フランス社會主義運動の指導者の一人、この運動において極左翼を占め、軍國主義に對して執拗な闘争を行つた。世界戦争の前夜排外主義者ヴィレンに暗殺された。——下卷四九五。

シリヴィン Силивин М. А. ——上卷一六八。

スィルツォフ Сыров Г. И. (1893生) ——共產主義者。一九一三年以來の黨員。一九二七—一九三〇年には全ソ聯邦共產黨中央委員會委員、一九二九—一九三〇年にはロシア共和國人民委員會議長。第十六回大會當時およびその後、ロミージェと共に、右翼日和見主義の綱領の上に立つところの反黨的右翼的『左傾的』ブロックを宣言した。全ソ聯邦共產黨中央委員會の中から除名された。現在經濟的活動に従事してゐる。——下卷六二一、六二二。

スヴァーリン Souvarine B. ——フランスの社會主義者、戦争中には中央派、フランス共產黨の成立の後その黨員となり、一九二二年には共產インターナショナル第四回大會の代議員であつた。第四回大會の後再び社會民主主義的立場に復歸し、反共產主義的宣傳を行つた。一九二六年コミンテルン執行委員會は、反革命的宣傳の故に、共產インターナショナルの隊伍から彼を決定的に除名した。トロツキーの鮮明な支持者および共產インターナショナルとソヴェト聯邦に對する闘争に關するトロツキーの主要な協力者の一人。——下卷四八一。

スヴェルドロフ Свердлов И. М. (1885-1919) ——ボルシェヴィキ黨の最も偉大な活動家の一人、優

秀な組織者。多年監獄および流刑地にあつた。一九一七年四月以來、黨中央委員會委員。第二回ソヴェト大會からその死に至るまで全露中央執行委員會議長。——上卷一二九、一三〇—一三二、四五七。下卷一二、五六、五八、八二、九〇、一二三、二〇四。

スコベンフ Кривошеин М. И. (1885生)——共產主義者、嘗てメンシェヴィクであつた。一九一四年夏には有名なバクー罷業の指導者の一人であつた。第四國會に選出され、そこにおいてメンシェヴィキのフラクションに参加した。戦争中にはカウツキー派。二月革命の後ベトログード・ソヴェト執行委員會委員、臨時聯立政府員——労働大臣。コルニロフ暴動の後(九月五日)臨時政府から去つた。十月革命の後自己の以前の見解を非常に變へ、『ベトログラード労働組合聯合』において活動した。一九二二年全ソ聯邦共產黨に加入した。一九二八年以來ロシア共和國利権委員會議長および中央利権委員會委員。——下卷二一、六五、六六、九二。

スコロバドスキー Кривошеин И. ——下卷一八三。

スタソフ Стасова Е. А. (1873生)——婦人ボルシエヴィキ、職業的革命家、一八九八年以來の黨員。種々雑多の責任ある黨の活動をした。中央委員會書記であつた。一九三〇年以來中央統制委員會黨參與會員、モップル中央委員會議長。——上卷一六八、三〇七、四五七。下卷九〇。

スターリン Сталин И. В. (1879生)——ボルシエヴィキ黨およびコミンテルンの指導者にして理論家、レーニンの仕事の協同者、最良の弟子および繼承者。一八九七年以來革命運動に参加。一

九〇〇年以來黨のチフリス委員會の指導的な成員の一人。一九〇一年にはバツムにおける多くの同盟罷業を指導した。一九〇二年に逮捕され、一ケ年の拘禁の後シベリアへ追放された。分裂の時(一九〇三年)以來外コーカサスのボルシエヴィキの先頭に立つて地下的新聞『ポリバー・プロレタリアタ』の發行を指導し且つ第三回黨大會の召集を準備した。タンメルフォルス會議(一九〇五年)、第四回(一九〇六年)および第五回黨大會(一九〇七年)の参加者。度々の逮捕と追放の後中央委員會は同志スターリンをペテルブルグの活動に移した。一九一二年ブラーグ會議において缺席のまま、中央委員會委員に選舉された。第四國會のボルシエヴィキ・フランクションの活動および新聞『ズヴェズダー』と『ブラウダ』を指導した。一九一七年には中央委員會長に選任された。一九一七年五月政治局の成立と共にその成員となる。一九一七年七月事件およびレーニンの地下への潛入の後、第六回黨大會を指導した。十月革命においては暴動の指導に關する指導的中央部に入つた。十月革命の後民族人民委員(一九一七—一九二二年)および労働監督局人民委員(一九一九—一九二二年)。内亂時代には共和國革命軍事會議員。主に戦線にあつた。コルチャック、デニキンおよびユードニッチの白衛軍に對する闘争とその粉粹との計畫の作成は彼の直接の指導の下に行はれた。一九二二年以來黨中央委員會書記長。一九二五年以來コミンテルン執行委員會委員。同志スターリンの指導の下に黨は反革命的トロツキー主義および右翼日和見主義を粉粹した。同志スターリンは、ソヴェト聯邦における社會主義の勝利のため、世界プロレタリア革命

の勝利のための闘争において黨および労働者階級を指導してゐる。マルクス——レーニンの學説は多くの問題（一國における社會主義の勝利、尖鋭な階級闘争の情勢の下における無階級社會の創造、農業の集團化、社會主義的工業化）について、同志スターリンによつて發展せしめられ且つ繼承された。レーニン主義に關する基本的な理論的著作は同志スターリンのものである。——

上卷七、一四、二二、七一、七二、八二、一六九、二〇四、二三一、二五一、三〇三、三〇七、三四五、四二二、四二五、四三三、四四八、四五二、四五七、四六三、四六五、四六九、四八四、四八七、四九八、五六三。下卷一一、一二、二六、二七、四七、五〇、五三、五四、五九、六七、七一、七四、七五、八二、八三、八四、八五、八六、九〇、九二、九七、一〇一、一〇五、一〇九、一一三、一一四、一二二、一二三、一二五、一二六、一二七、一三三、一三五、一三八、一四五、一五九、一六五、一七八、一九〇、一九五、二〇五、二〇七、二一四、二二〇、二二二、二二二、二二九、二三二、二五二、二五五、二七六、二八六、三一五、三三〇、三四〇、三四三、三四四、三六六、三九〇、三九八、四〇二、四一〇、四一五、四一八、四二二、四二七、四三六、四三九、四四二、四四五、四四七、四四八、四五九、四八六、四八七、四九〇、四九二、四九四、五〇五、五三三、五一八、五二五、五三〇、五三一、五三六、五五〇、五五一、五五三、五五四、五五九、五六〇、五六二、五六七、五七二、五七三、五八二、五八三、五八四、五八七、五八八、五九〇、五九一、五九八、六〇一、六〇二、六〇三、六〇四、六〇六、六〇七、

六〇八、六一一、六一二、六一四、六一五、六二四、六四三、六四四、六四六、六四八—六五〇、六五四、六六五、六六八—六七三、六八二、六八三、六八四、六八五、六八六、六九一、六九三。

スタルノフ Сталков B. B. (1869-1925)——技術家、『労働者階級解放闘争同盟』に参加した。

一八九八年逮捕されて、レーニンと共にミンスクへ追放された。——上卷八七、八九。

ステクロフ Стелков Ю. М.——共產主義者、文筆家。オデッサにおける最初の社會民主主義サークルの組織者の一人。戦争時代には防衛的主戰論者。二月革命の後にはノヴォジズニ派。十月革命の前夜我黨に加入した。十月革命後一九二五年までソヴェト聯邦中央執行委員會『イズヴェスチヤ』の編輯者。多くの會期の中央執行委員會および全露中央執行委員會委員。社會主義史および革命運動史に關する多くの著作の著者、それらの中には多くの誤謬が犯されてゐる。雑誌『ソヴェトスコエ。ストロイテリストヴォ』の編輯者。一九二九年以來ソヴェト聯邦中央執行委員會所屬教育委員會議長。——下卷一八、一九、二二、一一九。

ステバノフ スクヴォルツォフ Степанов-Квирцов Н. Н. (1870-1928)——共產主義者。最も古い黨員。一八九一年以來の革命運動の參加者。歴史家、經濟學者および文學者。マルクスの『資本論』その他の諸著作のロシア語への翻譯者。一九二六年から一九二八年までレーニン研究所長であつた。一九二五年以來『レニングラードスカヤ・ブラウダ』の責任編輯者、その後ソヴェト



聯邦中央執行委員會『イズヴェスチヤ』の責任編輯者。第十四回黨大會以來中央委員會委員。——  
下卷四四九。

ステファシキン Степанкин —— 下卷五七。

ステファノヴィチ Стефанович —— 上卷五三。

ステン Стен —— 下卷六七九。

スタコフ Стяков П. —— 下卷一六四。

ストルニツェン Стрелин —— 上卷三九五、三九六、三九七、四〇四。

ストルーヰツィ Струве П. В. (1870生) —— 九〇年代には合法的マルクス主義者、一九〇五年の革命においては、右翼カデット、十月革命の後には白衛軍の進出の参加者にして鼓吹者、デニキンの『特別協議會』およびウランゲルの白衛軍政府の成員。白衛兵の粉碎の後には亡命者、王黨。—— 上卷七九、八一、九四、一九五、二五一。

スノーデン Snowden Ph. —— 上卷五一六。

ズバトフ Зубатов С. В. (1864-1917) —— ロシアにおける『警察社會主義』の鼓吹者および組織者、モスクワ保安課長。—— 上卷一一二、一一四—一一六。

スハノフ Суханов Н. Н. (1882生) —— メンシェヴィク。二月革命後ペトログラート・ソヴィエト執行委員會委員であつたが、そこにおいてステクロフと共に臨時政府の構成について國會委員會

と協議を行ひ且つ協定を結んだ。その後協調主義的新聞『ノーヴァヤ・ジズニ』の編輯者であつた。ベルリンにおいて『ロシア革命の覺書』を出版し、その中で十月革命の小ブルジョアの評價を與へてゐる。ソヴィエト經濟機關において活動した。一九三〇年逮捕され、一九三一年メンシェヴィキ反革命的組織の指導者の一人として有罪を宣告された。—— 下卷二一、一一九。

スバンダリヤン Свандариян —— ボルシェヴィク、ブラীগ會議において選出された黨中央委員會委員。—— 上卷四五七。

スミルガ Смирнов И. Т. (1882生) —— 共產主義者、一九〇七年以來の黨員。一九一七年四月黨會議において中央委員會委員に選舉された。一九一七年十月前にはフィンランドにおいて活動し、フィンランドの陸軍、海軍および労働者委員會議長であつた。内亂時代には赤軍の指導的な活動家、共和國革命軍事會議員。内亂の終結後最高國民經濟會議における指導的活動に参加。一九二三年にはトロツキスト反對派に参加し、その指導者の一人であつた。第十回大會によつて積極的トロツキ派として黨から除名された。一九三〇年一月自己の誤謬を認め後黨に復歸せしめられた。經濟的活動に参加した。中央アジア國家計畫委員會の指導的活動家。—— 下卷九〇、四一九、四六三、四九八、五四四。

スミルノフ Смирнов И. И. —— 元共產主義者、古い黨員。内亂時代には東部戦線の革命軍事會議員、第五軍革命軍事會議員、その後中央委員會シベリア局員。コルチャックの撃破の後シベリ

ア革命委員會議長。一九二一年には黨ベトログラード委員會議長。郵便電信人民委員であつた。一九二三—一九二七年にはトロツキスト反對派の参加者、次いで『聯合反對派』の支持者。積極的な反對派活動の故に一九二七年黨から除名された。一九三〇年自己の誤謬を認め後黨の隊伍に復歸せしめられた。一九三三年二心ある故を以て再び黨から除名された。——下卷三五七、四一九、四七三、四七五、五四四。

スミルノフ Смирнов (Фомка) ——上卷四五七、五四九。下卷五七。

スミルノフ Смирнов А. В. ——下卷六七九、六八〇。

スミルノフ Смирнов В. ——下卷一六四、二三九、三五七、五〇〇、五〇三。

スリモフ Суримов А. Е. (1890生) ——老ボルシエヴィク、一九〇五年以來の黨員。現在は全ソ聯邦共産黨中央委員會議員、全露中央執行委員會議員およびソヴィエト聯邦中央執行委員會議員。

一九三〇年以來ロシア共和国人民委員會議長。——上卷三六五。

スレブコフ Слещков ——下卷四〇七、六七九、六八〇。

ゼウマン Зевин Я. (1887-1918) ——一九〇四年以來社會民主主義運動に加はり、一九一四年以來ボルシエヴィキ。ソヴィエト外コーカサスの積極的な活動家。一九一八年二十六人のバターの委員の一人としてイギリス人に銃殺された。——上卷四一三。

ゼーヴェリッング Severing K. (1879生) ——ドイツの社會民主主義者。一九二〇年にはプロシヤ

の内務大臣、共産主義運動の鮮明な敵の一人。共産黨に對する幾多の法律の起草者。ドイツの労働者の革命的進出の鎮壓者。第二インターナショナルの指導者。——下卷一九三。

セドイ Седой В. Я. (Дитвин) (1874生) ——老ボルシエヴィキ、一八九三年以來革命運動に参加。

一九〇五年十二月モスクワにおける武装暴動の参加者。内亂の参加者。——上卷二七九、三〇七。

ゼムリャチカ Землячка Р. Г. (1875生) ——婦人ボルシエヴィク、有名な黨員にして組織者、九〇年代から革命運動に参加した。第二、三回およびそれ以後の黨大會の参加者。多数派委員會議員。現在全ソ聯邦共産黨中央統制委員會議員。——上卷一六四、一六八、二〇四。

セメノフ Семенов ——下卷一八六、二二六。

セレブリャコフ Селебряков А. П. (1888生) ——共産主義者、一九〇五年以來の黨員。一九二二年ブラーグ黨會議の参加者。一九一九年から一九二一年まで全ソ聯邦共産黨中央委員會議書記。一九二一年労働組合討論の時には『調停』の、次いでトロツキの政綱の支持者。一九二三—一九二四年にはトロツキスト反對派の指導者の一人。一九二六—一九二七年には反對派ブロックに屬した。一九二七年積極的な分派的な分裂主義的トロツキ主義的活動の故に黨から除名された。一九三〇年トロツキ主義から離れて黨に復歸せしめられた。——下卷三五七、五〇八、五四四。

ゼレンスキー Зеленский И. А. (1890生) ——老ボルシエヴィク、一九〇六年以來の黨員。一九二二—一九二四年モスクワ委員會議書記、その後全ソ聯邦共産黨中央アジア地方委員會議書記。現在ソ

グイエト聯邦中央執行委員會および全ソ聯邦共產黨中央委員會委員、消費組合中央聯合管理部長。——上卷五四九。

ソコロニコフ Сокольников Г. Я. ——一九〇五年以來の黨員、一九一〇—一九一一年にはメンシエヴィキ和解派グループの成員。世界戦争中にはトロツキー派の『ナーシエ・スローヴォ』の寄稿家。一九一七年に黨に採用された。内亂時代には有名な軍事的活動家。第六回大會（一九一七年）において黨中央委員會委員に選舉された。イギリス駐劄ソグイエト大使であつた。一九二五年には『新反對派』に、一九二六—一九二七年には聯合反對派ブロックに屬した。一九二七年反對派から離れた。現在外務人民委員代理。全ソ聯邦共產黨中央委員會委員候補者。——上卷四一六。下卷九〇、二二二、三一一、三一六、四一九、四三二、四六七、四八三、五〇〇。

ソコロフスキー Соколовский А. М. ——メンシエヴィク。メンシエヴィキ中央委員會『聯邦局』員。その活動がソグイエト權力の顛覆に向けられたロシア・メンシエヴィキの革命的組織の參加者。原料五ヶ年計畫、特に棉花に關する計畫作成の領域における妨害者。——下卷六二九。

ゾフ Зюв ——下卷五〇〇。

ソリン Сопин В. ——下卷一六四。

ソロヴェエフ Соловьев ——下卷四九九。

## タ 行

ダヴィッド David E. (1863生) ——ドイツの社會民主主義者、經濟學者。最も有名な修正派。戰爭中はドイツ帝國主義の熱烈な擁護者。——上卷一一一。

ダニシエフスキー Данишевский К. X. (1884生) ——老ボルシエヴィク、第五回大會においてラトヴィア人の中から中央委員會へ選舉された。現在は經濟的活動に従事してゐる。——上卷四一四。

タラツタ Таратута В. К. (1881-1926) ——ボルシエヴィク、ロシア社會民主労働者黨の創立以來のその黨員。一九〇九年から一九一九年まで亡命。亡命から歸還の後種々のソグイエト經濟組織において活動した。——上卷四二二。

ダン Дан Ф. И. (1871生) ——メンシエヴィズムの指導者の一人、ボルシエヴィキおよびソグイエト權力の狂暴な敵手、國外におけるソグイエト權力に對する干渉者の誹謗的カンパニヤの鼓吹者、メンシエヴィキの國外機關紙『ソチアリスティチェスキー・ヴェーストニク』の編輯者。——上卷一七二、一九四、三三七、四〇四、四一八、四六八。下卷八二、一一八、六三〇。

チエルヌシエフスキー Чернышевский Н. Г. (1828-1889) ——經濟學者にして輝かしい文學批評家、六〇年代の革命運動の指導者。經濟學（『ミル註解』）および小説（『何を爲すべきか？』）に關する多くの大著作の著者。一八六二年逮捕され、懲役に處せられ、殆どその最後に至るまで

監獄および流刑地にあつた。——上卷二九、三八、三九、四三。

チェルノフ Чернов В. М. (Ларенин) (1876生)——社會革命黨員。社會革命黨の指導者にしてイデオログ。一九一七年の聯立政府における大臣であつた。十月革命の後はソヴェト權力に對して積極的な闘争を行つてゐる。——上卷三九八、五四三。下卷六五、六六、六八、六九、七三、七八、九二、一一三、三〇三。

チェルノマゾフ Черномазов М. Е. (1882生)——ボルシェヴィキ黨内において活動し、ペテルブルグ『ブラウダ』編輯部に接近してゐた。間もなく挑發者として嫌疑を受け、一九一二年秋活動から遠ざけられた。二月革命の後警保局のアルヒーフが研究のために利用されるやうになつた時、チェルノマゾフの挑發者の活動は文獻的に確認された。——上卷三九八、四五二。

チェレミンソフ Черемисов ——下卷一二二。

チネノフ Чиненов ——下卷五七。

チヘイゼ Чхедзе Н. С. (1864-1926)——メンシェヴィク、第三および第四國會議員。一九一七年二月から年末までペテルブルグ労働者および兵士代表ソヴェト議長、第一會期全露中央執行委員會議長、ブルジョアジーとの聯立の支持者。一九一八—一九二一年ジョルジア憲法議會議長。國外に亡命した後、ソヴェト聯邦に對するジョルジア・メンシェヴィキの闘争を支持した。——上卷五一八。下卷二一、三四、六六、七五。

チヘンケリ Чхенкелі А. И. (1874生)——ジョルジアのメンシェヴィク、第四國會議員。一九一八—一九二一年ジョルジア『民主』共和國の外務大臣。現在は亡命者、ソヴェト聯邦に對して積極的に闘争してゐる。——上卷四六四。

チャバエフ Чапаев ——下卷二〇五。

チュグリン Чугрин ——上卷四二二。

ツィシコ Тышко Л. (Порихес А.) (1867-1919)——ポーランド社會民主黨の創立者の一人。一九〇七年ロンドン大會に参加した。ボルシェヴィキに参加し、中央委員會委員候補者に選舉された。反動時代には和派に参加した。帝國主義戦争時代にはドイツで活動し、カール・リーブクネヒトと共に『スバルタクス』團を設立した。一九一九年シャイデマンの命令によつて逮捕され、裁判なしに獄中で殺された。——上卷三二三、三八二、四一四、四八九。

ツェトキン Zetkin Clara (1856-1933)——數十年間に亙る革命的なドイツ社會民主主義婦人、國際労働者運動の最も古い活動家の一人、國際婦人書記局書記長およびコミンテルン執行委員會委員。一九一六年『スバルタクス』團の組織に親しく参加し、その最後に至るまでドイツ共産黨の最も活動的な黨員であつた。——上卷四四七、四七四、四九四。

ツェレツェリ Церецели П. (1882生)——メンシェヴィキの有名な指導者。第二國會議員。戦争中は防衛的主戰論者の指導者の一人。ケレンスキの聯立政府に参加し、郵便電信大臣の地位を占め

た。メンシエヴィキ的シルジョアにおいて目立つた役割を演じた。白色亡命者、ソヴィエト聯邦の非和的敵。——下巻二一、六五、六六、六八、七三、七八、八二、九八、九九、一一三。

ツガン＝バラノフスキー Туган-Барановский М. И. (1865-1919)——經濟學者、合法的マルクス主義の『代表者』の一人、次いで自由主義者の陣營へ轉落した。内亂時代にはウクライナ中央會議政府に参加した。——上巻七九。

ツラティ Turati F. ——上巻五一六。

デイチ Деич J. F. (1855生)——社會民主主義者、第二回大會の後メンシエヴィク。一九一七年、ブレハーノフによつて指導された防衛主義的社會排外主義グループ『エディンストヴ』に参加した。——上巻五三、五五。

テオドロヴィチ Теодорович И. А. (1875生)——老ボルシエヴィク、職業的革命家、文筆家、革命的ナロードニキ主義に關する多くの著作の著者。一九二八年以來農民インターナショナルの書記長。現在は雑誌『カートルガ・イー・スミルカ』の編輯者。——上巻三〇七。下巻一五六。

デスニツキー Десницкий В. А. (Сргов) (1878生)——一九〇九年前にボルシエヴィキに参加。一九〇九年黨活動から離れた。一九一七年には新聞『ノーヴァヤ・ジズニ』の指導者の一人であつた。——上巻三〇六、三〇七、四一一。下巻一一九。

デニキン Деникин ——上巻一六〇。下巻七六、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、

二二〇、二二九、二三〇。

デルブシエフ Дербашев ——下巻一五六。

テレシチェニコ Терещенко ——大銀行家および製糖工場主、一九一七年における第一次臨時政府の藏相、後外相。帝國主義的政策と『勝利の最後まで』の戦争の支持者。——下巻二一。

テレンティエフ Терентьев ——下巻五七。

デン Ден ——上巻一一五。

ドーズ Daves Charles ——アメリカの將軍、法學者。北米合衆國の副大統領であつた。『ドーズ案』の起草者であつた。——下巻四一〇。

ドットフ Дотлов ——陸軍大佐、オレンブルグのカザック部隊長。十月革命後、一九一八—一九一九年にウラルにおけるソヴィエト權力に對する武装闘争の積極的な参加者および指導者。赤軍に撃破されて、東南ステップに退却し、そこからドットフ派の遺物はトルキスタンへ移り、トルキスタンにおいて決定的に清算された。——下巻一一二、一八三。

ドゥナエフ Дунаев E. A. (1877-1919)——ボルシエヴィク、ロシア社會民主労働者黨ストックホルム大會の参加者、その後の時期における積極的な活動家。——上巻三〇七。

ドゥバンフ Дубанов Ф. В. (1845-1912)——モスクワ總督、一九〇五年モスクワにおける十二月武装暴動の鎮壓を指導した。——上巻二七一。

ドブロヴィンスキー Дуловинский П. Ф. (Иннокентий) (1877-1913) — 最も有名なボルシェヴィクの一人、天才的な宣傳者および組織者、職業的革命家、度々逮捕追放された。『和解派』ボルシェヴィキであつた。最後にトゥルハン地方へ追放され、自殺した。——上卷一六四、四一二、四一四、四二五、四二六。

ドガドフ Догалов А. И. (1888生) — 一九〇五年以來ボルシェヴィク、労働組合の組織者、パリにおける黨學校の聴講者であつた。現在全ソ聯邦共産黨中央委員會およびソヴィエト聯邦中央執行委員會委員、外コーカサス地方統制委員會議長。上卷四一三。

ドドノフ Додонова — 上卷五四九。

ドブロウオリチエスキー Добропольский — 下卷二一四。

トムスキー Томский М. П. (1880生) — 石版印刷工、一九〇四年以來のボルシェヴィク。一九一八年以來全ソ聯邦労働組合中央會議幹部會員、第二回労働組合大會以來右中央會議議長。一九二八年以來右翼反對派の指導者の一人であつた。一九二九年政治局における聲明によつて自己の誤謬を承認した。現在では國立出版所を管理してゐる。——上卷四二二。下卷四四三、四五六、五四〇、五四九、五七〇、六〇八、六〇九、六八〇。

トルストイ Толстой Л. И. (1828-1910) — ロシア文學および世界文學の最も有名な代表者の一人。彼についてはレーニンの諸論文参照、『エル・エヌ・トルストイ』、全集、第十四卷、四〇〇

— 四〇三頁。『エル・エヌ・トルストイと労働者運動』、同上、四〇四—四〇六頁。『エル・エヌ・トルストイと彼の時代』、全集、第十五卷、一〇〇—一〇三頁。『ロシア革命の鏡としてのレフ・トルストイ』全集、第十二卷、三三二—三三五頁。——上卷四三八。

トルストフ Толстов — 下卷一八三。

トルベツキー Трубецкий — 上卷二七〇。

トルマチェフ Толмачев — 下卷六七九。

ドレツキー Доренский В. — 下卷一六三。

トレポフ Трепов А. Ф. (1855-1906) — モスクワ警視總監、一九〇五年一月九日の後ベテルブルグ總督、次いで内務大臣、黒百人組的虐殺の鼓吹者、革命運動の最悪の敵。——上卷一八三。

トロツキー Троцкий Л. А. (1879生) — 一九一七年前にはロシア社會民主黨の隊伍において中央派的流派——メンシェヴィズムの變種の頭首であつた。二つの革命の中間期に反ボルシェヴィキ的『八月』ブロックを組織した。一九一七年第六回黨大會においてボルシェヴィキに加入した後、一時自己のメンシェヴィキ的見解を隠蔽したが、この見解は十月革命の勝利の後完全に展開された。一九一七年から一九二七年まで、『共産主義の中の分派』たるトロツキー主義は、黨のレーニンの方針に對して鬭争を行ひ、すべての反對派グループの先頭に立ち且つそれらを鼓舞した。トロツキーは一九二七年末全ソ聯邦共産黨の隊伍から除名された。ソヴィエト聯邦の國境外における地

下の反ソヴェト活動に投げ出されて、ソヴェト聯邦の社會主義建設および全共產主義運動の明瞭な敵となつた。トロツキー派はソヴェト聯邦およびコミンテルンに對する闘争における國際ブルジョアジーの先頭部隊となつた。——上卷一二七、一四〇、一五一、一六三、一六九、一七一、一七三、一七四、一七六一—一七九、二二四、二二五—二三二、二四〇、二七三、三二〇、三三二、三三三、三七六、四〇九、四二二—四二六、四二七、四二八、四三四、四四七、四四八、四五四、四五七、四五八、四六五、四六六、四六七、四六九、四七一—四七七、四八七、五一二、五一六、五一七、五一八、五一九、五二四、五二六、五三〇、五四一、五四三。下卷四二、四四、五五、七〇、七四、七五、八六、九〇、九三—九七、一一七、一二五、一二六、一二七、一六六、一七二、二二一、二二三、二四七、二五一、二五二、二七四—二七八、二七九、三〇二、三〇三、三〇四、三二四、三三〇、三三六、三三八、三四五、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六七、三七一、三八六—三九三、四〇八、四〇九、四一一、四一三、四二〇、四二五、四二八、四二九、四三二、四四六、四四八、四五九—四六三、四七七、四七九、四八三、四八六、四九〇、四九三、四九四、四九五、四九六、四九七、四九八、四九九、五〇七、五〇八、五〇九、五一一、五二二、五二七—五三一、五四四、五四五。

ドロブニス Дробинис Я. П. (1881生)——共產主義者。一九〇六年入黨。一九二一年ドネツ縣執行委員會議長。『民主主義的中央集權』のグループの支持者。その後トロツキスト反對派への参加

者。一九二七年黨から除名された。自己の誤謬を認め後黨へ復歸せしめられた。——下卷二四一。

トロヤノフスキー Прогиновский ——上卷四六三。

## ナ 行

ナコリヤコフ Накориков ——上卷三〇七、四二二。

ニコライ・ロマノフ Николай Романов ——上卷九一、五六一。下卷一〇、一三、一四。

ニコラエフ Николаева К. ——下卷五〇〇。

ニコリスキー Никольский А. А. ——有名なメンシエヴィク、二月革命當時メンシエヴィキおよび社會革命黨員の協調主義的陣營において大なる役割を演じた。——上卷三二二。

ネクラソフ Некрасов ——下卷一一一。

ネフスキー Невский В. П. (1876生)——老ボルシエヴィク、文筆家、九〇年代以來革命運動に参加。十月革命の後、交通人民委員およびスヴェルドロフ大學講師。現在レーニン公開博物館長。

——上卷四四五。下卷五六。

ノヴィツキー Новичкий ——上卷一一四。

ノヴゴロドツェフ Новгородецкая Т. ——老婦人ボルシエヴィク、ロシア社會民主労働者黨ストツク

ホルム大會の参加者。——上卷三〇七。

ノギン Горин В. П. (1878-1924)——最も古いボルシエヴィキの一人、九〇年代末革命運動に参加した。反動時代には和解派ボルシエヴィク。十月革命の準備期および十月革命の後には右翼日和見主義的立場を占めた。十月革命の後には経済的活動を指導した。——上卷一六八、四二五、四二六、四二八、四二九、五四六。下卷三七、九〇。一一三、一五五、一五六、一五八。

ノスケ Noske Gustav (1868生)——ドイツの右翼社会民主主義者。一九一八—一九一九年およびその後数年間におけるドイツの革命運動の野蠻な鎮壓の故に労働者から『獵犬』といふ名稱を得た。——上卷二三五。下卷一九三。

ノスコフ Носков В. А. (1878-1913)——有名なイスクラ派、第二回黨大會においては多数派の支持者。分裂の後和解主義的立場を取り、多数派に對して闘争を行つた。一九〇五年の革命の後積極的な革命的活動から退いた。——上卷一六二。

ノリンスキー Лоринский ——労働者、最初の社会民主主義者サークルの参加者。——上卷五七。

## ハ 行

バウアー Bauer Otto——下卷一三五、二一六、四八六。

バウマン Bayman H. S. (1873-1905)——有名な革命家、ボルシエヴィク。『イスクラ』のエージェンツト。第二回黨大會の代議員。『イスクラ』の輸送および頒布技術の主要な組織者の一人。一九〇五年の示威運動の時黒百人組に殺された。バウマンの葬儀は素晴らしい革命的示威運動に轉化した。——上卷二六五。

バカエフ Бакаев ——下卷四九八。

バキチヤ Бакича ——下卷一八六。

バクーニン Bakunin M. A. (1814-1876)——ロシアの革命家。無政府主義者、十九世紀の後半の初めにおけるヨーロッパの無政府主義運動の事実上の頭首であつた。組織破壊的活動の故に一八七二年マルクスの強い要求によつて第一インターナショナルから除名された。——上卷三九、四〇。

バザロフ Базаров В. (В. А. Рыннен) (1874生)——経済學者、評論家。第二回大會における黨の分裂の後ボルシエヴィキに参加した、反動時代にボルシエヴィキから離れ、十月革命時代にはボルシエヴィキに對して激烈なるカンパニヤを行ひ、反革命的活動を行つた。一九三〇年メンシエヴィキ。國際主義者の反革命組織事件について檢舉された。——上卷三〇七。下卷一一九。

ハーゼ Haase Hugo (1863-1919)——ドイツ社会民主黨の指導者の一人、中央派。——上卷五一六。



バダエフ Бадаев А. Е. (1883生)——錠前工、一九〇四年以來の黨員、ペテルブルグ労働者出身の第四國會議員。屢次全ソ聯邦共産黨中央委員會およびソ聯中央執行委員會委員。モスクワ消費組合聯合會長。——上卷四六三、四六四、四七八、五三四。下卷五〇〇。

バツーン Баруин Н. Н. (1877-1927)——ボルシエヴィク、黨史家、九〇年代の終りに革命的活動を開始した。——上卷四四五。

バナシユキン Панашкин ——下卷三五〇。

ハバロフ Хабаров ——上卷五五九。

バブシユキン Бабушкин Н. В. (1873-1906)——九〇年代の優れた労働者革命家、ロシア社會民主労働黨の組織者の一人、イスクラ派、ボルシエヴィク。レーニンによつて書かれた傳記、レーニン全集、第十四卷、三九六—三九九頁参照。——上卷八八、一二九、一三〇。

バルグス Папыс (А. А. Тельман) (1869-1924)——一九〇〇年代の初めドイツ社會民主黨において活動した。一九〇五年ロシアに歸り、第一ロシア革命に積極的に參加した。追放された。流刑地から再びドイツへ逃亡した。世界大戰時代には極端な社會排外主義者にしてドイツ帝國主義の直接の手先。——上卷一三三、一七七、二二五、二三〇、三七六、三八二。

ハルツリン Хартунн С. В. (1856-1882)——労働者、『北露労働者同盟』の主要な組織者の一人、八〇年代における専制政治に對する最も有名な戰士の一人。オデッサの檢事ストレリニコフ

の暗殺の故に人民の意思派として處刑された。——上卷四二、四九、五〇、五一、五八。

バルマシエフ Бармашев С. В. (1882-1902)——社會革命黨員、テロリスト、内務大臣シビヤギンを暗殺した。軍法會議の判決によつて處刑された。——上卷一八四。

ビシヤギン Писарин ——上卷四一三。

ビスマルク Bismark Otto (1815-1898)——『血と鐵』によつてドイツの民族的統一を達成したドイツ帝國の『鐵血宰相』。反動家。社會主義鎮壓法の起草者。——上卷六八、四九五。

ヒットラー Hitler ——上卷三二六。

ピタコフ Питаров П. А. (1890生)——最初は無政府主義者、一九一〇年ボルシエヴィキに參加した。一九一八年最初のウクライナ政府の首腦者。トロツキー主義に屬する故を以て第十五回大會によつて黨から除名された。一九二九年自己の誤謬を承認して全ソ聯邦共産黨員に復歸した。全ソ聯邦共産黨中央委員會委員、次いで重工業人民委員。——上卷五二八、五三八。下卷五〇、一六四、二二七、二二九、二五六、二八七、三五七、三六三、四一九、四八三、四九八、五三〇、六一一。

ピャトニツキー Пятницкий О. А. (1882生)——老ボルシエヴィキ、地下運動の技術および運搬の組織者。一八九八年以來革命運動に參加。一九〇三年以來ボルシエヴィク、十月革命の積極的參加

者。現在全ソ聯邦共産黨中央委員會委員、多年の間コミンテルン執行委員會書記。——上卷三五  
一。

ビュカナン Buchanan George (1854-1926)——ツァール・ロシア駐劄イギリス大使、ツァール政府  
および臨時政府の政策に對して巨大な影響を及ぼした。二月革命の後コルニコフ將軍およびカ  
デット黨を積極的に支持した。——下卷一〇〇。

ピルストスキー Пилсудский Ю. (1867生)——現代ポーランドの獨裁者。ポーランド社會黨の  
最古の黨員および指導者、その民族主義者的な翼——『右翼』を主導した。一九一八年權力を奪取  
し、『ポーランドの第一元帥』と自ら聲明した。ソヴェト・ロシアに對する一九二〇年の戦争の  
鼓吹者および指導者。一九二四—一九二六年一時政治的活動から退いた。一九二六年軍隊の援助  
によつて國內においてクーデターを行ひ、ファシスト獨裁を樹立した。今日ではポーランドの無  
制限な、全權的な獨裁者。——下卷五〇七。

ヒルファーディング Hirfending R. (1878生)——ドイツ社會民主黨の經濟學者、理論家、右翼日和  
見主義者。一九二三年にはシュトレーゼマン内閣における、一九二八—一九二九年にはミューラー  
の社會民主黨内閣における大藏大臣。——上卷五〇二。下卷二一六。

ピロノフ Пировов ——上卷二八。

ビンシュトク Виншток ——下卷九六。

ファベルケヴィチ Фаберевич (Левич) ——上卷四四五。

フィッシャー Fischer Ruth (1890生)——元ドイツの共産主義者。中央委員會委員、ドイツ共産黨に  
おける『極左翼』のイデオログであつた。コミンテルンの方針に對して鬭争し、それ故にコミ  
ンテルン執行委員會第七回總會によつてドイツ共産黨の指導部から放逐され且つ隊伍から除名さ  
れた。マスロフ——ウルバンスの背教者的『トロツキー派的グループおよび反共産主義黨』『レニ  
ンブンド』の組織者。マスロフ、ウルバンスその他と共に、ドイツのブルジョアジーと共に、ドイ  
ツ共産黨、コミンテルンおよびソヴェト聯邦に對して鬭争を行つた。——下卷四八四、四九六。

フィラモノフ Филимонов ——下卷一八三。

フィリップポフスキー Филипповский ——下卷二一。

フィン||エノタエフスキー Финн-Еногаевский ——下卷六二九。

フェドセエフ Федосеев Н. Е. (1871-1898)——最初のロシア社會民主主義者の一人、カザンにお  
ける最初のマルクス主義者サークルの組織者。自己の仕事に献身した革命家として、レーニンは  
彼を高く評價した。——上卷七六、八六。

フェドロフ Федоров ——下卷一五六。

フォルマーネ Volmar G. (1850-1922)——ドイツの社會民主主義者、日和見主義者、ドイツ社  
會民主黨の右翼の指導者の一人。——上卷一一一、四九五。

フォン・ヴァリー фон Бар——上卷一八二。

プガチョフ Пугачев Емельян——ドン・カザック、十八世紀の後半、農民の農奴的隷属の撤廢を目指した民衆運動の先頭に立つた。一七七五年モスクワで處刑された。——上卷二四、二六。

プーシキン Пушкин——上卷一一〇。

ブデョヌイ Буденный Г. М. (1881生)——共産主義者。赤軍の有名な活動家。赤色騎兵隊の組織者。一九一九年以來の黨員。内亂中には第一騎兵隊の指揮者。現在はソヴェト聯邦革命軍事會議員および赤軍騎兵監。農務人民委員部參與會員。ソヴェト聯邦中央執行委員會委員。——下卷二〇五、二一四、二二二、五八二。

ブハーリン Бухарин Н. И. (1888生)——一九〇年以來の黨員。帝國主義戰爭時代には多くの問題についてレーニンと一致しなかつた。ブレスト講和に關する意見の相違の時には『左翼』共産主義者の先頭に立ち、一九二〇—一九二一年の勞働組合に關する討論においては、最初は『調停的』立場を取り、事實上トロツキーのグループの見解を持つてゐた。その後黨の立場に立つたが、一九二八年黨の一般方針との彼の公然の不一致が始まり、それは忽ち右翼的偏向の日和見主義的政綱の中に定式化された。一九二九年十一月二十五日政治局における聲明によつて彼は自己の誤謬を承認した。全ソ聯邦共産黨中央委員會委員。——上卷五二八、五二九、五三八。下卷五七、八五、九〇、一六三、一七〇、一七八、一八一、二一六、二一七、二一八、二一九、二五六、

二五七、二六二、二七七、二七八、二八七、四〇七、四三七、四四二、四五二、五四五、五四九、五五三、五六一、五七〇、六〇八、六一一、六二五、六八〇。

ブノフ Бюнов А. Г. (1883生)——職業的革命家、一九〇三年以來の黨員。一九一二年中央委員候補者。一九一七年十月には暴動の指導に關する臨時革命委員會および黨中失部の委員。一九一八年三月以來ウクライナ勞農政府およびウクライナ共産黨中央委員會の一員となつた。現在全ソ聯邦共産黨中央委員會委員および教育人民委員。——上卷三〇七、四五七。下卷九〇、一二三、一六三。

ブプリコフ Буржиков——下卷九八。

ブラゴエフ Благоев А. И. (1859-1924)——ブラゴエフ・グループの名稱で知られたベテラブルグにおける最初のマルクス主義者サークルおよびロシアにおける最初の社會民主主義組織の一つの組織者。ブルガリヤに追放され、ブルガリヤ勞働者運動の組織について多くの活動をした。彼の發議によつてブルガリヤ社會民主黨『少數派』は一九一九年共産黨に再組織された。——上卷七四、七五。

ブラン Blanc Louis——下卷六七。

ブランキー Blanqui——上卷三七六。

ブランチング Branting K. (1860-1925)——スウェーデン社會民主黨の指導者にして第二インタ

ーナショナルの首領の一人、右翼日和見主義者、スウェーデンのブルジョア政府に入り、次いで一九二〇—一九二二年スウェーデンの社会民主黨政府の首班となった。——上卷二二五。

フランツ・フェルディナント Franz-Ferdinand ——上卷五〇五。

ブランドラー Brandler ——下卷三七一、四一四、四七六、四七七。

ブリヤノフ Бурьянов А. Ф. (1880生) ——タウリド縣出身の第四國會議員、社会民主主義者、旋盤工。何れに分派にも加入しないで、ボルシェヴィキとメンシェヴィキとの間を動搖し、一九一四年ブレハーノフ派となった。——上卷五一三。

ブルイギン Булагин ——上卷二五八。

ブルガコフ Булгаков С. Н. (1871生) ——『合法的マルクス主義』の代表者の一人で、その後僧侶になった。現在は白色亡命者。——上卷七九。

ブルスタレフ II ノサリ Хрусталева-Иосифъ П. С. (1870-1918) ——一九〇五年におけるペテルブルグ労働者代表ソヴェト議長、この事件によつて追放された。この時代にメンシェヴィキに参加した。間もなく革命的活動から退き、怪しげな金融業務に従事した。一九一七年の後、ウクライナにおいてスコロバドスキーやベトリュールを支持し、非合法的ボルシェヴィキ組織を迫害した。ソヴェト軍が到着した後明白な反革命家として銃殺された。——上卷三二七、三三二、三三三。

ブルスネフ Бруснев М. И. (1864生) ——ロシアにおける最初の社会民主主義者の一人、黨史上

彼の名を得た社会民主主義グループの組織者。上卷七五。

ブルデロン Bourderon A. (1850生) ——労働者、フランス社会黨員、帝國主義戦争時代には左翼的立場を取つた。——上卷五四三。

ブルフニャク Прухняк Э. ——上卷四一三。

フルムキン Фрумкин М. И. (1878生) ——ボルシェヴィク、一八九四年以來労働者運動の参加者、一九一七年の後ソヴェト組織において種々の責任ある活動をなした。一九二八—一九二九年右翼反対派に参加した。——上卷四四五。下卷五四八。

フルンゼ Фрунзе М. В. (1885-1925) ——老ボルシェヴィク、最大の黨活動家、内亂の最も有名な軍事的指導者および赤軍の組織者の一人。一九二五年からその最後まで共和國革命軍事會議長および陸海軍人民委員。勞農赤軍に大改革を行つた。——上卷三〇七。下卷二〇五、二二二。

ブレオブラジエンスキー Преображенский Е. А. (1886生) ——元共產主義者。文學者—經濟學者。第六回黨大會において中央委員會委員に選舉された。プレスト講和談判時代には『左翼共產主義者』第九回大會から第十回黨大會まで中央委員會書記。労働組合討論時代には『調停』の支持者、その後トロツキーの立場に合同した。一九二二—一九二七年にはトロツキスト反対派の理論家、一九二七年黨から除名された。一九二九年自己の誤謬を認め後黨員の権利を復歸せしめられたが、トロツキー主義的反革命的活動の故に再び除名された。——下卷八三、一六四、三五